

- - - エリザベス - - -

母、ソフィアが原因不明の病に冒され入院したのは一昨年夏のこと。闘病生活は一年半に及び、雪が降りしきる冬のある日、主治医にあとひと月と宣告されたのです。母は少しも狼狽えず

「そうですか、教えてくださってありがとうございます先生。あとは全ておまかせします」といって窓に視線を投げました。そこには冬枯れのポプラの枝に巣箱が置いてあり、四十雀のつがいが交互に顔を覗かせていました。母はそれを見ると優しい目で微笑み、その後深く呼吸をしました。私の目には彼女が悲しんでいるようには見えません。むしろ直ぐそこに近づいた安らぎを待ち望んでいるようです。私は無性に腹が立ちました。父ダニエルと兄アルフレッドは既にこの世を去り、私にとって家族といえるのは母だけなのです。娘一人残して逝かなくてはならないというのに何故こうも平然としてられるのか理解できませんでした。

「ママは怖くないの？」

薄々予想していた事とはいえ、それが現実となろうとする切なさに涙がにじみ、ハンカチを握りしめました。非難めいた言葉を母にぶつけてしまいました。本当はいたわらなくてはいけないと思っても、こみ上げる不安は感情の行き場を見失わせたのです。

「この日が来ることを知っていたから。それにダニエルもアルフレッドもいるもの、もう充分生きさせてもらったもの、何も思い残すことはない」

「私はどうなるのよ」

困らせているのは分かっていました。

「そうね」

母は言葉を探しました。

「心配よ。だって私の一番大切なかわいい娘だもの。それに孫の顔も見たかったけれど、もうそれは無理でしょ？だから、これが私に与えられた時間の長さ、御願い分かって、決して死に急ぐ訳ではないの」

母の言葉に死を真正面から受け入れる覚悟を知り、私はそれ以上追いつめる事など出来ませんでした。

告知を受けてから一週間後、母の世話をしているメイドのテレーザから会社に電話がありました。

「奥様がお嬢様に、お話ししたいことがあるので明日の午後に病院にお越し下さいとの事です」

翌日、私は仕事を朝のうちに慌ただしく済ませ、細々とした会議を延期し ST. Thomas 病院に向かいました。母は病院の敷地の中にある小さな離れで療養していました。そこはコンクリート造りの本館とは違い、焦げ茶色の三角屋根の愛らしい一軒家。いわば個室中の特別の個室。自宅と変わらぬ生活を送ってもらおうと、懇意にしている病院長にお願いし、入院当初からここで療養させてもらっていました。もちろん多額の費用がかかることは承知の上でした。しかし今それが出来る立場の私にとってなんの問題ではありませんでした。運転手を駐車場に待たせ、院内を通り抜け、離れへと伸びた回廊を急ぎました。実はもう30分も遅刻していたのです。大きな木の扉を開けるとどこからか声がしました。

「いらっしゃいませ、お嬢様、奥様がお待ちですよ」

テレーザが白と黄色のフリースの入った花瓶を抱えて階段を下りてきました。彼女はいったんそれを窓際に置き、エプロンで手を拭きながら忙しそうに奥へ入っていきました。私は花瓶越しに窓の外を眺めました。春がすぐそこに来ているのでしょうか、根雪が解け出しそうなほどさらさらかな日差しでした。私は最近母に会うとき少し神経質になっていました。しかし窓辺の光はそんな私の気持ちを和らげてくれました。階段を上がり、部屋のドアを二回ノックし

「ママ」

と呼びかけ、中からの返事を待たないうちに中にはいりました。

「はいってらっしゃい」

その言葉を聞く頃には後ろ手でドアを閉めていました。スエードのガウンを着た母がドレッサーの前で金の糸のようなご自慢のプロンドを丹念にすいていました。

「遅かったわね。待っててねすぐ済むから」

梳かし終えた髪をレースで束ね母はスッキリとした顔でこちらを向きました。

「どう？いいでしょ。さっきねテレーザにカットしてもらったのよ」

右手で束ねた髪をポニーの尻尾ように振る母、まるで少女のように戯けてみせる仕草の愛らしいこと。

「喉が乾いたから一緒にお茶にしましょう」

そこに何ともタイミング良くテレーザが部屋に入ってきました。手にはお盆に乗ったミルクポットと二種類のカップ。

「奥様、リボンとてもお似合いですわ」

「そう？ありがとう」

そう言われ嬉しそうに鏡を見直す母。テレーザは母に近づき手に持っていたものを見せました。

「奥様が言われたカップはこちらでしょうか？ご自宅から持って参りました食器類で奥様の言われるそれらしき物はこちらかなと」

テレーザは形がいびつなカップを母に手渡しました。

「そうこれこれ、面倒かけたわね。ありがとう」

母はそれを手に取り図柄を確かめるとベッド脇のテーブルの上に置きました。

「これねママが4・5才の時に外婆さまが作ってくださったの、あなたにあげるわ」

確かにどこかで見たことはあったけれど母の手作りとは知りませんでした。私は何気なくそれを手に取ると取っ手の作りがあまりにも儂く感じ、急いで底に手を充てました。

「使えるの？」

「私も怖くて子供の時に一度使ったきりよ」

母は笑いながら自分が愛用しているマイセンと、私の物となったそのカップにミルクを注ぎました。我が家でお茶といえば温かいか冷たいかの違いはあれ、いつもミルクでした。そして必ずといっていいほど手作りのジャムが落とされるのです。母が庭で育てたストロベリーに隠し味をくわえ作られるジャム、それは彼女ご自慢の一品でした。母はいつものようにスプーン一杯のジャムをミルクへ落とし、私の反応を楽しむようにかき混ぜました。次第に白から淡いピンクへ変る様をまるで自分の手品とでも言いたげです。カップから立ち上る湯気の向こうで微笑む母の眼差しは3・4になるうとする私を幼子に引き戻そうとします。けれど湯気のカーテンが消えてしまえば悲しいほど頬の瘦けた顔がそこにはありました。甘い香りが漂えば漂う程もうすくなくともかもが風のように消えてしまうのかと切なさが入り込んできました。泣くわけにもいかず押し黙ってしまった私の気持ちを母は敏感に感じたのでしょうか。

「心配しなくていいのよ、ちゃんとレシピも書き留めてあるから」

と抱き寄せてくれました。

「ええ」

私は浮かぬ返事をしました。

「なに？そんな顔ばかりして」

病の母にさとされる私、母の前では感情を押し殺すことなど出来ませんでした。

「あのね、あなたにお願いしたいことがあるの」

感傷に流されそうな私を母ははっきりとした口調でつなぎ止め語りかけてきました。

「なに？」

「家族ここに移り住む前のことであなたに話さなかった事があるの」

今度は私が返事に困りました。私が生まれる前のことは母からある程度、聞いてはありましたが、故意に抜け落ちた時間があるのは感じていました。しかしその訳は結婚当時の父に原因があったとテレーザから聞いていた為、敢えて聞きはしていませんでした。

「話したくないことは無理にいいわ、私だってママに秘密はあるし」

「その秘密ってハイスクールの時、親子ほども違う歴史の先生とつきあっていたことかしら？」

「知っていたの」

「あなたの友達はおしゃべりだったからね、でもそんなことはいいのよ」

「そんなことって」

「まだいってほしい？」

母はどこまで知っているのか、私は過去に頭を巡らした。

「女は秘密を積み重ねて生きているの」

母は何を積み重ねたと言うのでしょうか。普段そんな話をしない母がこの時は違う人に見えました。

これ以上母の口から自分の恥ずかしい過去をばらされたくない彼女の痛い場所をチクリと刺しまし

た。

「でなに？お父さんに泣かされた愚痴を今になって聞かせようというの？」

「私はそんなに執念深くないわよ」

母は動じませんでした。

「じゃなに？」

下を向きカップの縁を指でなでていた私が視線をあげると、そこには真剣な母の顔がありました。正直言って少し怖かった。

「あなた自身の過去でもあるの」

「まさか私が貰われてきた子供だなんて驚かすんじゃないでしょうね、止めてよ悪い冗談は」

「正真正銘、私の子よ、そしてアルフレッドもね」

「なら父親が違う人ってこと？嘘でしょ」

「本当は話さずにおこうと思っていたの。でも今のあなたをみているとやっぱり彼に会っておくべきだと感じたの」

否定されると思い、売り言葉に買い言葉のように返した問いでした。しかし返ってきた答えはブレーキの壊れた車のように私の脳を直撃しました。耳を疑うという喻えがありますが、この時の私の耳は何も聞こえなくなってしまいました。それはまるで時間が止まったようでした。

「彼って？」

母に尋ねたわけではなく、騒ぎ立てる空気に押され吐きだした言葉でした。しかし母は私のどんな言葉もすくい上げ答えようとしました。おそらく彼女も緊張していたのだと思います。

「今日まで私を死から遠ざけてくれた人、そしてあなたもよ、エリザベス」

母の言っていることがあまりにも唐突で意味が理解できません。

「今、自分が何を言ってるか分かっているの？私は眠れないくらい悲しんでいるっていうのに。こんな時になって話す事じゃないでしょ」

私はまくし立てました。しかし母はそれを止めようともしませんでした。

「今のあなたは壊れ始めているわ。でももうすぐ私は叱ってやれなくなる」

「またその話、第一壊れているのはママの方でしょ」

「何とでも言いなさい、母として娘に残していく愛よ」

母の目にうっすらと涙がにじみ声が震えていました。

「何も知りたくないわ。こんな時になってうち明けるのは、罪を胸にしまったまま逝くのに耐えられないからじゃないの。吐き出してしまいたいからじゃない」

死の縁にいる母を罵倒した。自分の卑しさに我慢できず私は部屋を飛び出しました。

結局その日は会社にも戻らずそのまま呆然と車に揺られ屋敷に帰りました。翌日からは病室にいても私の表情は頑なでした。ぱっくりと開いた心の傷から真っ赤な血がながれるのを必死に押さえるだけで精一杯。微笑もうとする事などあまりにも偽善的で、残された僅かな時間が母と私の一番悲しく辛い時となってしまいました。二人とも掛け替えのない存在だとわかっているのに、抱きあう事もできません。そんな母を私は恨みました。部屋の隅で俯き目を合わせようとしない私に、母は横になったまま言いました。

「あなたを産んで良かったわ」

か細い声は窓の外に吹く風にすぐにかき消されました。

それからひと月もしないうちに母はこの世を去りました。息を引き取る前の晩、もう意識の無い母の傍らで自分が知っている母の人生を振り返っていました。母ソフィアはイギリスの貿易商の家に三女として生まれ、18歳のときアメリカに暮らす父ダニエル・カレンのもとに嫁いできたのだと聞かされました。カレン家はアフリカに数々のダイヤ鉱山を所有する財閥で、その若きオーナーだった父を結婚相手に選んだのは当事者の母でなく祖母だったそうです。当時、婚姻は家と家の契約だった時代、親が娘の嫁ぎ先を選ぶのは至極当然の事だったのでしょう。父は北欧の貴族の血を引く端正な顔した美男子で、その翌年にはすぐ兄が生まれました。

跡継ぎとなるべき男子を産んだ母は、これでこの家にも自分の存在が芽吹いたと血の安らぎを覚えたと言います。しかし母の生活が平穏だったのは、兄が生れるまでの僅かな間だったといえるかもしれません。兄は姑に取り上げられるように乳母に預けられ、母が接する事ができたのは日に何度かの授乳の時だけでした。初めて産んだ我が子を自分の手で育てたいと幾度となく姑に頼んでみましたが、

「あなたはアルフレッドを産んでくれただけで十分よ。それに我が家を継ぐべき立派な男子に育てるには私や乳母の豊かな経験が必要な。あなたにはそれがないでしょ？心配しないでいいからあなたはカレン家当主の妻としてもっと教養を身につけなさい」

そう言われても二十歳そこそこだった母に言い返せるはずありません。父は父で最低限の役目は果たしたとでもいわんばかりに夜ごと出かけては、朝には違う香水の香りを漂わせ帰ってきたらしく、母はいつも大きなベッドにただ一人温もりを求めるように手を伸ばしていたといいます。そんな日々が一年ほど続き、それでも実家の祖母に心配をかけまいと耐えていた母、そんなとき覚えたのが野菜作りだったそうです。普通女性なら綺麗な花を育て窓辺を飾るのですが、母は広大な庭の一区画に自ら鍬を持ち芋・ニンジン・カブなどの根菜類や季節の果物の種を植え、隣には葡萄棚を作り、その世話に汗を流し辛いことを忘れたそうです。

「カレン家の婦人はいつも泥まみれといわれるからそんなことおよしなさい、みっともない。野菜ならいつでも好きなだけ手にはいるでしょ」

姑にいくらなじられても母はやめませんでした。というより止められなかったのです。だって週に一度程度のパーティー以外必要とされることのない母にとって、植物は唯一自分を必要としてくれる存在でした。もしそれをも取り上げられたなら自分が壊れてしまいそうだったからです。

そしてもう一つ心安げる場所が母にありました。それは町の外れにある孤児院でした。母は自分の作った農作物をもって事ある事に出かけたといいます。そこには両親を事故で亡くした子、初めから父親など無く娼婦の母親が病気になって手放された子、他国から売春目的で売られてきて逃げ出してきた子、そして生まれてすぐ孤児院に捨てられていた子など、まだあどけない瞳の奥に深い憂いを秘めた子供たちが母を待っていました。自分の子も満足に抱けない彼女にとって、愛に飢えている子供たちを抱きしめることは張った胸の母乳を分け与えるのと同じ事だったのかもしれない。子供の泣き顔、笑い声、そして握りしめた手の強さ、互いがもっとも必要としている物を求め、分け与えているようなそんな幸福な時だったのかもしれない。

「おばちゃん、あたし一度でいいから甘くて真っ白なクリームをついたケーキ食べてみたい」

「おばちゃんお昼寝一緒に寝て？」

「今度俺がおばちゃんの芋掘り手伝ってやるよ、そしたらいっぱい食べられるよね」

子供達と接するほどに彼らが如何に多くを耐えて生きているのかを知り、切なくなるといいます。子供なら当然求めるであろう願いを喉の手前で飲み込み、泣くまいと一層はしゃぎ、そして笑いかけてくる瞳、それにどれほど勇気づけられたか。当時を思い起こすその時の母の顔は穏やかでした。

「でも、かわいそうだわ」

その話を聞いて考えもなく言った私の一言に母は首を振りました。

「それはとても失礼な言葉なのよ」

「なら、なんていえばいいの？」

「確かに子供たちはよい状態の中で暮らしているとはいえないわ。でもね彼らなりに必死で生きてるの。プライドよりももっと切実な自分と戦ってね。そんな彼らに向かってもしあなたが『かわいそうね』なんて言ってご覧なさい、言われた方の立場の子供はどう？」

「どうって」

「自分の事は自分が一番よく知っているわ。でも自分をかわいそうな哀れな人間だと思いたい人なんていないの。そう言われてしまったら、つなぎ止めていた糸が切れちゃうのよ。涙止まらなくなるの、だから人は人を哀れんではだめ」

母の言葉には同じ弱者としての連帯感と敬意が滲み出ていました。

そしてそんな暮らしが三年ほど過ぎ、カレン家はオーストラリアに移り住む事になりました。当時オーストラリアでは金より価値を認められはじめたプラチナの鉱山が数多く発見され、世界の資本が吸い寄せられるように流れ込んでいました。父も会社が所有するアフリカのダイヤ鉱山の産出量が激減していて、なんらかの打開策を求められていたらしいのです。そこで幾つかのダイヤの鉱山を手放し莫大な資金も銀行から借り、オーストラリアのプラチナ鉱山を手に入れました。父はダイヤからプラチナへのシフトという賭にでたのです。そして本社をシドニー移し、自ら陣頭指揮をするために、所有していた広大な土地を引き払いオーストラリアに住もうとしたのです。

しかし一緒に暮らしていた祖母は移住に最後まで反対し、住み慣れたアメリカの地を離れることを頑なに拒否したといいます。60を間近にした祖母にとって、友人もいない未開拓の地に今更骨を埋める気にはなれなかったのも無理ありません。父は仕方なく自宅と庭、そして祖母が今までの生活を

維持するに困らないだけのものを祖母名義とし、たとえ会社に何かがあるとも祖母に火の粉がかからぬようにしてアメリカを後にしました。今考えれば父も必死だったのでしょう。

母は姑から兄を取り戻し、これでようやく家族そろって暮らせると、喜んで父のあとについていこうとしたそうです。しかし既に父は愛人に子供を産ませており、妻への愛情も冷め、これを機に離婚をし自由になりたいと祖母にもらしていたとテレーザが教えてくれました。言い忘れましたがテレーザとは母についていたあのメイドのことです。彼女は私が生まれる前からカレン家に奉公し、母を支えてくれたただ一人の理解者でした。私が母の歴史を知ったのも彼女からによるところが多く、母もそれを否定しなかったことを考えれば、母とテレーザは同じ価値観を共有していたといえるかもしれません。そのテレーザが言うには、姑もいる席で父は母に言ったそうです。

「君はまだ若い。アルフレッドは私が引き取るから、愛のない生活で一生を送るより国に帰ったらどうだい？私よりもっとふさわしい男性と出直す方が幸せなんじゃないかい。もちろん君には感謝している。離婚の歳にはそれ相当のものは与えるつもりだよ」

しかし母は涙を浮かべながら父の申し出をきっぱりと断ったそうです。

「あなたは私がこの家にきたときも、何も心配しなくていいと言われました。お母様も私に笑顔で『今日から私を本当のお母さんと思ってね』とおっしゃいました。今ここであれこれ愚痴を言うつもりはありませんが、私はここ何年かで学びました。私は私の思うように生きてます。カレン家の正当なる妻としてアルフレッドをこの手で育てます。私の愛しい子供を金で売り渡すつもりはありません。ダニエル、たとえあなたの愛が今私になくともかまいません。あなたは他の女たちを飛び回るのにいそがしく、本当の私をみていません。私は子を産む為の道具ではありません。私という人間をあなたが知らぬまま別れるのはプライドが許しません。だから離婚しません」

深いワインレッド色をしたスカートにポタリポタリと大粒の涙が落ち、そのシミが広がっていく光景をテレーザはよく覚えていると言います。さすがにその時の母の気迫に姑も父も圧倒され、それ以上何もいえなかったそうです。そして母の望み通り、親子三人と使用人の何人かをつれてオーストラリアに行くこととなりました。

しかしあとひと月で出発という間際になって母は病にかかり、入院を余儀なくされました。父は仕事の都合で出発を遅らせることもできず、病気の母がまだ幼い兄の面倒みられるわけでもありませんでした。ならば早く新天地に慣れさせようと父は兄を連れ、先にオーストラリアに旅立ちました。病気が治ったらゆっくりおいでといわれた母が焦らぬはずがありません。やっと勝ち取った物を自ら手放す事になりかねない。そんなことは決して避けなければならない。毎日見舞いにいったテレーザの目にはいつも窓の外を眺める母が痛々しく見えたそうです。

そして二月後ようやく退院の許可が下り、母は急いでオーストラリアに向かいました。その当時オーストラリアに向かうには北米から南米のチリに飛行機で渡りそこから客船に乗り渡航する方法と、イギリス経由でシナイ半島へ飛行機で飛び、そこから島々を渡る小さな定期便の船を乗り継ぎオーストラリアに向かう二つの方法しかありませんでした。旅行距離とすれば後者の方が遙かに長く辛い度でしたが時間的に前者より2日早くシドニーに到着出来る事が分かり、母は迷わずイギリス周りでオーストラリアに向かったそうです。

「ここからはさしてお話するような事はありませんよ」

とテレーザは口を濁しました。その時、話の流れが堰き止められたような違和感がありました。しかし疑問に思っても”これ以上踏み込んではいけません”とテレーザの顔に書いてあり、私も母の過去に漂う霧を払いのける事が怖くなりました。諦めた私の様子にテレーザはホットしたというような様子で言いました。

「オーストラリアに移り住まれてよかったのですよ、本当に。旦那様も奥様に優しくなられ、エリザベスお嬢様もお生まれになったし、本当に奥様と旦那様はお変わりになりましたもの」

確かに移住してからの仲のいい夫婦になったと昔から二人を知る者はいいました。何故そうなったのか私なりに考えてみました。一つは連れてきた愛人の子が移住して間もなく病死し、愛人がアメリカに帰ってしまったからかなとも思いました。しかしそれだけで離婚まで口にした夫婦が元に戻るとは考えられません。結局はテレーザが言えないその過去になにかあったと思わざるを得ませんでした。けれど聞けない以上秘密は秘密のままにしておこう、それがいいのだと自分に言い聞かせバンドラの箱を記憶の角に追いやりました。家庭の安定した父はそれから10年で傾きかけていた会社を建て直しました。そしてプラチナだけでなく投資価値のある鉱山を積極的に買収し、付加価値をつけ転売し巨万の富を築いたのです。その陰に貿易商人の娘として育った母の才能が、深く関与していたことを

認めない者はこの業界にいないでしょう。父に足りなかったものを母が補い、母の明るさが父の虚ろで曖昧な心を揺さぶったのでしょう。二人はようやく夫婦になったのかも知れません。それが証拠にこれまでに聞いた父の非情な仕打ちは、実は私にはぴんとこないのです。例えるなら歴史教科書の活字のようにただ書かれているだけの事。だって私は母に微笑む父しか見たことがなく、私も父に抱きしめられていた記憶しかないのです。

しかしそれも三年前の夏、終わりを告げました。父は兄アルフレッドといっしょに飛行機事故でこの世を去ったのです。ブラジルの鉱山を視察に自家用ジェット機で向かう途中、太平洋上で突然のエンジン停止にみまわれ、そのまま海面に激突し機体は大破したらしいのです。連絡を聞き私は現地向かいました。空から眺める海はキラキラと光り輝き、何事もなかったかのように凪いでいました。近くの島に流れ着いた機体の残骸も僅かで、まだどこかで父達の乗った飛行機が飛んでいるのではと思えたほどです。しかしそんな希望をうち消すように、父が愛用していたエルメスのアタッシュケースと、鮫に食いちぎられた機専用のライフジャケットが後日会社に送られてきました。もちろん母にそれを見せませんでした。しかし私の硬い表情をみて彼女も気づいたのでしょう。

「アルフレッドまでつれていかなくていいのに」

そう言うと部屋に閉じこもり何日も泣いていました。しかしその時私も父の会社で責任ある仕事を任されていたため、何もかも投げつけて母を慰めてはくれませんでした。

私はカレン家の正当な跡継ぎとして急遽、社長という重荷を背負うことになりました。兄のように父から帝王学を学んだことなど無い私にとって、それは真っ白な画用紙を渡されたに等しいものでした。案の定、直ぐに私を丸め込もうと社内で派閥の権力争いが始まり、まもなくそれは業績としてマイナスに作用したのです。母は、

「あなたの思うようにしなさい」

と言い、その時ばかりは頼りになりませんでした。しかたなく父の言っていたことを一つ一つ思い出しながら自分だけを信じて私は孤独と戦いました。そして四年、良くも悪くも私に逆らう者はいなくなり、一応の平穏は取り戻せた気がします。確かに暴君と言われるときもあります。しかしそうでなければ世界に何万人と社員を抱えた会社のオーナーとして、私のような若い女が存在できないのです。ある時、私に首を切られた取締役が『あなたはエリザベス 世だ』と捨てぜりふを残し部屋を出ていきました。今にも他国に滅ぼされそうだったイギリス。その弱き国を世界の帝国にのし上げた女王の事です。本来なら誉め言葉と喜ぶべきなのでしょうが、彼が言いたかったのは家臣の言うことも聞かず好き放題にするじゃじゃ馬と言いたかったのでしょうか。

しかし彼らは何も分かっていないのです。私がいかに多くを犠牲にしてこうしているかのを。上に立つことを余儀なくされた女はみんな男性のように素肌を鎧に変えていく。例え鎧の下で赤く満ちた月が溶け落ち、本能が叫び声を上げそうになっても、それを押し殺し、プライドだけ高い男達と無責任な女達の噛み合わない議論に頭を痛めなくてはならないのです。そんな状況で社長である私が愛、恋などと、そんなとろけそうな想いを口にすることはタブーでした。

しかし私も子孫を残さなくてはなりません。女として子をなす幸せを得たいなどと言う単純なものではなく、これほど苦勞して守っている会社を託す者が必要だったからです。けれど時間は少なくなっていくばかり。場末の女のように、一夜の男を探し身ごもるわけには立場的にいかないのです。結局は正式に婚姻するためにそれなりの相手を探さなくてはなりません。しかし私が結婚するという事は同時に私の会社も結婚するに等しいのです。誰が会社にとってもっとも利益をもたらし、リスクを回避できる相手なのか？私は条件に当てはまる男性を探しました。これは婚姻の名を借りた企業合併そのものです。そんな結婚を虚しくないかと聞かれたら私は顔を引きつらせたかもしれません。

とあるパーティーで、早くに結婚をした知人が胸元の開いたドレスを着て男に色目を使いながらバッグで口元を隠して私に言いました。

「どうせ数年すれば水道の蛇口のように男の物は下を向いたまま役に立たなくなるのよ、本能がそれなんだから、それこそ男の愛なんて、冷めるんじゃないよ」

それを聞いて感情に左右されない結婚が正解かなと思えるようになりました。とにかく跡継ぎを産むことだと。

そして相手に選んだのがタイにルビーの鉱山を所有し、我が社と肩を並べる売上高をほこる中国系企業の華僑ファン氏40才でした。彼は前妻と死別し幸運なことにその方との間にもお子さんがおられず、私と同じ悩みを抱えておられました。私の父なら他の女に幾らでも子供を作らせたのでしょが、ファン氏は奥様を愛しておられたのか、それとも男には珍しい理性の持ち主だったのか子供がい

ませんでした。私はカレン家の当主として彼との婚姻と緩やかな企業合併の話し合いに入りました。条件は二つ、子供は二人だけもうけること。そして互いの家の名を継がせること。無論合意内容は書面に残し法的拘束力を持たせること。彼と私の生殖機能にも問題ないと検査したうえで、昨年春、婚約をし、一年の準備期間を置いた今年、双方の会社の合併を期に正式に結婚することになっていました。

これほど明らかな政略結婚に社内部から異論がでるはずもなく、事は式当日に向けて進み始めています。しかし一人だけ悲しんでいる人がいました。それは今まさに死に逝こうとする母でした。父や兄の死から立ち直り、ようやく昔の明るさを取り戻していた母が、この話が進むにつれて時々寂しそうな目で私を見ていました。

「あなたはそれでいいの？好きなようにしていいのよ」

母は家のため会社のために結婚しようとする私を見ていられないというのです。本来なら家の血に拘るのは男より女。しかし母は私に自由に生きなさいと言うのです。

「あなたを会社に縛り付ける為に育てたんじゃないの。エリザベス」

その言葉は私が眠らせようとしていた憂いをこじあげようとしていました。

「もう決めたことなの」

私だって母の言うことが分からないわけではありませんでした。

「この家に生まれた定めとあきらめているわ。それに男と女の関係も変わってきているの」

「エリザベス、女は変わらない。あなたの言っているのは打算のための言い訳でしょ」

「ママだって、お婆さまに言われるがママパパと結婚したじゃない、あれだって打算でしょ」

母は私の右頬を叩きました。小さい頃はよくお尻を叩かれたものですが、女の子だからと母が私の顔を叩いたことは一度もありませんでした。その母が私を叩いたのです。

「あなたのように私は大人じゃなかったのよ。何もわからずこの家に嫁がされたの」

私もそれはよく知っていました。母の目からも涙がこぼれました。母は過去を私は今を、親子二人ともどうにもならぬ苛立ちに苛まれていました。

「悪く言うなら言いなさい。でも女なら愛した人の子供を産みなさい。じゃないと後悔するのはあなたなのよ」

「もう遅いは。私はそんなものどっくに捨てたの、代わりに」

「エリザベス、きっとあなたは子供に父親への不満を言うようになるわ。悲しいけど女は男の愛を鏡にしないと自分が女であることさえ自信がなくなる。永遠でなくていいかまわない、けれど本当に愛し合った証だけをあなたのお腹にやどしなさい、その子供があなたをいつか救ってくれる」

「もうそんなに私は若くないのよ」

もう母は何もいいませんでした。

しかし今、私が父の子ではないと知ると、何故あれほどまでに母が私の結婚という取引を嫌がったのか何となく理解できました。跡継ぎを産むためだけに嫁いだような母。それが済んだら父に捨てられようとした母、多分、自分にはなにもないと後悔したのでしょうか。復讐なのかそれとも本当に愛する人を見つけたのか分かりません。しかしそのどちらかの理由で私をあえて身ごもった。どちらにせよ母の苦悩の中で私は生まれたんだと感じました。だから同じような苦しみをあえて選ぼうとする娘を見ていられなかったのではないのでしょうか。窓の外が白々と明け始め、青い光がベッドで眠る母の顔を撫でていきました。次第に呼吸が浅くなり小指が僅かに動きました。ママ、あなたの人生は幸せだったのですか？私は母の頬に頬を寄せて温もりを確かめながら問いかけました。もしかしたらずっと苦しんでいたの？ヒバリが鳴きます。ママ、私は復讐の為に生まれたの？だから後悔してうち明けたの？ママは私を愛してくれた？愛なんてそんなに大切なもの？もう遅いとは解っていても母の名を呼びつづけました。もう少しあなたの娘でいたかった。

屋敷から4キロ東、なだらかな丘の斜面に墓地はありました。もう雪は溶け、雑草の芽が早春の僅かな日差しを余すことなく浴びようと、小さな葉を広げていました。広々としたその場所は眺めもよく、ピクニックの候補地にしたいくらいでした。私は真っ白な棺が父と兄の真向かいに埋葬されていくのを正視できず遠くばかりを眺めていました。大理石の墓の蓋が親しかった友人によってゆっくりと閉じられ牧師が最後の十字を切りました。

「ソフィア、永遠にあなたを愛しています」

そう刻まれた墓標は母が好きだったフリージアで埋め尽くされていました。余りにもお花畑のように綺麗すぎて不自然でした。みんな逝ってしまった。とうとう一人になってしまった。

父も兄も母も元気だった頃を思いだそうとしました。そこに登場する私は何も知らず無邪気に笑っていました。あれは偽りの上に成り立っていた幻だったのかもしれない。母に真実をうち明けられてから私は自分という存在に自信がもてなくなっていました。牧師が去り、参列者も駐車場へと続く一本道を黒蟻の行進のように帰っていきました。私はその場を離れがたく墓石に腰を掛け母に話しかけました。

「私やっぱり寂しい」

「しょうがないわね、ここにいるじゃないの」

「だって、もう一緒にお茶出来ないじゃない」

「いつまでこの子は甘えているんだろうね、それなら最後あんなに突っ張らなきゃいいのに」お尻の下で眠る母の声が聞こえるようでした。私たちの話を父も兄も聞いているのでしょうか。話していると素直になれました。

「ママ」

「いいたいことは解っているよ」

「教えて私をどうして産んだの？」

「それは自分で確かめなさい、私の過去をあなたがどう思うかによって答えは違ってくるわ」

「教えてくれないの？」

「私は自分の事を良くも悪くも言えないの」

「やっぱりその人に会ってこないとだめなのね？」

私は大理石の中に小さな貝の化石を見つけ、それを指でなぞりました。

「すべてをクリアーにするにはそれが最善の選択なの、もしその事実を知ってもあなたの結婚に対する考えに変わりがないのならママはもう何もいわない。それもあなたの人生だものね」

ただ流されるままに生きてきた私、無気力だったわけではありません。しかしこれほど自分を見つめたことなどありませんでした。そんな私に母は死という黒板に最後の宿題を書き残したのです。答えは幾通りもあると。どんな答えを私が持ち帰るのか母は見ているのでしょうか。フリージアの花びらが野を渡る風に揺れていました。青空を一羽の鳩が西に向かって羽ばたいていました。私の胸の中に勇気が湧いてきました。

「わかったわ、その人に会いに行ってくる、そして聞いてくる、何があったのか」

母の頷く声が聞こえたような気がします。私の中に生きている母を信じて見ようと思いました。

「お嬢様」

なかなか戻らない私を心配してテレーザが迎えにきたようです。

「今ね話をしていたの、喧嘩していたから仲直りをね」

「そうですか、奥さまも喜んでおられますよ、きっと」

テレーザは訝しがるわけでもなくニコリと笑い、小さなバスケットの中から木箱を取り出しそれを私に差し出しました。

「なに？」

「奥様にお葬式が済んだらこれをお嬢様に渡すよういわれておりました」

中を開けると手紙と地図、そして若き日の母の写真が納められたロケットが入っていました。

『エリザベス、ママはあなたを授かってようやく女になれたの。生まれてきてよかったとも思えた。人生ってこんなにおもしろいものだなんて想像もしなかった。さあお行きなさい、何があってもママを信じて、待っているわよ答えを、あなたのお尻の下で』

驚きました。母はこの手紙を書いたとき私がここにこうしている事を知っていたのです。

「奥様はお嬢様が大好きでおられましたからね、大抵のことはお察しでしたよ」

地図にはインドネシアの南、小さな島が赤鉛筆で丸く囲ってありました。

「ここなのね、その人がいる島は」

「お行きになるのですか？」

テレーザが私の肩に母のショールをかけました。

「うん」

「そうですか、さあお茶にしましょう。ポットを持ってきましたから、ここなら奥様も一緒です」

テレーザはそういってポットとジャムを取り出しました。草原でお茶をするにはまだ少し肌寒く感じ

ましたが。ジャムを落としたミルクは心も体も温めてくれました。いつもの母の味でした。涙が墓石を濡らしました。

葬儀から一月後、私は一週間の休暇を無理矢理取り、インドネシアの南、名もない小さな島に向かっていた。ジャカルタからセスナ機と定期便を乗り継ぎ目的地の一つ手前の島へ着いたのが昼の2時。ここから先、目的とする島への船は無いと定期便の船長に聞いていたので連れて行ってくれる漁船を探す事にしました。蒸し暑く生臭い魚の臭いのする港、時折亜熱帯特有のスコールが気まぐれに通り過ぎていきます。私は海から戻ってきた漁師に声をかけて回りました。このあたりの島々はつい十数年前まで欧州各国の領地として統治されていたせいか白人の移民が多く、英語を話す者、オランダ語を話す者など様々でした。しかしみんな決まって言うのは

「お嬢ちゃん、やめな。あんな島行くのは。楽しい場所は他にいくらでもある」

「何故ですか？」

と聞いても皆口をつぐみ教えてくれようとしません。気づいた時には日も暮れていました。歩き回るのにも疲れ、私はとりあえず今宵の宿を求めました。しかしここは漁業だけで成り立つ小さな島、めったに観光客など訪れないなのでしょう、宿は一件しかなく、悪いことに何かの事情でドアの前にはCLOSEの看板がぶら下がり営業していませんでした。途方に暮れた私は棒になった足だけでも休めようと数軒しかない酒場の一つに立ち寄りました。薄暗い店内には夜の稼ぎ時だというのに客が一人しかいませんでした。私は店の隅の古ぼけた丸いテーブルにバッグを置き

「ふう」

と息を吐き重い腰おろしました。

「何にします？」

女主人があくび混じりの声で注文を取りに来ました。

「あの、ミルクはありますか？」

「へへ？」

60近いのでしょうか、どっぷりした体格の彼女は手のひらを外に向けて首をふり笑いました。

「いくら閑古鳥鳴いているとはいえここは酒場だよ、表の看板見えなかったのかい」

「お酒は飲めなくて。他に何かお腹に残るようなものありますか？」

彼女は私の顔を覗き込みました。

「疲れてんだね、あなた、いいよ晩飯用に作ったスープとパンの残りあるからそれでもいいなら持ってきてやるよ」

「いいんですか？」

「ああ、ミルク注文する客にうちの酒はきつくて飲めないだろうからね」

そういうと女主人は店の奥に潜り、すぐさまおぼんに何かを乗せ大股歩きで戻ってきました。

「あいよ、こんなもんでいいかい」

厚切りのライ麦パンとチーズ、大きな皿には牡蠣とジャガイモと人参をトマトソースで煮込んだ鮮やかな赤色のスープが入っていました。

「さあおたべよ」

前掛けで皿の端にこぼれたスープをさっとふくと私の前に差し出しました。

「ありがとう、おばさん」

私は手を併せ神に食事の前のお祈りをし、ナプキンの上のスプーンを右手に持ちました。そして赤い液体をすくい上げゆっくりと口に運びます。舌先に広がる酸味と甘み、胃の中に灯る小さな火。

「はあ、美味しい」

「こんなもんでもそういつてくれるとうれしいよ」

「いいえとても優しい味」

「そうかい？あたしゃ料理苦手でね同じ物しか作れなくてね、亭主なんぞいつもぼやいてるよ、世の中にもっといろんな喰いもんあるだろうになつてね」

おかしい私は思わず口を押さえました。

「ゆっくりお食べな、もう客も来そうに無いから看板おろしてくるよ」

私は口の中をパンで膨らませていたためにそれに応えられず軽くうなずきました。

「最近是不漁で男どもは自分たちで作った密造酒でも飲んでるんだろ、商売あがったりだ」

そういうと彼女は店の外に出ていきました。多分ドアにかかっていたOPENの札CLOSEにした

だけなのでしょう。すぐに戻ってくるとカウンターでグラスを持ったまま寝ていた男の肩を叩きました。

「ほらあんた、今日も金無いんだろ、帰って寝なよ、まああんたに早く帰ってきて貰っても奥さんは喜ばないだろうけどね」

男は目を覚まし涎を袖でふきました。そしてハッキリしない言葉で悪態をつきました。

「うるせえ、こんな安酒飲んでやってるだけでもありがてえとおもえ」

「何言うんだい、つけのくせして大きな口叩くんじゃないよ、それとも今ここで払うかい？」

髭面のその男は返す言葉もなくばつが悪そうに椅子から腰を上げました。ふらつく足取りでドアに向かおうとする男を早く帰れとでも言わんばかりに彼女の大きなお尻が突き飛ばしました。

「ババアなにすんだ」

しかし男はそれ以上突っかかるでもなく、すごすごと店を出ていきました。

「男はしょうがないねえ、魚とれなきゃ他のことすりゃあいいのに後は何にもできないんだから、女はあれやこれや手休める暇もないってのに、まったくいい気なものさ」

彼女はテーブルの上に椅子を載せモップで床を拭き始めました。私はパンの一欠片も残すことなく全てのものを胃に収めました。そして彼女が最後に出してくれたコーヒーを片手に暫しの脱力感に身を委ねていました。

「ご馳走様でした、お腹いっぱいです、もう入りません」

片手でお腹を妊婦のようさすり、はしたない話ですが胃から空気が上がってきて音を立ててしまいました。それを見て彼女は笑いました。

「そうかい、よかったね、ところであんた、こんな何にもない島に何しに来んだい？上等な物着ているし品のいい香水の匂いもするよ、流れあるく娼婦はたまに見かけるけれどあんたみたいなお嬢さんは珍しいからね」

真っ黒になったままのモップを洗うでもなく適当に床を磨きながら時折こちらを振り返り彼女は話しかけてきました。食事をしたせいで私にも多少余裕が生まれていました。

「ここから南にある島にどうしても用事があって」

女主人も今までの漁師と同様に嫌な顔をしました。

「なんでまた？」

「ええ、実はつい最近母が亡くなったのですが、遺言でその島にすんでいる人に会いに行かなくちゃいけないんです」

「なんだいそりゃあ」

彼女は持っていたモップを壁に立かけると椅子を引き寄せ私の傍らに陣取りました。どこまで話しているものか言葉を選びながら母が私に託した願いを彼女に聞かせました。

「じゃあやっぱりいいとこのお嬢様なんだ。けど話からするとあんたのお母さんはあの島に行ったことがあるんだね」

そう言うと彼女は考え込んでしまいました。

「あの島に近寄ってはいけない事情でもあるんですか？実は誰も教えてくれないんです」

彼女の太い腕を掴み訪ねました。窓の外にはライトのような満月がこちらを覗き込むように光り輝いています。

「あの島はね、死神の宝石箱と呼ばれてるんだよ」

「死神の宝石箱？」

「ああ、こんな時代になって可笑しいと笑うだろ？でもみんな伝説に怯えてるんだよ」

そう言うと彼女は一つ咳をしました。なんでも嘘か誠か島には死に神が住んでいるらしく、夜になると島を抜け出し、美女をさらってきては人形にし島の洞窟に並べ眺めているというのです。話はそれだけは終わりません。というのも決まって恋人が現れ、島に女を助けに乗り込む。しかし誰ひとりとして戻って来た者はいない。漁師達は口々に男は死に神の怒りに触れ海の底深く沈められてしまったのだと噂しているらしいのです。

「あの島には人は住んでいないんですか？」

「人がいるなんて聞いたことないね」

、それに船が近づこうとすると急に黒雲が沸いて島を覆い隠してしまうんだよ。第一あそこら辺はもともと海流が複雑で危険なんだよ、話が本当かどうかは確証ないけれど、無理に漁師達も近寄りたくないのさ」

確かにそんな話を聞けば今までなぜ断られたのか納得できました。しかしそうすると反対に母に対しての疑問が生まれてきました。なぜそんな場所へ私に行けと行ったのでしょうか？

「でどうするつもりだい？」

「そうですね・・・」

「島に行くのは止めたほうがいいんじゃないかい？」

手紙に書かれていた「私を信じなさい」という母の言葉が頭の中で回りました。

この事を母は言いたかったのでしょうか。怖くないと言えば嘘になります、しかしここで止めたなら一生後悔すると思いました。母の言葉を信じてみよう、必ず守ってくれるはず。祈りにも似た気持ちで私は女主人に答えました。

「いいえ、行きます」

「そうかい、しかしあんたもお嬢さんのくせして怖い物知らずだね、こんな話聞かされてもまだ諦ないんて」

彼女は私の顎に手を添え私の無謀な行いを憂いました。

「母が私に何を伝えたかったのかどうしても知りたいんです」

「知ってどうするんだい、親の気持ちに沿うことだけが親孝行とはいえないだろ」

「私は母の死の間際まで逆らい続けていました。」

「結局納得してないんだろ」

「納得できないから、だからいくのかもしれない」

「親の願いなんて時にとてもわがままなもんだよ、それでもかい」

「ええ、これで最後でしょうから、だからいいんです」

話せば話すほど意志を固めていく私の様子を見て女主人も根負けをしたようでした。そして暫く考えこみ指を一本立てました。まるで推理ドラマに登場する探偵のようでした。

「あんたヨットは操縦できるのかい？」

「ハイスクール出た頃から自家用の船で兄と一緒によく海にでて魚釣りした」

「うちの亭主は何艘か船持ってるんだよ、今隣の島に用事で出かけてるんだけど、明日の昼には帰ってくるからあんたが独りで行く勇気あるならオンボロ貸すように話してやるよ」

「いいんですか？」

「どうせおんぼろだ、いつかは朽ちて浜の薪になるんだ、かまやしないよ」

「でもそれじゃあ私も気が引けます。買い取らせてください」

「あんた船見てないからそういうのさ、ならこうしよう、もしあんたが無事で帰ってきたら船の貸代もらうよ、それならいいだろ」

「ありがとう、女将さん」

「しょうがない娘だね」

女主人は彼女の胸に私を抱き寄せました。疲労と満腹感と安心が私の顔を重くし、彼女の柔らかい胸で目を閉じたくなりました。目をこする私を見て彼女はいいました。

「で、今夜あんたどこに泊まるんだい？」

島の話に夢中になっていてその事をすっかり忘れていました。夢から覚めたように私は現実に引き戻され彼女から離れました。

「実はそれも探しても見つからなくて」

窓の外を眺めるともう真っ暗でした。

「この島には客泊めるところはルイズの宿一件しかないんだ、けれど彼女の娘が最近子供産んだんだよ。けど産後のひだちが悪くて本島の病院に入院しなくちゃならなくて、彼女は娘の付き添いで一週間前からいないのさ。始めは旦那が一人でやるって言ってたんだけど3日で閉めちまった」

「じゃあ」

「ああ、あんたがこの島に知り合いの家でもなきゃあ宿は無いつてことさ、まあ普段ならこの時期この島に来る客なんていないから誰も困らないんだけどね」

彼女は頭をかきながらどうしたものかと私をじっとみました。

「仕方ありません、どうせ向こうの島についても野宿しなくてははいけないでしょうから、今夜は港の倉庫で寝ます」

「あんたねえ、そりゃ向こうの島では野宿も仕方ないだろうけれど、港は漁師が舟の周りで酒盛りしてるんだ、ネンネじゃないなら奴らがなにすらかぐらい検討つくだろ、島に行くどころじゃなくなる

よ」

「けれど今からじゃ」

「出稼ぎに行った息子の部屋だけどそこでいいなら泊めてやるよ」

「ご迷惑じゃありませんか？」

「そりゃああたしも女だからね、厳つい男なら躊躇うかもしんないけれど、あんたならあたしを襲いもしないだろ？それにあんたみたいなお嬢さんほっぽりだしたら亡くなったお母さんにあたしがしかられるよ、まあ汚い部屋だから驚くんじゃないよ」

「すみません何から何まで、帰ってきたら是非お礼をさせてください」

「いっとくがね、あたしゃ金で世話している訳じゃないよ」

「いいえそんなつもりで、お気を悪くさせたなら許してください」

「怒っちゃないよ、ただ無事に戻っておいで。あたしが殺したなんて言われたくないからね」

私の肩を二回軽くたたくと彼女は席を立ちました。

「でもなんでよくして下さるんですか？こんな初対面の人間に」

「何でだろうね、不思議さ、でもしてあげたいという気なるんだよ。あたしに女の子がいないせいもあるかもしれないけど、あんたが心根の優しいいい子だからかもね」

「会社じゃみんな私のことを怖がっています。そんな風に行ってくれる人なんて」

「商売は難しいよ、食わなくちゃならないし従業員にも食わせなくちゃならない、あんたみたいな若い娘がそれをする為にはオオカミの皮被るときもあるんだろうよ」

「もうオオカミから人間に戻れなくなるかもしれない」

「苦しんでるんだね」

「そんな言わないでください。泣き出してしまいますよ」

私の顔は笑っていましたが、しかし女主人はそんな私の心を見通すように頷きました。

いつの間にか月は雲に隠れ雨粒がガラス窓を伝い落ちていました。母が亡くなってから誰かとこんなに話した事はありませんでした。気持ちをさらけだすと泣いてしまいそうで、それが怖くて単語の細切れをシールのように張り付けるような会話ばかり。次第に強くなる雨音、しかしかえってそれが内面の静けさを際立たせてくれるようで心地いいのです。こんな夜に例え初対面の人であっても自分を取り戻せる時間を与えてくれた彼女に感謝したいと思いました。

「さあもうお休み、明日からは大変なだから、ベッドで寝るのは今夜が最後かもよ」

床を拭き終わった彼女は窓のカーテンを閉め店の灯りを消しました。

「こっちだよ」

彼女は店から自宅へ続く淡い緑のドアを開け私を招き入れました。店とは違い、壁は白い清潔感のあるものでした。手前から二つ目の部屋に通されました。男物の大きなベッドと引き出しも何もない机が一つ。本棚には男性雑誌やコミックが無造作に積み重ねられていました。

「汚いだろ、ごめんなさいね」

「いいえ、でも私がこのベッドに寝たなんて知ったら息子さんお怒りにならないですか？」

「気なんてつかわなくていいよ、男なんて寝られりゃなんでもいいんだから。それともあんたみたいな綺麗なお嬢さんが寝たなんて知ったら興奮してしまうかね？あはは」

彼女は戯けながら女性用のレースのついたマクラを私に貸してくれました。

「息子の臭い枕はそこら辺に放り投げて、あたしのをつかいな」

「はい」

彼女からそれを受け取ると縫いぐるみのように胸に抱きました。ほのかにローズマリーの香りがしました。

「いい香り」

「中に忍ばせてあるんだよ、よく眠れるよ。ところであんたの名前聞いてなかったね、あたしはルイズだよ」

「エリザベス、エリザベス・カレンです」

「いい名前だね、でもあたしには似合いそうにもないね、あはは」

さっぱりとしたルイズの気質がうらやましく思えました。

「シャワーは突き当たりにあるし、トイレと洗面台はそのとなり、タオルは棚の物適当に使っていいからね。あたしゃ少し風邪気味だからこれで寝るけど、何かあったら呼びなよ」

「母みたい」

「あたしもあんなのような娘がほしかったよ。今夜だけでもそんな気持ちになれるなんてうれしいね」

私の額にキスをしてルイズは部屋を出ていきました。今日出会ったばかりなのに、人の縁とは不思議だとつくづく思いました。それともこれも母の導きなのでしょう。それからしばらくして私はベッドに横になりました。ルイズに貸してもらったマクラに頭をつけると、体は溶けるようにまどろみの中に落ちていきました。夢も見ることなくただただ深く。よく日、ルイズの旦那さんは午前中に島に戻ってきました。名はゲイルといいオランダ系の2世でとても華奢な人でした。日焼けした顔の小さな目がなんとも愛らしく、笑うと可愛いのです。ルイズがなんと説得してくれたのはわかりませんが、私の無茶な願いを彼は引き受けてくれました。

「娘さん、あんなが決めた事だから引き留めはしないが、島に渡るなら、それなりの用意はしておきな」

彼はそう言うと自分のリュックを物置から取り出しました。そして懐中電灯、ナイフ、その他、一週間分の非常食を詰め込むと食堂の椅子に置きました。そしてテーブルに島付近の海図を広げると潮の流れや注意することなど事細かに説明してくれました。私が頷くたびに念を押す彼。

やはり心配なのでしょう。言葉の端々に私の覚悟を試すように聞き返すのです。そして全ての説明が終わったあと。私は彼らに電話番号を書いたメモを渡しました。

「もし5日経っても戻らない時には屋敷に連絡していただけませんか」

そのメモをゲイルは受け取ると複雑な顔をしました。

「死ぬんじゃないよ」

「母がついていますから」

何の説得力もない言葉だったと思います。女ひとり、それも社長という立場にいる私がこんな危険を冒すなど無責任と言われても仕方ありません。しかしこれは母との最後の旅だという決意が私を前に進ませたのだと思います。

正午、太陽は真上に昇り、ぎらついた日差しが私の肌を焦がします。港は食事時もあって人はまばらでした。借りた船は全長7メートルほどのヨットで帆は黄ばみ、船底はあちらこちら修理の跡が残り、ペンキがだいぶ剥がれががっていました。

「オンボロだろ」

「たしかに、そうですね」

「でも息子も帰ってくると、このオンボロ船がいいってよく乗ってるよ。見た目の問題さね」

ルイズの言葉は気休めなのか？しかし船に乗り込むと、彼女の言うように船体はとても安定し備品器材に問題はありませんでした。

「無茶しないで無事に帰ってくるんだよ、いいね、じゃないと承知しないよ」

岸壁の上から私を心配そうに見ていました。

「ええきっと。おかげで母の望みかなえられそうです。ありがとうルイズ」

「あたしにもお母さんが何をあんなに伝えたかったのか教えておくれ」

彼女は岸壁から手を伸ばし私の手を取り勇気づけてくれました。

「そろそろ行くぞ、さっき説明したとおり私の後をついてくるんだよ」

そうやってゲイルは私のより二回り大きなエンジン付きの漁船で岸を離れました。海図をポケットにしまい、帆を向かい風に向けました。光る波に私は舵をきりルイズに手をふると

「良い船旅を。帰ってきたら又スーブ飲ませてやるよ」

と彼女も手に持ったタオルで返しました。

風は小さな私の船をあっという間に沖に運び、ルイズの姿を小さな点に変えていきました。彼女も何かを叫んでいるようでしたが、もうカモメの鳴き声しか聞こえません。昨夜出会って今日の別れ、ほんの一瞬の出会いが味方してくれたのです。遠ざかる彼女の姿に頭を下げ前を向きました。そこには魚眼レンズに映し出されたような広大な海が緑色の絨毯のように穏やかに凪いでいました。ゲイルの船は風任せの私のヨットを気遣いながらゆっくりと進みます。操舵室から彼のふかすタバコの煙が立ち登り、船のたてる白波の軌跡がバージンロードのように私の進むべき方向へエスコートしてくれました。ほんの一昨日まで机で書類の文字を追いかけていた私が洋上にいる。母は私をどこへ連れて行こうというのでしょうか？

港を出てから一日、明け方近くゲイルと私の船は、目的とする島へあと10マイルほどという場所まで来ていました。空は陰り強くなる風にビリビリと帆はたなびきます。私は内ポケットから海図を取り出し甲板に広げました。ここから先は潮がぶつかりあい複雑な海流が生まれます。不慣れな私にも船の航行が危険なものになるだろうと容易に予測できました。もう自分一人で行かなくてはいけません。私は彼に自分の島に帰ってほしいと告げました。しかし彼はもう少し手前まで着いていくと聞きませ

ん。  
「私の我がままにあなたをこれ以上巻き込みたくないの、わかってお願い」

「本当にいけるのかい、こんな天気で」

「覚悟していた事です、これ以上甘えては覚悟が鈍って逃げ出してしまいます」

それを聞いて彼も諦めてくれました。そして島のある方向を指さしていいました。

「これからだよ、俺達は家族の為にいつもこんな海を相手にしているんだ。怖がったら飲み込まれちゃう、気を抜くんじゃないぞ、さあ胸を張れ」

「はい」

「あと、話じゃ島の崖の上にバカでかい木があるらしい、それを目印にして進んだらいい」

昨日、会ったときは物静かで、どちらかという漁師の臭いのしない男性でした。しかし波の上ではやはりたくましい海の男。強がりとは言っても内心は心細くなりかけていた私を彼の言葉が勇気づけてくれました。

「崖の上の大木ですね。わかりました。ありがとう、じゃあいってきます」

「必ず戻ってこいよ～」

暴れる帆のロープを両手で握りしめていたせいで彼に手を振る事が出来ず、仕方なく深々と頭を下げました。彼は顔つき、私の周りを一周半し、元来た海へ舳先を向けました。進む船と戻る船、波打つ海にゲイルの船影は瞬く間に見えなくなりました。もう進むしかない、退路を断った今、私は少し強くなれた気がしました。そして泡立つ波をにらみつけました。

「負けないわよ」

雲は厚くたれ込め、あたりは昼間だというのに闇に支配されていきます。山のような波が押し寄せ、潮が雨のように降り注ぎます。天候は異端者を追い払うように進めば進むほどに悪化していきました。私は海に投げ出されぬよう船に身体をロープで固定しました。風が吹き轟音と共に飛沫が宙を舞います。荒れ狂うその様は台風そのものでした。不思議でした。確か出航する時に調べたこの海域の天候は快晴のはず、いくら早く気圧の谷が降りてこようとこれ程の悪天候になるとは考えられません。しかしそんな疑問をよそに風も波も渦を巻き暴れ回ります。仕舞いには舵も利かなくなりました。圧倒的な自然の力を見せつけられ、踏ん張った足がガクガク震えだし発狂寸前でした。さっきまでの覚悟はいとも簡単に砕け散ったのです。ふと子供の頃見た光景が脳裏をよぎりました。たしか家の前の小川を葉っぱに乗った蟻が流れていました。私は木の棒で葉っぱ行く手での水面を叩いたような気がします。

「ごめんなさい、ごめんなさい」

私は蟻に謝りながらとうとう声を上げ泣き出してしまいました。溢れる涙が厚いカーテンとなって視界が不確かにさせました。しかし、そんな私の目にもぼんやり黒い物が写りました。顔を振り、涙をぬぐいました。するとそこには小さな島が見え、さらに崖の先端から大木が突き出していました。悪魔の宝石箱だと直感しました。あった……。あと少しでたどり着ける。そう思った次の瞬間、目の前の空が無くなったのです。見たこともない巨大な波の壁が頭上から覆い被さり今にも船を飲み込もうとしていたのです。私は袋に入れられ、もうすぐゴミ箱に捨てられる猫そのものでした。もうだめだ、顔を閉じました。一瞬この世から音がなくなりました。モーゼが海を割る直前もこうだったのでしょうか？ 静と動のバランスが崩れた途端、轟音が鳴り響き、強い力が船底を押し上げました。何が起きたのが分からず、閉じた目が周りの空気にこじ開けられました。なぜか船は宙に浮いていました。そして背中ネチャネチャと嫌な音が聞こえたのです。振り返ると巨大な生物の尻尾が甲板をはい上がって来ていました。それを見て背中を寒気が突き抜けました。恐ろしくて声も出ません。その間にも太い尾は伸び船体に絡みついてきました。めりめりと音がしたかと思うと船は一気に海面から引き剥がされ上空に持ち上げられました。私は思わず手に持っていたロープを放してしまいました。操る者がいなくなった帆は好き勝手に暴れマストを捻りあげます。終には強風がマストを根本からもぎ取りました。帆は糸の切れた凧のように風に乗って空に飛んでいきました。尻尾は船を抱えたままお

構いなしに島に向かって進みます。いつ海の底に引きずり込まれるのか分かりません。海に飛び込もう、しかし恐怖に震えた指では身体を固定したロープを解けませんでした。私はロデオのカウボーイのように激しい振動に揺さぶられる続けたのです。その間にも黒雲からは稲妻が放たれ、何本もの閃光の槍が海に突き刺さりました。

「お母さん、助けて」

私の記憶はそこで途絶えました。最後に見た物は黄色に縁取られた黒い大きな目。そうぎらついた怪しい目。

曖昧な意識の中、私は目覚めました。ここが海の底なのか地上なのか、生きているのか死んでいるのかさえも分かりません。まだ頭の中で稲光の轟音が鳴り響いていました。誰かの指先が私の右頬に触れました。死に神の招き？それにしても暖かい。なら天使が迎えに来たの？振り返ると白髪の老人がしゃがみ込んでこちらを見ていました。

「おかえり、エリザベス」

老人は目を細めて言いました。おかえり？まだ混乱している頭では彼の存在やその言葉の意味を正確に整理が出来ません。洗濯機のような嵐に遊ばれたかと思えば、化け物の登場。そしてこんどは初対面の老人の出迎え。もしもこれがブロードウェイの観客なら、ドタバタ劇すぎると席を立つでしょう。

「あなたは？」

私は聞き返した気がします。

「おまえの・・・」

彼の答えを聞かないうち私の意識は再び薄れていきました。老人は慌てて私の名を呼びました。

気がつくと私は枯れ草の敷き詰められたベッドで寝ていました。もちろんシーツなどなく、これまた枯れ草を編み込んで作った上掛けが躰にかけられていました。目線を上に上げると洒落たオウム貝加工のランプが天井からぶら下がっていました。その灯りは壁に反射し部屋の広さを教えてくれました。どうやら小屋のようでした。切り倒した木を骨組みにし、外壁と屋根は大きな葉を簾のように重ねて張り付け作られていました。地面には石で組まれた小さな火所があり、鉄板を折り曲げて作った鍋がかけられていました。何か煮詰めているのでしょうか、立ち上る湯気は香ばしい香りを漂わせていました。いったいここはどこなのだろう？あの時見た老人は？灯りの届かない部屋の隅に目を凝らしました。人の気配はありません。ほっとしました。しかしそれをつかの間、私は驚きました。身につけていたはずの下着が壁に渡された紐にぶら下がっていたのです。恐る恐る身体に掛けられていたシーツをめくりました。着替え用にと持ってきたはずのシャツを着ていました。生地に浮き出た乳房の膨らみで下着をしていない事も直ぐに解りました。あの老人に裸を見られてしまった。恥ずかしさよりも先に、知らぬ間に陵辱されたのではと恐怖で躰を堅くしました。どうしよう。人形のように弄ばれたのだろうか？私は自分の恥部に触れ確かめました。その時、部屋のドアがゆっくりと開きました。細長い人影が部屋の中に伸び、トカゲのように壁を回り込みました。

「おきたね」

影の後から、貝のランプを持って老人が現れました。私は猜疑心と恐怖で何も言えず震えました。

「どうしたんだ？悪い夢でも見たかい」

私は干されていた下着に視線を向けました。初め老人は何のことか分からないようでしたが暫くしてようやく老人は気付きました。

「ああ、そうか、ごめん」

謝られると不安は膨張しました。

「いや、ごめんというのはそう言う意味ではないよ」

老人はあわてて手を前に出し振りしました。

「私になにかした？」

「とんでもない」

「でも」

「確かにおまえ裸は目にはしたけれど、でも、びしょ濡れのまま寝かせられないだろ。それにこんな年寄りにもうそんな気持ちは起きないよ」

「本当？」

「ああ本当だよ、エリザベス」

老人はまた私の名を呼びました。彼はいったい誰なのだろう？その時、母の言葉を思い出しました。この老人が母の言っていた男性？さっきまでの不安は180度、いいえ90度、それも正しくはありません。異次元の方向へ伸びたベクトルの矢によってその性格をかえました。

「おまえが今何を考えているかは分かっているよ」

老人は切り株で作られた椅子に腰掛けました。窓の外で数羽の野鳥が不気味な声で鳴いています。

「さあ、これでも飲みなさい。野生豆のコーヒーだよ」

ワインの瓶、上3分の2を切り取った透明なカップを棚から取り出し、火所にかかっていた鍋から液体をすくいそれ注ぎました。

「何故、私がここに来たのかご存じなんですか？」

「ソフィアがお前をここによこしたのなら、それしかないからね」

「母をご存じなんですね？」

「かけがえのない女性だった」

過去形のその言葉に問い直してみた。

「母は一月前に亡くなりました」

「知っているよ、その日がいつだったのかも」

老人は呼吸をする火を見つめ、悲しげな目をした。

「やはりあなたが母が言っていた男性なんですね」

「どうおまえに話したか分からないけれど、確かに彼女はこの島で暮らしたよ」

「母がこの島にいた理由を教えてください。」

「ソフィアがそれで良いといったんだね？」

「ええ、母の意志です」

「そうかい」

老人は頷くとカップを私に手渡しました。

「それを飲んだら、横になってお聞き。長くなるから」

老人は昨日のことも話すように淡々と話し始めました。私はコーヒーらしきものを一応手に持ちながら彼の唇に視線を合わせました。

32年前の夏、私はこの島に人目を忍び隠れ住んでいた。ここに来てから2年が過ぎ、ようやく無人島の生活にも慣れ日々の暮らしに困ることはなくなっていた。空は海の蒼に負けぬほどいつも鮮やかで、小島のように点在する雲の下をカモメが羽ばたいていた。踏みしめる砂は鳴き砂で一步踏み出すごとに音を立て、足下をヤドカリが散歩をしていた。私にはこの静けさが唯一の救いだった。島に来る前は強い睡眠薬を飲んででもなかなか寝付けず苦しんでいた。しかしここは誰一人いない自分だけの王国、折角持ってきた薬も呑むこともなかった。私は月が顔を出せば眠り、太陽の目覚めともに私も起きることができた。そしてある日、いつもの通り魚を捕まえようと浜に出た。まるで宝物でも見つけるように磯の水垂に閉じこめられた小魚や貝を探した。浜から30メートルほど浅瀬をいった岩場に向かった。そこにはいつも魚が群をなしていた。原色の身体をもつ熱帯の魚たち。その場所には海中からは島内部の温泉がわき出していた。魚たちは体についた寄生虫や傷ついた鱗を癒そうと保養がてらそこに集まり気持ちよさそうに漂っていた。私は温水域から離れ沖にもどろうとする一匹のナポレオンフィッシュに狙いを定めた。青い鱗が赤いテングサの上を横切ろうとした瞬間、鉞はナポレオンフィッシュのエラを貫いた。うっすらと血が海水に滲んだ。すかさず鉞を上げると魚はパタパタと尾をばたつかせていた。手にずしりとくる重さに私の顔はほころんだ。きっといい干物が出来ると思った。私は魚のついた鉞を左肩に掛け、浜に戻ろうとした。すると沖に何かが見えた。右手をかざし日光を遮って目を凝らした。女性が流木に捕まった漂流していた。顔は見えないし動きもしない。もしかしたらもう死んでいるかもしれない。私は魚を投げ、彼女にむかって泳ぎだした。このままではどこに流されていくかわからない。照りつける太陽の下、必死に泳いだ。人と交わりたくないのに死にいく者を見ごせない。次第に彼女との距離が小さくなっていった。やっと彼女の元にたどり着くと首に腕をかけた。生死など確認する余裕はない。島から離れれば離れるほど波は荒く、いつ自分も波に飲み込まれてしまうかわからない。彼女を仰向けにして顔を水面から出すようにし、浜に向

かって泳ぎ始めた。抱えた腕に微かに体温を感じた。まだ生きていると思った。そして浜にたどり着くと熱い砂の上に彼女を横たえた。紺のワンピースにブロンドの髪、その髪に隠れている白い首に触れた。微弱だったが脈はあった。息もしていた。肺の音を確かめたが正常で水がたまっている様子もない。長時間水に浸かっていた為なのだろう冷えと疲れで気を失っている。顔を見るとまだ若い、しかし、病気でめしたのか異様に頬がこけていた。その憶測を証明するように腕には点滴の跡が残っていた。

「おいしっかりしろ、おい」

頬を二三度叩くと青ざめた唇から声が漏れた。漂流中、海面から出ていた部分の肌が日光に火傷し水疱になっていた。とにかく弱っている。早く処置しないといけないと思った。私は彼女を背負いこの屋へ運んだ。意識の戻らない彼女をベッドに寝かせ服を脱がせた。顔や首筋、腕にできた水疱に葉草を張り、皮膚の熱を取る為にひんやりと冷たい椰子の葉で覆った。これで少しは皮膚の炎症を抑えられる。私は枯れ草で編んだ上掛けを彼女にかけ意識の戻るのを待った。2、3時間過ぎただろうか、小さなうめき声とともに彼女は薄目を開けた。

老人は私の寝ているベッドの縁を指でなぞりました。

まだ彼女は話せそうになかった。

「大丈夫だから、これを吞んでゆっくりお休み」

椰子の実のジュースを彼女の口に注ぎ込んだ。のどが鳴った。顔に生気が戻っていった。

彼女も助かったのだと気づいたのか頷いた。それから2日後にはベッドで起きれるようになっていた。

私は自分のシャツとズボンを枕元に置いた。翌日、彼女はその服を着て小屋の隣の納屋で寝ていた私の所にやってきた。まだ顔は腫れが引いておらず痛々しかった。

「助けて頂いてありがとうございました」

既に治療の時、うわごとのような礼の言葉を何度か聞いていた。

「まだ、ほんとうじゃないのだから寝ていなさい」

「直ぐに戻ります。でも命を救って頂いたお礼をちゃんと言いたくて」

丁寧な言葉遣いに品を感じた。

「もう少ししたら処置に行くから、横になっていて。それが終わったら朝飯だから」

そう言って取って彼女との会話を私はうち切った。話し足りないともいいいたげな彼女。

「あの」

「まだ何か用かい」

ぶっきらに棒に言葉を返した。

「この島に他に住んでられる方は？」

「私一人だ、ここは無人島だからね」

「じゃああなたも漂流してここに？」

その質問を私は黙殺した。

「ここはどこですか？」

無人島と聞いて彼女の様子は変わった。恐らくさっきまでは身体が治ったなら、この島から直ぐに出ていけると思っていたのだろう。しかし私も漂流者となれば本当に助かったことにはならない。

つまりは自分の置かれている状況の酷さに気付いて驚いた。そんな彼女の動揺にも私は配慮せず事実を並べ続けた。

「インドシナ半島の南にある島さ」

「私、船でオーストラリアに向かう途中だったんです。主人の仕事の関係で向こうに移住することになって、でも嵐で船が難破して」

「君以外の家族は？」

「いいえ、それは大丈夫なんです。もうみんな先に向こうへ行っていて私は追いかけていたところなんです、だから早く家族の所へ」

「言うておくが島から出ていけないよ、それに誰の助けも望めない」

「試してみたんですか？」

「一度だけだがね」

「あなた一人では無理でも、二人で協力したらなんとかなるかもしれないじゃないですか」

彼女は必死に私の冷めた気持ちを奮い立たせようとした。

「君は勘違いしている」

「何をですか」

「私は島を出ていく気などない。ここで死ぬつもりだ。行くなら一人でご自由に。ただし死にたければの話だが」

彼女の顔は曇った。今聞いたことがショックだったのか、壁に手をついてもたれかかり胸を押さえた。

「息子が待っているんです」

気落ちする彼女。私だって彼女が元気になったのなら島から出て行ってほしいのは山々だった。しかし実際それは不可能だった。私は島を抜け出そうとした時、実際に起きた不思議な体験を島の伝説と合わせて彼女に話して聞かせた。

私はルイズから聞いた話を思い出しました。

「ここに来る前聞きました。その伝説」

この島は死に神の宝石箱と呼ばれ、不思議な力で人を寄せ付けようとしなない。訳あって人生に絶望した私は社会から隔離されたこの島へ死をも覚悟し独り渡った。しかし悪魔の気まぐれか、島は私を受け入れてくれた。だがその後、腐乱した死体が浜辺に打ち上げられていることはあっても、私のように生きてここを訪れる者はいなかった。その度に何故自分が死なずに済んだのだろう考えた。そんな時、やはり伝説の通り何者かの意志がこの島には働いているのではいか？と感じる事があった。それは私が一度だけ島を抜け出そうとした時だった。年老いた母に無性に会いたくなり、矢も楯もたまらず、乗ってきた船で海に出ようとした時だった。それまで快晴だった空が突然暗転し雲が島を覆った。山が不気味なうなり声をあげ木々が激しくざわめいた。浜には高波が押し寄せ、船はあれよあれよという間に岩に叩きつけられ粉々になった。放りだされた身体を波はわしづかみし振り回した。それは一度捕まえた獲物は逃さないと怒り狂いるようだった。

「すまない、分かったから、囚われの身でいい、この島にいるよ」

島に許しをこうた。するとあれ程荒れていた空も海も嘘のように一瞬にして静まりかえった。以来私はこの島から抜け出す事をやめた。なぜならそんな気持ちになっただけで、島は敏感に感じ取り、何日も嵐が続いた。もし彼女がこの島を抜け出そうとすれば、同じような事が起きるだろう。

「帰りたいなら帰ればいい。その代わりこの島を出ようとすれば死ぬぞ。これは脅しじゃない」

話がでまかせでない実感したのだろうか彼女は黙り込み、しまいには泣き出してしまった。しかし慰めはしなかった。期待など持たぬ方がいいと思ったからだった。私は彼女を小屋に連れ帰ると身体に張った薬草を交換しただけで逃げるように部屋をでた。あとは昼と夜、山芋と鶏肉のスープを部屋のテーブルに置き、彼女の側にも近寄らず会話も交わさなかった。一週間もすると彼女の体調はかなり良くなっていった。しかし彼女は苛立ちや不安に耐えきれず度々すすり泣いた。私は女の泣き声が大嫌いだ。理解できないし理解しようとするのが鬱陶しいからだ。泣きはらした彼女の恨めしそうな目、それを見ると無性に腹が立った。私が何をした？

「あなたは優しくない」

彼女は爆発した。そして今までの控えめな物言いは消え、吐き捨てるように言った。

「こんなに家族と会いたがっているのに話も聞いてくれない。待っている子供がいるのよ。あなたは私に島で一生暮らせというの。なんとかしてよ、命を救ってくれてもこれじゃ何にもならない」

「おいちょっと待てよ。私が君を海に放り投げたわけじゃあない。ましてやこの島に招き入れたわけでもない。君自身の運命としてここに流れ着いたまでのことじゃないか」

「じゃあ、どうしたらいいのよ」

「それに私が答えなくちゃならない義務もないだろ、そうは思わないか？ なんだか聞いていれば命を救ったことが迷惑なような言い方だが、私は最低限の事をしたまでだ。それを避難される筋合いはないね。あとは君自身の考えで行動すればいい。出て行くもよし、ここで暮らすもよし、それに言っておくけれど私は君と生活を共にするつもりはないからね。元気になったなら一人で生活してくれ」

信じられないといった大きな目で彼女は私を見た。

「そんなこと無理よ、あなたが一番分かっているでしょ。こんなところでどうやって女ひとり生きていけばいいというの」

そう言っている私も女が独りでこの島で暮らすことは難しいと思えた。私も初めてやってきたとき食べる物もなく雨風をしのぐ場所もなく苦労した。持ってきた物と言えば小さなトランクケースに詰め込んだ数枚の着替え、ナイフ、それに普段吞んでいた薬ぐらいだった。必然的に私は生活に必要な物全てを作った。この小屋は石を割って作った斧で切り倒した木で組み立て、食料は狩で捕まえた魚や鳥。一年ほどして要約島で生きていけるかなと思えたぐらいだった。けれど女と一緒に暮らすなんてあまりにも苦痛で耐えられなかった。ようやく手にした安らぎをまた乱されたくはなかった。

「私は女が嫌いだ、君が嫌いなのではなく、女という存在そのもの事態が許せない。だから君と暮らせない」

「なぜ？なぜ女が嫌いなの」

「男を自分勝手に利用しようとするからだ」

「男だってそうでしょ」

「言い争う気はないよ、君には君の考えがあるし私には私の考えがある。女は別の生き物だ」

「同じ人間でしょ」

「魚と鳥くらい違うね」

言い争いは熱を帯び感情的になっていった、鶏と卵のように出口のない言葉を互いにたたきつけた。話せば話すほど尚更女にうんざりした。

「もういい、私はここを出ていく、この小屋と食料はあげるよ」

「あなたはどこへ？」

「島の反対側に大木の枝を利用して作った寝床がある、そこへいく」

「逃げるつもり？」

「うっとおいしいだよ、第一顔を合わせなければ喧嘩しなくて済むからいいだろ」

彼女は私を睨み付け唇を噛んだ。

「置き去りにするのね」

「私だって一人だよ、それに君は寝るところにも空腹にも困ることはない。それでいいだろ」

「そんなことを言っているんじゃないよ」

「だからもういいって」

「もういいってなによ」

かなきり声をあげる彼女を私は相手にしなかった。そして淡々と島で生きていく為に最低限必要な知識を彼女に伝えた。1、小屋から南に30メートルほどいった所に島の真ん中にある湖からの水が小川を作っていて飲み水はそこを使う事。2、島の北には有毒なガスが吹き出している火山地帯があり近づかない事。3、納屋に一月分の食料を置いていくが放し飼いにしている大トカゲがいつ食べに入ってくるか分からない。だから納屋の戸締まりはきちんとする事

「そんないっぺんに聞いても分からないわ、だから無理だって」

彼女は首を振って訴えた。それでもかまわず私は続けた。

「日に一度は湖に水をくみに行く、何かあったら湖まで来ればいい」

冷たい男と思われようとも、これが精一杯の善意だった。私はトランクケースと斧と槍を持った。

「いかないで、本当に怖いよ、貴方の言うとおりにするから、怒らせないようにするから」

引き留めようと私の袖を掴む彼女、その手をふりほどき私は小屋を後にした。悲鳴が小屋の中から響いていた。また泣いている、やっぱり女は嫌だ。そう私は思った。

「その彼女というのが私の母？」

老人は頷いた。

「その話が本当なら、許せない、母が可愛そう」

老人はチラチラと燃える火所に薪をくべた。火の粉が薄暗い小屋に舞い上がった。炎にてらされ赤月のように浮かび上がった顔の無精髭にも火の粉が付いた。彼はそれをそのままにして言った。

「今話していることに何一つ嘘はないさ」

「なんでなの、そんな酷い事、見殺しにするようなものでしょ？」

「それは何らかの手助けはするつもりだったさ、ただ何もかも期待されるのに耐えられなかった。離

れていたら気を遣わなくてすむしね」

「なんて人なの」

こんな男の元に母が何故私をよこしたのか分からなくなりました。怒りがこみあげてきて自分の目がつり上がっていくのが分かりました。

翌日、枝にさえずる小鳥の鳴き声で私は目覚めた。胴回り10メートルほどだろうが、島が生まれたときから全てを見続けてきた歴史学者のような崖の上の巨木。床は太い枝に細い枝を何本も渡しただけの簡単な作りだったが、生い茂る葉の傘は屋根のように雨や日光を遮っていた。背伸びをしながら寝起きの目を擦った。早朝のピント張りつめた空気の向こうにエメラルド色の海が広がっていた。空はいくつかの濃淡を重ねたセルリアンブルー。一度ここに立てば誰もが領地を眺める王の気分になれる。何を暢気なと人は言うかもしれないが、自ら望んでここに来た私の精神状態は、事故で漂流した彼女のそれとは根本的に異なっていた。実は私は罪を犯し逃げてきていた。そんな人間にとって追っ手の来ないこの島での生活が心地よいと感じるのは当然のことだった。過去を忘れ、青い空に囲まれて過ごす日々。一度はこの島からであろうとはしたが、それも不可能と知った今、ここで精一杯余生を楽しもうと思っていた。死んでも良いからここから逃げたいと彼女がいうなら私には願ったりかなったりだった。何かしなければならぬ責任は私にはない。

「好きなようにすればいい」

小枝から肩の上に飛び移った小鳥を眺め呟いた。私は朝の洗面と水くみをしようと巨木にかけてある蔓の梯子を降りた。空の洗剤ボトルとナイフをもって湖に向かった。道の途中、眠るように立ちならぶ高いブナの木々、鬱蒼とした静寂の森、光の届かない地面の岩には蛇が散歩していた。ここにはほ乳類はいなかった。そのかわり熱帯に住むコウモリや島から島へ泳ぎ渡る大トカゲなどグロテスクな生き物達が多数生息し爬虫類の楽園だった。私は近寄ってくる毒蜘蛛を靴で踏み殺しながら歩いた。森をぬけると明るい場所に出た。さほど大きくはないが清らかな水をたたえた湖。山の清水が小川となり滝となり垂直に切り立った山の肌岩を真っ直ぐに落ちていた。滝壺の岩に叩きつけられた水が飛沫となり湖を覆う小さな虹を常に作っていた。その時、対岸に人影を見つけた。彼女だった。腰まで水につかり前屈みになって髪を洗っていた。彼女は私に気づいていないようだった。白い肌を水の玉が流れ落ちていった。彼女の裸は治療で何度も目にしていたはずなのに、何故か鼓動は高鳴った。私は声もかけられず後戻りも出来なくなった。右手に洗剤のボトルを持ったまま虫ピンで留められた標本のように立ちつくした。男はなんと愚かな生き物なのだろうと自分が嫌になった。彼女のたてる水音が私の耳をくすぐった。水面に落ちた水滴が細かな波紋を作り、キラキラと光が揺れていた。2、30秒程度だっただろうか彼女は顔を上げた。私は慌てた。そしてする必要もない言い訳をしてしまった。

「今、水をくみに来たばかりだ」

岸辺に置いてあった布きれを右手に取って彼女は胸に当てた。彼女の表情は唇にかかったブロンドの髪でよく見えなかった。

「嫌いなんでしょ、女が？」

私は彼女の言葉を無視して、湖畔の岩に膝をつき身をかがめ、木の葉の浮いた水面にボトルを沈めた。

「なによ、嫌らしい目で見ていたくせに、女嫌いが聞いて呆れるわ」

ボトルの口に水が渦をなして落ちていった。彼女の言葉を聞いて手が震えた。気づかれていた。

「それとも私のことが気になった？それならご心配なくもうすっかり直ったから」

彼女は男の一番腹の立つ言い方で皮肉たっぷりに私に言葉をねじ込んだ。

「当然だ、私は医者だ。女の身体など見飽きているよ」

私は動揺と憤慨で咄嗟に声を荒げた、だが彼女に性を感じたことも事実だった。ただそれが欲望という色がつく程の感情にまで高まっていなかっただけだった。

「あらやっぱりドクターだったのね。初めは訳も分からずされるがままになっていたけれど、手慣れた感じだったし」

彼女の態度が昨日より横柄に思えた。

「夜考えたの、確かに助けてもらったことには感謝しようって、昨日はどうのこうの言ってごめんなさい、素直に謝ります。でも」

「でも、なんだ」

「あなたは嫌い、初対面に等しい私にあんな物の言い方する人は許せない、貴方は最低の人間よ」  
「ああそうさ、好きなように言えばいい。私の何も知らないくせにそうやって女はいつも自分を正当化して、男を見下すのさ」  
私は立ち上がり持っていたボトルを地面に叩きつけた。中に入っていた水が飛び散りズボンを濡らした。  
「あら怒ったのかしら？それにしてもあなたのような医者に診てもらった患者は不幸ね」  
「助けられた本人が言う言葉か」  
「貴方はただ直せばいいと思っている」  
「医者だ当然だろ」  
「そんなだからこんな島に逃げてくることになったのよ、聞かなくても分かったわ」  
「うるさい、だまれ」  
「凶星のようね、まあいいは弱虫で臆病なあなたに何を言っても無駄なこと。側にいられるとせっかく良くなり掛けてる身体も具合悪くなりそう」  
なんて辛辣な言葉だろう。こうまで言われる自分が可哀想になった。情けない話だが涙がこぼれそうになった。そしてうわずった声で自己弁護を始めた。  
「生活に必要な物は全ておいてきたじゃないか。私は鳥みたいに住み難い木の上で寝ているっていうのに、まだ思いやりが足りないと言う君の方こそ人の親切が分からない人間なんじゃないか」  
「食べものや寝るところがなくなたって平気。でも女一人をこんな島に一人きりにする無神経さがわからない。どんなに怖いかあなたにわからないのよ」  
「開き直りかい」  
「いいえ教えてあげているの、でも勘違いしないで。もうあなたになんて助けてもらおうとは思わないから」

老人は頭をかいた

「お母さんは強かった」  
私はおかしかった。というより気持ちよかった。まるで時を越えて母のあの声が聞こえて来るような気がしました。  
「でも私も負けちゃいなかったがね」  
「あらそう？」  
母の怒りが私にエネルギーを与えるように力がみなぎっていた。  
「あなたが悪いんだもの、当然のことを言われているだけじゃないかしら」  
私の老人に対する恐怖は薄らいでいた。  
「あの時の彼女のようなだね」  
そんな私を見て老人は目を細めた。

それからの私には南国の島が南極の島になってしまった気がした。朝夕どこかしらで彼女と出会ったからだ。彼女は目も合わせようとせず、私などこの世に存在していないとでも言いたげに完璧に無視を決め込んだ。明らかに仕返しと分かっている相手は何もしないことに文句は言えなかった。  
「私の事を何も知らないくせに、なんだあれは、男が女を守るのは当然みたいな自分勝手な態度」  
何も間違っていないんだと自分に言い含める毎日。そんなだから私も意地になり、彼女が浜で魚を捕まえられずに苦労していたりタロイモを掘ろうと足場の悪い斜面から転げ落ち腰をさすっているのを見ても決して手をかさなかつた。いつか根をあげて自分の暴言を詫びに来るはずだ。そうしたらなら許してあげないでもない。私はそんな気持ちになっていた。  
ある日のことだった。私は海で捕った魚を浜辺でスモークしようとして海水で洗っていた。その日は椰子の葉で作った網に普段の倍の魚がかかっていた。そこへ彼女がやってきた。手には私が以前調理用に作った蔓でできた手桶ほどの籠。彼女はいつものように私を無視しズボンの裾をまくり海へと入っていった。とても切実な顔をしていた。事情を知らぬ者なら彼女が入水自殺するのではないかと慌てただろう。私は魚の処理をしながら海面に籠を沈めてあばれる彼女を見ていた。あれでは捕られる魚もみんな逃げてしまうのにと考えた。まるで水遊びだった。そのうち彼女は疲れ果て小さな波にも身体は揺さぶられ何度となく押し倒された。しかし彼女は止めようとしなかつた。私が見ているからか当

てつけるように意地になっているようにさえ見えた。ふらつく足、びしょぬれの身体、魚に当たり散らす声。私は哀れになった。そこで今日はスモークすることを止め帰ろうと思った。そして捕れすぎた魚を彼女が浜辺に残した荷物の脇にそっと置き何も言わず浜を立ち去った。

翌日、私はもう一度スモークをしようと浜に降りた。そこには昨日彼女の為に残していった魚が腐ったまま異臭を放っていた。海を見ると昨日と同じように彼女がよれよれになりながら魚を捕っていた。いくら私がこの島になれ、いつでも食料が採れたとしても粗末にしたことはなかった。まして手もつけず腐らせるなんて許されないことだ。持ってきた道具を砂浜に投げ彼女の元に駆け寄った。

「何故魚を腐らせた、ちゃんと分かるように置いておいたはずだ」

彼女は振り向きもせず言った。

「そうやってあなたは気が向いたときだけ私に恩を売るのよ」

「どうだっていいだろ、実際君に魚を捕れないのだから、ありがたく受け取っておけばいいじゃないか。子供みたいな事言っているんじゃない」

「あなたが子供なんじゃない、私はあなたのペットじゃないわ」

「それに君の為に捕った魚じゃない、捕れすぎたから君に分けただけだ」

「ならなおさらよ、私は余り物を恵まれたわけ？余ってなければそんな気にさえならないでしょ、もっと不愉快だわ」

彼女は私の足下に泳ぐ魚を捕まえようと左手で押しのけようとした。私は意地になって足の親指を海中の砂にめり込ませた。いくら彼女が邪魔と身体を使って退かせようとしても私は動かなかった。

「どいてよもう、あっちへ行って、あなたの顔なんか見たくない、行って」

怒鳴り声は、いつしか泣き声に変わっていた。さすがに私も罪悪感にかられ二三歩後退した。

しかしそれ以上動こうとしない私を彼女は見て言った。

「あなたが帰らないなら私がかえるわ」

腕で涙をぬぐいながら彼女は私の前を通り過ぎていった。その時後ろから大波が押し寄せた。彼女は海に漂う海草のように一気に浜に打ち上げられた。水を飲んだのだろう、激しく咳き込みながら砂浜にうずくまった。そして暫くすると立ち上がり私の方に振り返った。

「あなたなんかだいきらい、顔も見たくない」

そういうと走って砂浜を後にした。私は海の中にぼつんと立ちつくしていた。こんな時に限ってスコールはやってきた。激しい雨音の中、私は自分の言い訳を叫んでいた。俺の何が悪い、俺の何が悪い、あいつこそ自分勝手じゃないか。大声を上げれば上げるほど雲は弾丸のような雨粒を落とす。まるで空も彼女に味方しているようだった。

「くそー」

俺は何度も何度も海面を叩いた。

結局、一月经っても彼女は折れて来なかった。不思議だった。小屋に残してきた食料はそろそろ底をつく頃なのに強気な態度は変わらない。そればかりか彼女を包む空気は、日に日に無数の釘となり私を威嚇した。長く忘れていた女の強烈なプレッシャーに胃の痛みを覚えた。少し前までこの島は自分だけの場所だったのに、呼吸さえ彼女に許しを得なくてはいけない気がした。そんな重苦しい空気が島を漂うなか2日ぶりに彼女とすれ違った。タロイモでも掘りに行った帰りなのだろう、ズボンは泥だらけだった。

私は驚いた。彼女の顔がとてもやつれていたからだ。足取りはふらつき今にも倒れそうだった。このまえの事もあったが、見るに見かねておもわず声をかけた。

「大丈夫か？」

「あらまた余り物でもくれるの？」

その言葉には偽善者は黙いなさいというニュアンスがこもっていた。

「あんまり疲れているみたいだから、いや何にもなければ別にいいんだ」

「そうね、何にも無いわよ」

そう言うと彼女は地面にへたり込んだ。駆け寄り背中に手をあてると彼女は肩で大きく息をしながらその手を払いのけた。

「よしてよ、触らないで」

彼女は前にもまして苛立っていた。

「どうせ私は死ぬのよ、あなたもそれを望んでいるんでしょ。そうならもう私に触らないで」

「いつ君が死ねばいいなんていった？」

「同じ事よ、もう何も食べるものもない、空腹で食料を探してみるけれど、どこを掘ればいいのかも分からない」

「納屋に干した魚や、鳥の薫製、あとタロイモも置いてきただろう」

「あんな物一週間も前にトカゲに食べられたわ」

「大トカゲか」

「そうよ」

「あれほど納屋の戸は締めとけよっていったじゃないか」

「締めておいたわ。でも前の晩はとても強い風が吹いて戸にかけておいた棒がはずれてたの、仕方ないじゃない」

彼女の住む小屋は島の南にあり浜に近いせいもあって風が強い。反対に私の寝泊まりする大木は、山の陰に位置していて弱い風しか吹いてこない。そのせいで彼女の言う強い風の夜が私にはハッキリとは思い浮かばなかった。

「それで、いつから食事していないんだ」

「小屋に残っていたお芋のスープを四日前に口にしたのが最後」

「魚や芋を取ってたじゃないか」

「ええそうね、とろうとはしたわよ。でも小魚一匹取るのに精一杯、芋だって畑じゃないから深く掘り出せないのよ、あなたが一番よく分かってるでしょ」

「何で言わなかったんだ」

「無視してたくせに」

「それは君の方だろ」

今思えば二人とも呼び合っていたように思う。不器用な人間が言葉に出来ない思いを無言という声で必死に叫んでいたんだ。そう、まるで犬笛のように。

「ちょうどよかったのよ、どうせいつかは食べ物だってなくなるから」

投げやりな彼女の言葉は弱々しかった。もちろんそれは考えていた。だからこそ早く謝ってくれればいいと思っていたんだ。しかし何日も前に彼女がそんなことになっていようとは考えもしなかった。

「意地を張らなくてもよかったら、それならそう言えば」

「勝手ね、意地を張らせたのは誰？」

「私は一緒に暮らさないって言っただけだろう」

「ああああそうねそうね、とにかくもう帰って寝るわ、腕も痛いし」

「お腹空いているんだろ、寝れないんじゃないのかい」

「いいえ、餓死して永遠に眠ってあげる。もうこうやって言い争うこともないから安心していいわよ」

彼女は石の鍬を杖にしよるめきながら帰っていった。森に鳥の甲高い鳴き声が響き、羽音がバサバサと木々の間を渡っていった。どうしたものか。何とも言えぬ後味の悪さが残った。重荷なことは確かだが彼女は限界を迎えている。非情な自分になれたならどんなに楽だろうとその時思った。

「それからどうしたんですか、まさかそのまま見殺しに？」

「あはは」

「笑い事じゃないでしょ」

私はベッドの枯れ草のシーツを握りしめ声を荒げました。

「見殺しにしたら、君は今ここに存在しないだろ」

確かにそうでした。

「じゃあ」

「ああ、もちろん助けたさ、嫌がられたけどね。そのあと私は獲物を持って小屋の戸を叩いた」  
老人は戸に目をやりました。あの日の自分を思い出すように。

小屋の中からは返事はなかった。既に夕暮れ近くなっていて、戸を開けても中の様子はよく見えなかった。

「おい」

「何しに来たのよ」

「食べ物持ってきたぞ」

「いらないから、帰って」

「お腹空いてるんだろ」

薄暗い部屋に目が慣れてきて、彼女の大きなお尻や丸みを帯びた背中の輪郭が徐々にハッキリしてきた。どうやら壁の方を向いてベッドに横になっているらしい。肩を揺らす仕草はまるですねた子供のようだった。

「今食事を作るから待っていな」

「あなたの作った物なんかいらないから、早くここから出て行ってください」

側にあった椰子の実の殻で作った皿が彼の足下に投げつけられた。私は小屋を出て外の調理場（水瓶と小石を積んだ釜らしきものがあるだけなのだが）に向かった。そして今さっき捕まえてきた獲物をさばき鍋にかけた。一煮立ちしたら薬草とゴボウらしき根菜類そしてタロイモを加えた。調味料は海水から作った塩のみ。しかし肉と野菜から出るエキスが程良い甘みに変化し何とも良い匂いが漂った。私はさっき投げつけられた殻の皿にそれを盛り彼女の枕元にもっていった。もう外はすっかり日も暮れ夜になっていた。私は火所に蒔きをくべ、勢いを増した炎は真っ赤な光を部屋の中に放った。

「スープが出来たよ、さあ食べて」

いい香りが小屋の中に広がっていった。彼女もそれを感じただろう。

「冷めると美味しくなくなるよ」

「今それを口にしたら、明日はどうなるか分からないじゃない。偽善だわ、生きながらえても苦しむだけ」

彼女のお腹がクウと鳴った。

「本当にいらないのかい？」

「いらない」

立て続けにまた鳴った。あまりに分かりやすい身体の反応に私は思わず吹き出した。

「そうやって笑えばいいでしょ」

さて困った。

「死なれちゃ困るんだ」

「あらよくいうはね、早くいなくなればいいと思ってるくせに、でしょ？女嫌さん」

「それは単に昔」

「昔何？」

彼女は振り向いて私をにらんだ。

「言いたくないよ」

「じゃあ私も食べない」

お腹は太鼓を打ち鳴らすように何度も聞こえた。彼女の口の中に唾液の海が出来ていることは明らかだった。

「それとこれとは関係ないだろ」

「関係なくないわ、私は貴方の過去に苦しめられているようなものだもの」

「いいから食べてくれよ、食料ならこれから私が取ってくるから」

「だから話してくれたら食べてあげるって言うてるでしょ」

私は誰の為に駆け引きをしているのか分からなくなった。自分の苦々しい過去を話す事と彼女に食事をさせる事のどちらも自分の為ではない。

「どうするの？早くして、ほんとに餓死してもいいのね？」

彼女はヒステリックに足で丸太の骨組みを蹴った。小屋が激しく揺れた。

「分かったから、話すから、約束するよ」

「ほんと？」

「ああ、ほんとだ」

「嘘つかない？」

「嘘つかないから」

「じゃあいいわ」

そう言うと彼女はベッドから飛び起き、差し出した皿に口をつけた。木のスプーンによく煮えた肉を

乗せ美味しそうに口に運んだ。

「美味しい…。前から思っていたけれどあなたって料理上手ね」  
よほどお腹がすいていたのだろう、彼女はお代わりを3度した。

「あんまり見ないで…。」

さすがに3度目は恥ずかしそうに皿を出した。

「遠慮せずに食べてくれ、君のために作った料理なんだから」

彼女が再び不機嫌にならないように私は細心の注意を払った。3杯目が終わりそうになるとコーヒーを沸かした。もちろんフィルターなどない。天日乾燥した豆を火で煎り、石で割っただけの粗挽きの粉。それを煮詰めただけの琥珀の液体。

「ごちそうさま」

お腹を押さえて満足そうに笑みを浮かべる彼女。先ほどまでの険しさは消えていた。

「はい、コーヒー」

「コーヒーは苦くて、家ではミルクしか飲まなかったの」

「胃に優しいように薄くしといた。それにそんなに煮出してないからお湯のような物だよ」

彼女はしぶしぶそれ受け取りすすった。

「だめかい？」

「そんなに苦くない」

「だろ？」

「うん、でも甘くない」

「それは仕方ないよ」

「そうね、お砂糖なんてないものね」

「甘い物がほしい？」

満腹とお腹をさす彼女の顔がぱっと明るくなった。

「何かあるの」

「ん、今度探してみるか」

「なにになに」

「欲張りだな、いま食べ終わったばかりじゃないか。さっきまで意地悪だった君はどこへ行ったんだ」

「仕方ないでしょ、あれだけ空腹ならそうもなるわ。でもお腹いっぱいって本当に幸せ」

彼女は空腹が満たされたせいか瞬きを始めた。昼間森の中を歩き回り鍬を振るったせいか、疲れて眠くなったのだろう。

「もうお休み、眠くてしかたないって顔に書いてある」

「いや、ねないわ」

「またそれかい、少しは妥協しなよ」

「話してくれるって約束したでしょ、嘘つくつもり？」

彼女は欠伸をかみ殺して言った。

「今話しても、どうせ夢見心地だろ、ちゃんと聞きたいなら明日にしなさい」

「帰るの？」

「いいや、もう暗いから今日はここに泊まるよ、納屋で寝るから心配なくていい」

「だめよ」

「？」

何が駄目なのか分からなかった。

「入り口の扉壊れているっていったでしょ。危険だからこの小屋で寝て」

「何故それが危険なんだい」

「また大トカゲが来て今度はあなたが食べられてしまう」

「あはは」

私はおかしくて仕方なかった。

「何よ心配してあげてるのに、食べられてもいいの？」

「それはないな、不可能だね」

「何で、分からないじゃない」

私がこう断言するには理由があった。私が調理したのは彼女がいう大トカゲだったからだ。実は大ト

カゲはこの島で最高の蛋白源でありもっと美味しいご馳走だった。私はトカゲを恐れていたのではなく何かの時のために飼育していたような物だった。

しかし彼女がわるい夢を見るといけないからその夜は話さないでおくことにした。そして私は彼女の提案を受け入れ小屋と一緒に寝ることにした。久しぶりの女性との夜。別に何をやる訳でも無いけれど緊張してなかなか眠れなかった。そんな私の耳に彼女の寝言が聞こえてきた。

「アルフレッド、ママね」

子供の名前だろうか？ 何度も繰り返す切なげな声、私だって出来れば返してあげたい。私も自分の母を思い浮かべていた。

「それが大トカゲだってママはいつ知ったの？」

「さあ、しかし暫くして私が捨てた骨をゴミ捨て場で見つけたらしいな」

「で？」

「『なんか大きな骨』といった後、私が彼女にニコって笑ったら、唾飲み込んでそれ以上なにも聞かなかったな」

「いじわるね、そうさせたくせに」

「まあまあ」

老人はとても嬉しそうだった。

「で翌日どうしたの？ 約束は守ったの？ 私も早く聞きたいは」

彼女が目覚めたときに私はもう小屋にはいなかった。

「やっぱり嘘だったのね」

「聞きなさい、ここからはお母さんから聞いた話だ」

翌朝、私がいなくて知った彼女は椰子の葉で編んだシートに蓑虫のようにくるまりながら

「嘘つき」

と呟いた。結局私も自分から逃げた卑怯な男。昨日の約束も自分を黙らせるために言ったその場しのぎ。何で男はこうもいい加減な生き物なのだろうとね。そう言えば彼女の旦那も朝帰りすると決まって出来ない約束をしたらしい。もしかしてと淡い期待に外出の支度をして、旦那はそんな約束があったことさえも覚えていなかった。だから私が逃げたと知っても馬鹿らしくて怒る気にもならなかったとさ。私のいい加減なほどこしを受けたせいで、何日かは生きながらえるだろうが、すぐに空腹に苦しむ事になる。やはり自分の命は風前の灯火でしかないと悟った彼女はもう笑しかなかった。

「あー、あてにならない人に怒るもばからしい、やめたやめた、なるように慣れね」

そういうとベッドを降り、昨日のとは違うチェックのシャツを着て小屋をでた。

昨日久しぶりに肉を食べたからか何となく体が軽く感じたらしい。

「さてと」

腰に手を当て、差し当たり今すべき事はと考えた。どうせこのままここにいてもなにも変わらない。とって私の手助けがなければこの島から抜け出すこともできない。と言うことは助けが来るのを待つしかない。死ぬのが早いか助けが間に合うか、状況からすれば前者の確率が限りなく高いと彼女は思った。ならば後者の確率を少しでも上げるために何をしたらいいのか考え一つのアイデアを思いついた。まず小屋にあった私のシャツを引き裂き数枚の布を作った。そして竈に燃え残っていた炭を持って浜辺に向かった。深く青き緑の海にさざ波がたち、その音が一層島の静けさを際立たせていた。日の光が反射し雪のように白い砂浜を踏みしめながら、こんなところで子供と遊べたらと彼女は恨めしく思ったそう。そして波打ち際に時たま打ち上げられている瓶を捜した。何かの本で読んだとがあった。瓶に詰められたラブライターが異国に流れ着き、見知らぬ二人に恋が始まったと。今の彼女にはそんなラブストーリーなどいらなかった。この瓶を誰かが拾ってくれたなら助けがきてくれる。彼女は白ワインと洋酒の瓶を一つずつ見つけると風で幹の曲がった椰子の木に腰掛けた。『私はソフィア・カレン 死神の宝石箱 島で助け求む 連絡 オーストラリア カレンカンパニー』燃え残った炭でぼろぼろの布に書くにはそれが精一杯だった。そして指先を石のナイフで傷つけると流れ出す血で Sofia と署名した。どうか助けにきてと瓶に口づけし引き波に向かって放った。見る見るうちに希望の瓶は島から離れていった。彼女の気持ちとしたら瓶に入ってそのまま流れていきたかったのだろう。

「アルフレッド」

子供の名を呼んだ。子供が自分を忘れてしまわないうちに戻りたい。これから毎日一つでもいいから瓶を流そう。そう誓い砂浜をあとにして小屋に戻った。少しお腹の空いていた彼女は昨日の残りのスープを口にした。そして暫くするとタロイモ掘りにでかけよう納屋に立て掛けて置いた石鍬を探した。けれどどこにもみつからなかった。あれがなければ根のびっしり張った芋を掘り出すことなどできはしない。既に太陽は真上に上がっていた。彼女は頭を抱えた。そのとき私が茂みの間から現れた。

「ねえおじさん、名前をお聞きしていいですか？」  
私はまだ老人の名前を知らない事に気づいた。本当なら初対面の相手に真っ先に聞くのだろうけれど、彼がいつの間か私のそばにいたせいでその機会を逸していた。しかし本当を言うと老人の過去を聞いているうちに『私』としかいわない人物にちゃんとした名前を付けてあげたかったのかもしれない。  
「アルマンゾだよ」  
「アルマンゾ？」  
「そうだよ、似合いかな？」  
「いいえ、どこのお国のかたかなって」  
「イギリスさ」  
「でもブリティッシュイングリッシュのもったいつけた発音がないから。あ、ご免なさい」  
「謝ることはない、私の家庭教師はアメリカ人の女性だったんだ。子供の私は彼女と話すのが楽しくていつの間にかイギリスなまりが無くなっていったんだよ」  
「私の名前は」  
「エリザベスだろ」  
「やっぱりボートの上で私の名前を呼んだのは夢じゃ無かったんですね？」  
手の中の器にはもうほとんどコーヒーは残っておらず冷たくなっていた。それに気づいた老人は、火所の鍋から薄いコーヒーをグラスに継ぎ足しました。手のひらに再び温もりが広がりゆっくりとすすりました。そしてグラスの縁にうっすら残った液体を人差し指でなぞりながら、老人と私の接点をそれとなく問いかけてみました。  
「やはりあなたは？」  
「その話はもう少し後になるかな」  
「じらすんですか？」  
「いやこんな日のために私なりに話の順序を考えていたものだからね。だからそう簡単に前後を入れ替えられないんだ。ごめんよ実は話すのは得意じゃないんだ」  
老人は頬をぼりぼりとかいた。  
「じゃあママとはどう呼びあっていたんですか？」  
「初めのうちは君とあなたさ、けれど新婚気分のそれとはまったく違ったがね」  
「名前は聞かなかったの？」  
「聞いたさ、でもね女性を名前で呼ぶにはそれなりの親しさがないとね、私が彼女の名前を呼ばないのだから彼女もアルマンゾと私を呼ばなかった」

「何しに来たの、逃げていったくせに、忘れ物でもした？」  
私は大きな籠を背負って戻ってきた。そして地面にそれをゆっくりとおろすと曲がった腰を伸ばそうと身体を後ろに反らした。  
「約束も守れない人なんて大嫌い、どうせ私を馬鹿にしてるんでしょ」  
今まで籠を背負っていた背中は汗でグシャグシャになっていた。膝も腕も泥だらけ、葉っぱで切ったのだろう頬には一筋の血の痕が残っていた。  
「ねえ私の話聞いているの？ なんとか言いなさいよ黙ってないで」  
重い荷物を背負ってきて息切れがしてなかなか話せないでいたが、ようやく呼吸も整い私は口を広がらした。  
「やっぱりいいわ、もうなんにも聞きたくない、嘘つきの言い訳なんて」  
「いや、あの」  
私の口が彼女の拳で栓をされているような気持ちになった。

「私はこれから芋掘りに出かけなくちゃいけないの。忙しいんだから帰ってくれませんか？」  
彼女は腰に手を当て顎をつんと上げ、まくし立てた。私は何も言えず上目遣いでため息をついた。  
「なによそれ、もしかしてこの小屋もでて行けと？いいわよ、こんなに風が強くてうるさい小屋いらないわ」

彼女は小屋に数少ない持ち物を取りに戻った。

「なによもう」

ぶつぶつ言いながら小屋から出てきた彼女が見たものはタロイモの山だった。それだけではなかった。南国の野鳥・あけびなどの食料が地面一杯に並べられていた。

「なによ、これ」

「君の為に取ってきた」

激昂していた彼女にもそれが嘘でないことは分かったようだった。しかしピークに達していた感情の山を彼女は急に下りることは出来なかった。

「君がよく寝ていたから、起こすと悪いと思って。もう少し早く帰ってこられると思ったんだけど、これ捕るのに苦労して」

彼女はふてくされた口を尖らせたままだった。私は籠の中からある物を取りだした。

「ほら」

つり上がった目に写ったのは茶色の得体の知れぬ物。

「なによそれ、毒でも食べさせて殺そうというつもり？」

一部を切り取って彼女に差し出した。素直になれない彼女は顔を背けた。

「ほら」

鼻先に突きつけられた物からは甘い香りが漂った。

「蜂の巣だよ、食べてごらん」

彼女は甘い物に目がなかったらしく、感情が欲望に負け、匂いに誘われるようにそれを手に取ると舌先でぺろっと舐めた。体が溶けそうなほど甘かったらしい。幸せな顔をしたかと思うと目に涙を浮かべた。

「美味しい」

彼女はその言葉を何度言ったことだろう。

「大げさだな、そんな物くらいで、でも機嫌直ったみたいだね」

私は笑った。

「うん」

とても柔らかな笑顔だった。

「君はほんとわかりやすい人だ」

「ごめんなさいね、ひどいこと言って、てっきり」

「もういいよ、君の銃弾のような皮肉がなくなればそれでいい。あれはこの針よりも痛いからね」

私は腕に刺さった蜂の針を抜きながら答えた。

「君のために捕ってきた物だから、ちゃんとしまっておきな。今度は納屋のかんぬきをちゃんと締めしておくんだよ」

「やっぱりここにいてくれないの？」

「君は奥さんだろ、私も男だからね」

こんな無人島でそんな貞操を守る必要もないかもしれない。

「私も男だったらいいのに」

「それならこんな事していないよ」

「あら、そうなの？女嫌いっていったじゃない」

「私は別にゲイでもなければ不能でもない、普通の男だ。私が言った意味は男なら私が手助けしなくても自分で何とかしろってことさ」

「やっぱり女は手がかかる？迷惑？」

そう聞く彼女がおかしくて仕方なかった。この状況をどこからどう見てもその答えは明らかだ。なのにそんな分かり切っている質問を女は平気でする。馬鹿な男は何故かそれを可愛いと思い、思ってもないことを言うてしまう。たとえそれが女の手であると分かっているのだ。

「いや女一人くらいはなんでもない。ただ私は女性という生き物を信じられなくてね。女嫌いと言うより女性不信というべきだろうとおもうよ。だから君といるとかえって傷つけることになると思って

一緒に暮らさないだけだ。でも心配しなくていい、食料は持ってきてあげるから、だから君も無視はしないでくれよ。住みやすい島だったのにこのごろ妙に居心地が悪くてね」

「ようやく降参したのね」

「和解さ」

私のせめてもの抵抗だった。

「そういうことにしておきましょう」

二人は声を上げて笑った。

「話してくれる？あなたのこと」

「君も聞かせてくれるかい」

彼女はそっと頷いた。手に持たれた巣から蜂蜜が垂れ彼女の指を薄い膜で覆っていた。

「私も聞きたい、あなたがここに暮らすようになった訳」

「女性は欲張りだよ」

老人は手に小枝を持ち火をかき回した。また火の粉が中から立ち上った。

「男の秘密を許さない。なんとしても聞き出そうとする」

「話したくなかった？やっぱり」

「いや、もうどうでもよかった」

そういったあと老人は話し始めた。

今から30数年前、私はイギリスの医者の子に生まれた。ミドルスクール、ハイスクールと名門と呼ばれる学校で学び、お決まりのように医大に入った。その頃イギリスは不況のどん底にあった。市立病院の内科部長として高給をもらっていた父は、真っ先に首を切られた。しかし父は臆することなく打って出た、植民地のインドに渡り、高度な医療行為を行える病院を開いた。むろん貧しい現地の人々を対象にしたものでなく、初めから目当ては欧州からこの地に商売にやってきた貿易商とその家族だった。ろくな医者などいないインドで、健康に不安を抱えていたヨーロッパ人達はたくさんいた。だからいくら高い治療費も、信頼できる医療の証と患者達は金に糸目は付けなかった。しかし一方でインド人達は病気にかかっても治療費を払えず神に祈るしかなかった。実際建物の内と外では命の価値が恐ろしいほどかけ離れていた。私は大学を卒業すると、父親と同じ内科医としてその病院に勤めた。そして後継者として父の豊富な知識を学び多くの経験も積んだ。五年もたつと私も患者に必要とされる医師に成長していた。その頃になると、病院は白人で待合室は常に満員だった。当然利益は右肩上がりに増えていった。父はその本国から外科医と産婦人科の医師を呼び寄せ、最新鋭の機械を導入し、次々と利益を再投資し病院は大きくなっていった。初めのうちは覚えるだけで精一杯だった私が、金持ちだけ相手にする病院の姿勢に疑問を持ったのは勤めて7年目頃からだった。そしてそれは徐々にわだかまりに変わっていった。翌年、手術室を備えた総合病院を建設する計画を聞かされた私は父に彼にうち明けた。

「もう充分儲けたはずですよ。お父さん、少しでも良いからこの国の病める人々の手助けをしませんか」

いつも優しい父の顔が険しくなった。

「何が言いたいんだ」

「治療も受けられずに死んでいく貧しいこの国の人を見てられないんです」

父は私の言葉を制した。

「それは彼らにお金がないからだろう、私は人種差別しているつもりはないよ」

「差別していると言っているのではあません。ただ治療費を現実に払えない人たちにも何らかの」

「奉仕かい」

「平たく言えばそう言うことになりませぬ」

「人はパンのみに生きるにあらずというが、何も口にしないで生きられる人間などいない。じゃあパンはどうやって手に入れる？」

私は答えなかった。

「そうだ金だ、それがなきゃ生きることにもままならない、いいかい、私だって金だけが目的で生きて

いるわけではない。しかしおまえが救おうとする貧しい人間はこのインドだけじゃない。母国イギリスやフランスアメリカ、世界中にいる。何故このインドだからといって、私たちが稼いだお金を奉仕に使わなくてはならない？」

「先進国とこの国じゃ医療が根本的に違いすぎます」

「おまえは事業をしている当事者でないからそんな甘い理想が描けるんだ。もしこの病院がつぶれたら、おまえが今見ている金持ちのだって困ることになる、奉仕は一企業の限界を越えてはなりたくないだ」

「だから出来る範囲でかまわないからって」

「一人見るのも100人見るのも同じ事。その為の予算が底をついたらおまえは玄関先で死にそうな子供を抱えた母親の願いを断れるのかい」

父は燃えさかる炎のようにまくし立てた。

「おまえは偽善者と呼ばれたいか、おまえの勝手な理想で病院が非難されることになったら責任とれるのかい」

「そんな大げさな」

「おまえは甘い、私たちが神のように患者に手を当て直せるなら何もいわない。しかし私たち医者は神じゃない。高い薬を用い時間をかけて患者の面倒を見るには結局は金が必要なんだ」

「じゃあこのまま見過ごせと」

「この国には私たちの知らない有り難い神々がいらっしやる。何百年と彼らはそうして生きてきた、自然の流れに従うまでだ」

「私は一人でも多くの人を救いたいです。」

「砂漠にバケツで水をまくようなものだ、もっと現実を見なさい、正義感という熱病にうなされて死ぬのはおまえなんだぞ」

「私は人を救うために医者になったんだ、父さんのように金儲けの医者になりたくない」

私も父も興奮していた。こんな喧嘩は初めてだったせいもあった。

「これほどいっても私の言うことを聞けないなら好きにすれば良い、その代わり私の病院とは関係ないことだ」

鉄のような父の意思に私ははね飛ばされた。その夜、私は荷物をまとめ病院を出た。母親は私に何とか思い留ませようとしたがもう引き戻れはしなかった。翌日に土煙舞うカイロの街をカバン一つもって立っていた。診療所に適当な一軒家を探していた。しかし悲壮感はなかった。むしろ気持ちが吹っ切れて軽くなっていた。実は私は一人ではなかった。二年前からつき合っている女性がいた。名前はジェシカ・シモン。私より5つ年上の看護婦で頭のいい仕事の出来るフランス生まれの魅惑的な人だった。本国の大学病院の主任をしていた彼女を、父がわざわざ引き抜いて来ていた。私は昨晚彼女とベッドを共にしていた。

「僕は町医者になろうと思う」

「そう」

「君は反対？」

「院長は反対なんでしょね」

「ああ、儲かる話じゃないから」

「どうやってやっていくつもり？薬代もでないわよ」

「わかってる。外資系の企業に寄付を募ってみる、インドの政府にもね、さしあたりは僕の預金を充てるよ」

「本気なのね」

「本気だ」

「あなたも院長と同じで頑固ね、病院の跡を継ぐ気はないの？」

「今はない、父の考えもあるだろうし、僕には君がいてくれればいいさ」

彼女は部屋の真向かいにあった鏡に映る自分をじっと見つめて唇だけを動かした。

「でも私は今、病院を辞められないわよ。生活があるし」

もしかしたら手伝ってくれるかなと彼女の座る医院の机まで考えていた。しかし確かに彼女の言うとおり現実の生活など保証などでできない。私は浅はかな期待を抱いていたことを気づかれまいとはっきりとした言葉で彼女の意見に同意した振りをした。

「いまはその方が僕も気が楽だ、君に勤めてもらっても払える給与なんてないだろうし」

ほのかに揺らめくランプの灯り、カレンの乳房は私の手の中でプリンのように柔らかく形を変えた。乳首に歯を立て私は帆をあげた。

「でもね」

「なに」

私は聞き返した。

「最後は私の事を考えて、私を幸せにして」

「約束するよ」

「それならいいわ」

祝福のキスが私の額に与えられた。喜びと勇気が湧いてきた。私は聖マリアの胸で眠れる光栄を得た男。慈愛と勇気さえもち続けられれば、私たちは幸せになれるとその時は疑いもしなかった。

二人は小屋を出て夜の砂浜にいた。花火のように瞬く星の下でソフィアは私の手を見ていた。

「綺麗な手ね」

焚き火がぱちぱちと音を立てていた。私がいるから何も怖くないとでもいうように、彼女は夜の浜辺の静けさに身を委ね目を閉じた。そして解き明かされていく私の過去にじっと耳をすませていた。遠近感がなくなるほど近くに見える何千という星たち、夜空を見上げていると言うよりは私達自身が宇宙の暗闇に漂っている錯覚をした。決まったリズムでうち寄せる波、彼女は音楽でも聴くように身体を揺らした。一羽のカモメが私達の傍らにあった流木に舞い降りた。

「それで？」

ソフィアは私に聞いた。

「うん」

私はジェシカを殺した。私は全てにおいて父に負けた。診療所に寄付は集まらなかった。父の妨害があったからだ。外資系の企業は父に融資していた。跡取りの私がいなくては病院の未来もない。父は私を潰し、負け犬なって自分の元に返ってくるようにし向けた。そして父はインド政府にも働きかけた。多くのインドの医学生をイギリスの大学に送り、学費を負担すると持ちかけ、私の診療所が公的な性格を持つ病院になることを阻止しようとした。インド政府も今は量よりも質、優秀な医師をとったその学生たちが将来さらに多くの良質な医師を育ててくれる。そうすればインドの医療は大きく変わる。今私のような駆け出しの医者に肩入れするより、国にとっては父についたほうが有益と判断したのだろう。結果、診療所は見向きもされなくなっていた。あれほどあった貯金も底をつき、満身に治療も出来なくなっていた。しかし患者は待ってくれない。下痢の止まらない赤ん坊を助けてくれと芋や野菜を手を懇願する母親、売春婦が子を孕み、得体の知れない老婆に不衛生な墮胎をうけ、出血が止まらなると担ぎこれてきた。貧困のため栄養失調で白内障になり、目が見えないのに畑仕事をして鎌で足の指を全て切り落とした少年など。お金とは無縁の人々がひっきりなしに診療所のドアをたたいた。私の顎には無精ひげがカビのように生えた。そしてその中にチラホラと白いものが混ざるころには、私の精神も限界に近づいていた。

「もうそろそろ病院に帰ってきたら？院長、きっとあなたに返ってきてほしいと思っているわ」

ジェシカはベッドで私をあやした。

「謝れと言うのかい」

「どっちが先でもいいでしょ、親子なんだもの」

「親子だから嫌なのさ、第一俺に患者を捨てて行けというのかい」

「いつまで強がっているの。私はあなたの事を心配しているのよ。今だって満足な治療も出来ずに苛立っている、患者にも迷惑よ、違う？」

確かにその通りだった。しかしそれを私の前にこれでもかと広げる彼女の言葉に腹が立った。

「早かったのよ、あなたが院長のように力を付けてから出直せばいいじゃない」

私は子供だった、妥協をしなかった。彼女の投げたロープに捕まることもせず、怒りを沈黙に託した。彼女はその日から私を遠ざけるようになった。

事態はどんどん悪い方向へと私を追い込んでいった。荷馬車にひかれ足の骨を骨折した女兒に、添え木をして帰した数時間後、その子は亡くなった。後で遺体を見て分かったのだが、内臓の一部が傷つ

いていてそこから出血していたのだ。私の見立てが甘かったと言われればそれまでだが、初めに担ぎ込まれたときには足の痛みしか訴えておらずレントゲンもない診療所では見つられなかった。その前から著しく医療の質が下がっていた診療所には悪評が立ち始めていた。死んだ女の子の父親は私が殺したも同然だと怒りをあらわにした。そして町中にその噂は瞬く間に広がり誰も来なくなった。窓ガラスにおもしろがって石を投げる子供。やめさせようと外に出てみれば外壁には『白人のインチキ医者、出ていけ』とペンキでいたずら書きがされていた。そうやってしまえば私はインド人の格好の差別の標的でしかなかった。彼らの心の中には植民地化された過去の記憶に対する、根強い不信感が燻っていた。それが私に一気に向けられた。来る日も来る日も嫌がらせを受け、私もインド人に憎しみを感ずるようになっていった。かといって父の元にもこんな無様な姿で戻れはしない。

私の足は夢遊病者のようにジェシカのアパートへと向かっていた。夜の7時、繁華街から一本入った通り。交差点を曲がるとすぐ目に入るインドでもモダンな建物の三階が彼女の部屋だった。私はアパートの玄関手前10メートル程にある花屋に立ち寄った。

情けない自分を取り繕うとバラの花束を買った。そしてそれを顔の前に持ち、アパートを振り返った。するとそこには玄関前の街路灯の下で抱き合っている男と女がいた。男は女に濃厚な口づけをすると車に乗り手を振った。車は私の前を通りすぎていった。父だった。何故父が？私は女の顔を確かめた。彼女だった。花を持つ手が震えた。次の瞬間私は彼女に向かって走り出ししていた。市街の一部だけに舗装されているアスファルトに私の靴音が鳴った。建物の中に入っていこうとする彼女の腕をつかんで無理矢理振り向かせた。

彼女は驚いた顔をしたが平静を装った。そして私の指一本一本を赤いマニキュアの塗られた指ではずしていった。今買ったバラの赤よりも赤い爪だった。

「あら、久しぶりね、元気？」

「いまのはなんだ」

「なによ急に」

「今抱き合っていたのは父だろ」

「抱き合ってなんかいないわ。一緒に学会にいて今帰ってきたところよ」

彼女は髪をかき上げた。厚い髪に隠れていたうなじが微かに皮下出血していた。そしてその髪から父がいつも使うオーデオロンの匂いがした。私は頭に血が上った。

「父と寝たのか？」

私は彼女の腕を掴んだまま引きずるように階段を駆け上がり、合い鍵でドアを開けた。

「なによ痛いじゃない、乱暴はよしてよ」

ジェシカ目をむいた。私は彼女を床にふりなげた。セカンドバックから中の物が飛び散った。汚れた下着と父が吸う銘柄のタバコが出てきた。とても生々しい想像が脳裏を駆け回った。

「いつからなんだ言え」

彼女の胸ぐらを掴んだ。胸の谷間があらわになった。そこには無数の唇の後がはっきりと残っていた。彼女もそれを見られてあきらめた。態度はさっきにもまして横柄になり、まるで水商売の女のように舌をならした。

「インドにくる前からよ。私は院長が好きだったからこんな田舎にやってきたの」

「嘘だ、君は私と2年もつきあっていなかったじゃないか」

「そうね、でも私は院長のおんなだったのよ。実際、私も彼から離れられなくなっていたけれど、あなたのお母さんの手前、結婚はできないし、そんな無茶しなくても院長のそばにずっといられるよい方法を思いついたの。将来病院を継ぐであろう息子のあなたと結婚すれば、私は彼と一緒に一つ屋根の下で暮らせる」

私は息を呑んだ。否定する余裕すらなかった。彼女の言葉を聞きながら、こんな時なのに豊満な肉体の曲線の輪郭がくっきりと目に焼き付いていく。はずれたブラジャーの肩ひもを戻そうとするマニキュアの塗られた指。すわっているせいで腹の肉がたるみ、たわわな胸との間に段が出来ていた。お尻も何故か大きく見え、ここに今まで父が手をそえて、腰を使っていたのかと思うと気が狂いそうになった。

「父もそれを受け入れたのか？」

「初めは躊躇っていたようだったわ。私とあなたが本当に仲良くなって、結婚してくれたらいいなんて、一時期は私を突き放したの。私もあなたが優しくしてくれるから、それもいいかななんて考えたこともあったけれど、やっぱりあなたは坊やだった。彼の知性と逞しさにはかなわないわね」

彼女は今私が一番引け目を感じている父と比べ、こきおろした。そして彼女は着ていた服を私の目も気にせず、脱いでハンガーにかけた。

「そんなに父がいいのか？」

「ええ、今回のことではっきり分かったわ。彼には私の求める力がある。それに男としても私を満足させてくれる。あなたみたいに私がしてあげないと次の愛撫が思いつかないような、想像力のないSEXはしないわ。いつも先へ先へと不思議な暗闇に誘い込んでくれる。そして私が気を失いそうになっても彼は行かないの」

私は怒りで拳を固めた。彼女の生き生きとした言葉に、さっきまで繰り返されてきた父との行為が8ミリフィルムのように頭に映し出された。何もかも負けた。そして彼女にもてあそばされた。

「それにもうあなたなんか必要ないわ」

「どういうことだ」

「私、彼の子供がほしいの。実際いつ出来たって不思議じゃないし」

「母がいるだろ」

「あんなお婆さん、なによ、ここに来てみて分かったけどただの召使いと同じじゃない」

「母のことを悪く言うな」

「あら坊や、ママのオッパイがまだ恋しいでちゅか？ああ、早く赤ちゃんが出来ないかな、彼がいいって言うなら、ずーと抱き合っていたいわ」

彼女はガーターベルトの紐を外すと、これ見よがしに下着を脱ごうとした。

「何見てるのよ、坊やは早くおうちに帰りなさい。その目嫌らしいわよ、鳥肌がたつわ、出ていってよ」

その時既に私の両手は彼女の首を絞めていた。あらん限りの力が指先に集まり、皮膚に食い込んでいった。彼女の身体は宙に浮き、足はばたばたと暴れた。彼女は何か叫んでいるが、声は漏れてこない。だがマニキュアの塗られた爪が、私の閉めている手をひっかいた。

「さあ、俺の前からいなくなれ。その汚い口を永遠に閉じてしまえ」

彼女の頭を壁に打ち付けた。何も聞こえなかった。いや何もかもが聞こえた。全ての憎しみ、ずるさ、欲望そして怒りが怒鳴り合い、音の共鳴で鼓膜が破れたような気がした。そして彼女が失禁をし、白目をむいたとき私は我に返った。しかしもう既に遅かった。手を離すと彼女は床に落ち動かなかった。ぷ～んと尿の匂いがする部屋の空気を興奮した私は吸った。目の前に横たわる彼女、恐る恐る頸動脈に振れてみた。私は彼女を殺してしまった。

ソフィアは泣いていた。

「可愛そう、あなたも彼女も」

「とんでもない男さ、ただの人殺でしかない」

彼女は首を振った。流木のカモメはいつの間にか二羽になっていた。恋人同士だろうか互いに翼を広げ合い毛繕いをしていた。その時たき火の中の木がパチンとはじけた。火の粉がカモメの方に向かって飛んだ。驚いた鳥たちはあわてて飛び去った。

そして私の人生も終わった。もちろん医師としても。恐ろしくなった私は逃げた。スラム街の裏を転々とした。現地の人間の犯罪は日常茶飯事で新聞に載ることなど無い。しかし白人の若い女性が殺されたというニュースは一面を飾るには申し分のない内容だった。私は売春宿の一室に隠れ、女に毎日、新聞を買ってこさせた。売春婦は自分も読みたいからと、官能小説の載っているタブロイド新聞を買ってきた。そこには『女を殺したのは父親かそれとも息子か？白人親子の三角関係の末の醜い痴態』と面白可笑しく事件の内容が取り上げられてあり、警察は院長の父が彼女の殺害される直前、市内のホテルで関係を持っていたことを突き止め、最重要容疑者として取り調べをしていると報じてあった。また同じく彼女と恋人関係にあった息子の所在も分からなくなっているとして、行方を捜しているとも書いてあった。私より12も若い売春婦は鼻を鳴らしてわらった。

「バカね、この親子。どっちなのか知らないけれど、女に丸め込まれて天秤に掛けられたのね」

「最低の女だな」

「最低なのは男の方よ」

「何故、騙したのは女だろ」

「お客さん、女が嘘つかなくてどうすんのよ。真っ正直に生きてたら男達にいいように遊ばれるだけ。女の嘘は数少ない武器、あたしなんかどれがほんとでどれが嘘も分からなくなってるもの」

「君は恋愛したことないのかい」

「あるわよ」

「なら嘘ばっかりついていたら、そんな気持ちも滑稽に思えないかい」

「あんたってとことんバカね。女はその一瞬好きならいいのよ。ずーと好きでいてって男にねだるけれど、そう言ってるときの自分がかわいいの。永遠の恋愛なんてあり得ない。だからこそ男達は女を買いにこんな汚いところに来て、誰が入れたかも分からない私たちに腰使ってるんじゃない。結局は男も女もその場しのぎなのよ。あ～気持ち悪い、久しぶりに愛なんて言葉口にしちゃった」

彼女はそう言うと私のズボンを強引に下ろし、股間に顔を埋めた。私は刺激を受けながら彼女の言葉を嘔みしめた。そして女という生き物の醜さに気づけなかった自分の愚かさを恥じた。あとは自首する勇気もなく逃げ回るだけ。取り調べられている父親に対する復讐心もあったが、あんな女の為に牢獄に入れられることが納得出来なかった。しかし警察の捜査は私の周りに及び始め、隠れる場所を失っていった。そしてついに死も覚悟のうえでこの島に渡ったというわけさ。誰も来ないこの島にね。

「これが君と暮らせない理由、脚色などいっさい無い愚かな話だよ」

「もういっさい女は信じられないという事なのね」

「嘘は女の当然の武器なんだから、私はそれを見抜けない」

「私があなたに何かしてやれることはある？」

ソフィアは私の手の甲に手を重ねた。女性の柔らかな温もり。私はその手を彼女の膝に戻していった。

「もうこのままでいい。君には私が病んでいると見えるだろうけれど、人は大なり小なり何かしらの病気を抱えて生きているものさ。ただそれが耐え難い苦痛ではないから医者にはいかないか、苦痛とは感じて医者には診られるのが嫌いで騙し騙し暮らしているかだ」

「あなたはどちらなの？」

「どちらも」

「痛みも感じないし、医者も大嫌いだ。私は末期癌のようなものさ」

「癌なら痛みもあるし、直す手だても」

「治せないさ、どんな医者にも。人を殺したという事実は変わらない。だから私は多量のモルヒネを打ち込んで自分を麻痺させた。お陰でこうやって痛みも感じず生きている」

私は自分の胸をどんと叩いて強がって見せた。話し始めてどれくらいたっただろう。夜の浜は闇に深みが増していた。真っ白な月が少し傾き、生き物たちの寝息を吸い取っている。誰もが無防備に腹を見せ、その隙間をねらって海亀が産卵をする。

「だから君も私に同情する必要は無いんだ」

私は立ち上がり、薪となる乾いた細い流木を見える範囲から探した。炎の光の届く丸い円の周りをゆっくりと歩きながらソフィアに聞いた。

「もう遅い、小屋へ帰るかい」

「いいえ、寒くもないしあながいるから怖くない。ここで朝日が昇るのをみたいわ」

「君はおかしな人だね」

「何故？」

「今話しただろ」

「彼女を殺してしまったこと？確かにショックだけれど、私もあなたならそうしなかったとは言い切れない。少なくとも今のあなたは後悔しているわ。犯罪者ではあるけれど悪人ではない。何故ならあなたは私を救ってくれたもの」

私は集めた何本かの木を炎のなかに放った。

「それにあなたが話してくれたから私も話さないといけない、自分のこと」

ソフィアは自分のスカートに風で舞い上がった砂をパンパンとはらった。

「何故その服を？歩きにくいだろ」

彼女はこの島に流れ着いたとき身につけていた紺のワンピースを着ていた。

「いつもズボンとシャツだけだと男になったみたいで、今夜はこんな綺麗な星空の下でいられるんで

すもの少しだけ女性に戻りたかったの。あなたが女を嫌いでも私は男にはなれないから」

「似合ってるよ」

「いいのよ、末期癌なんでしょ、おせいじいう元気もないくせに」

彼女は下を向いたまま足の先で砂に絵を描いた。

母のそのワンピースを私は持ってる。

[ 胸元の開いた、たっぷりしたフレアーのスカートでしょ ]

「だったかな」

「きっとそうよ、母のクローゼットにいつもあったもの。あれは私が18になった頃だったわ。ママに若すぎるデザインだからもう着ないでしょ？て聞いたことあるの。そうしたら『これは大切なものよ、よけいなお世話よ』って不機嫌になった事覚えているもの」

私は老人の中の若き母に負けたのだろうか？しかし母にならまあいいかと剣の柄に手をかけなかった。

むしろ彼の中でそんな母が生きていた事がうれしかった。

「おなか空いただろ、スープを煮込んであるんだ、食べるかい？」

老人の話に夢中になっていてそんなことも忘れていた。そう言われて反応したかのようにお腹はキュッと鳴った。そしてそれだけではなかった。身体の生理反応は一気に押し寄せてきた。

「あの」

「だべるかい？」

「はい、いやあの」

「ん？」

恥ずかしくてなかなか言い出せなかった。しかし尿意は内から激しく私を追い立てる。そして自然と身体は揺れた。

「なんだおしっこかい、早くいいなさい」

私は頷いた。老人は部屋の隅に置いてあったオウム貝のランプを手に取ると私を手招きした。

「いいです、一人で行きますから、そのランプをかしてください」

私はかけてあった生乾きのズボンを履き、すみに置いてあった私のポーチを左手に、ランプを右手に持って駆け足で外に飛び出しました。するとそこは漆黒の夜、ランプの明かりなど足下を照らすだけで精一杯でした。どこを歩いているのかどこへ歩いていけばいいのか、森のざわめきが見えない獣となり襲って来そうで足が一步も前に出ませんでした。

「ちょうど月が雲に隠れたようだね、ほらこちらにきなさい」

老人は手にたいまつを持って後ろから私を追い越していきす。力強く燃えさがる炎。その明かりに引き寄せられるように老人の後ろを付いていくと、生い茂る木々が私達を包み、トンネルの中を歩いているようでした。川のせせらぎが聞こえてきました。

「この川の近くでしなさい、どこでもいいから」

老人はそう言うたいまつでぐるりと円を書き私に場所を選ばせました。

「私はどうしたらいいかな？ここにいてもいいんだけど」

側にいてほしくないのは本心でした。けれどこんな場所に一人にされたなら怖くて、おしっこどころではありません。迷っている時間はもうありませんでした。限界でした。

「耳をふさいで後ろ向いてください」

老人は怒鳴られたと思ったのでしょうか。肩をピクンとさせ、あわてて背を向けました。そして開放感が私にもたらされました。曇っていた視界からカーテンが取り払われ、雲間から月が顔を覗かせるのが見えました。次第に姿を表していく森。そこはすり鉢上の広場のように高い木々が周りを囲んでいました。傍らには小川と呼ぶには小さな流れの筋が奥から手前へと伸びていました。私はそれで手を洗い身だしなみを整え老人の肩を叩きました。

「もういいのかい？」

「はい」

「なら帰って食事にしようか。さっきお腹も鳴っていたようだし、母子して同じような音させるもんだよね」

老人は笑った。

「酷いです」

「いやいやごめん、困らせようとして言った訳じゃないんだ。ただ可笑しくて、あはは」  
老人のわらい声は森に響き、手に持った火が揺れた。その時私が仏頂面していたのも彼にはみえなかったでしょうが、相当頬はふくれていたと思います。しかしそんな中またお腹が鳴りました。老人はこれ以上笑ってはいけないと思ったのでしょうか、口に手を当て必死にこらえました。するとどうでしょう『ぷう』と彼のお尻から音がしたのです。匂いはしませんでした。明らかにオナラの音、もう老人も私も可笑しくて可笑しくてお腹を抱えて笑うばかり。

「笑うのを我慢したらお尻が笑ってしまったね、君とおあいこだ、あはは」

こんな夜だというのに私たちの心は穏やかで暖かかった。

「さあ、こんなに笑っていたら森の精にうるさいと怒られるから、その前に帰ろう」

「ねえ」

「なにかね？」

「この川はどこから来ているの？」

「話したる、もう少し奥に言った所にある湖からさ、この小川はその湖からこぼれた滴のようなもの、本流は島の北へ伸びていっているんだよ」

「湖を見に行きたいけど」

「今夜はもう遅い、明日になったら案内してあげるから今日は食事をとって寝なさい。私にもそれぐらいいはまだ時間が残っているから」

「時間が残っているって？どこかへ行くんですか」

老人は私の問いに曖昧な答えをしたまま、もと来た道を帰っていきました。私はそれ以上聞くことが出来ず、ただ森に取り残されまいと彼の背中を追いかけていきました。その夜私は母も口にしたりする老人の作ってくれた食事で胃を満たしました。そして一番美味しかったのが海と山の幸がいっぱい入った具だくさんのスープ。

「とっても美味しいです」

「それはそうさ、塩加減はみんな君のお母さんの保証付きだからね」

そういいながらもなぜか彼は食事をとろうとしませんでした。

聞くと『もう食べ飽きたんだよ』笑うだけでした。

朝靄の立ちこめる森、太陽の光が白き柱となってシダの草むらに突き刺さっていました。すがすがしいとは言うには疑問の残る、多種多様な草と苔の混ざり合った香り。風もふかないエアポケットのような早朝の一瞬。湖まで続く小道、踏みならず私の足音だけが唯一の雑音でした。母もここを歩いたのだろうか。私よりも7つも若い母の姿が木々の陰に消えては浮かびます。母は何を思いこの道を歩いたのだろうか。もしかしたら朝靄のように深い憂いに包まれていたのでしょうか？そんなことを考えながら昨日みた小川に沿って上流へと歩いていきました。すると前方に鏡のような湖が見えてきました。私の足は急に早くなり、木の根に躓きそうになりながらも走り出していました。そして道の終わりに立ったとき、可愛らしい湖が満々と水をたたえていました。老人の話にあったとお切り立った岩肌から落ちる滝、そこから岸边に向かい同心円状にうち寄せる波紋。私は側により岩に腰を下ろしました。かすかに青みがあった水の底に沈む朽ち果てた木、湖面の揺らぎに光が幾何学的に変化し、湖底の白砂の上を小魚がはしゃぎ回っていました。気づくと森の中から一匹の虫が現れ、ゆっくりと湖の上を横切っていました。

「綺麗な水」

私は水に手を浸しそれを掬い取り、こぼれ落ちぬように素早く口に含みました。

水と言うより液体の空気が喉を渦巻いて落ちていくようでした。味覚でなどいい表せない清涼感が細胞に行き渡っていくのです。私は暫くその余韻に浸っていました。

「やっぱりここにいたね」

先ほどまで私が湖を見渡して立っていた場所に老人がいました。

「さあここでピクニックとしましょうか、ほら」

老人は背中から椰子の葉で編んだバッグを前に突き出しました。

「ごめんなさい、だまってきて。早く見たくて、すぐ帰るつもりだったからあなたを起こすこともないかなって」

「別に怒ってはいないよ」

老人はそう言って七色のビニールシートを岸の土の上に広げました。

「こんな綺麗な場所に似合わないから敷くのはやめましょう、イメージ壊れてしまいます」

私はしゃがんで老人の顔を下から覗き込みました。

「しかしこの地面は冷たいよ。私ならいいけど女の子には」

「アルマンゾさん、いっておきますけれど私は30歳なんです。女の子なんて呼ばれる年齢じゃないんです。もう立派に女なんですからね。それにやっぱり不似合い、このままいい気持ちでいたいから早くしまってください」

「いやそれは失礼、でもこのシートは島に流れ着いた物の中でも上等な物なんだけれどな」

老人は七色のシートの端を摘みながら、それでも敷たそうになにかぶつぶつ言いました。

「男性にはわかりません」

「じゃあこれはどうかな」

彼は袋から焼きたてのタロイモと魚の干物を取り出しました。でも私はそんなに空腹ではありませんでした。

「今は結構です。昨夜遅くたくさん戴きましたから、まだ胃がもたれているようです」

老人は当然私が欲するものと思っていたらしく、両手にタロイモを持ったまま動きがとまってしまいました。瞬きする彼の目、食べてといわんばかりです。

「あ、そうそう、これもあるんだよこれ」

私がタロイモにまったく興味を示さないと判断すると、まるで最終兵器を披露するかのように小瓶を取り出しました。

「これを水に溶いて飲むとおいしいジュースになるよ」

娘に相手にされなくなった父親がおもちゃを餌に必死に気を引こうとしているようでした。

「お母さんも好きだったな」

少し可哀想になった私は

「じゃあ作ってください」

と岸の岩に腰掛けました。老人は嬉しそうに頷き、ワインの上を切り落としたグラスに水をくみ、小瓶の中身をその中に垂らし楽しそうにかき混ぜました。その姿は誰かさんにそっくりでした。私はグラスを受け取り一口口に含みました。そしてすぐに気づきました。飲みなれた母の味でした。その時今まで半信半疑だった老人の話が紛れもない事実で、母がこの島に実在したという証を私は身をもって知りました。口の中に広がる甘みと微かな酸味。

「これね君のお母さんが作ったんだ」

「うん」

「あれから暫くしてソフィアがこれを作って私の暮らす巨木の見晴台にやってきた。」

老人はそう言うとタロイモの皮をむきながら草むらに腰を下ろしました。驚いたコオロギが何匹も四方八方に飛び跳ねました。

「おみやげ持ってきたわよ。あらとっても眺めのいい場所」

狩りで疲れ、寝ていた私の所に彼女が梯子を登ってやってきた。手にはこの小瓶が握りしめられていた。

「もうお昼よ、起きてほら、美味しい物作ってきたんだから」

「なんだいそれ」

「あててみる？」

「いや、どうせ当たらないだろうから」

「つまらない人ねえ」

まだ眠かった私はろくに答えようともせず、瞼を閉じようとした。その枕元に彼女は座った。腕が耳に当たるほど真上に伸ばし背伸びをする背中。その両腕の間の向こうに見える青空をサギが群を成し渡っていった。

「いいな私も鳥になりたい」

隙間だらけの枝の床、彼女は夏休みを迎えたばかりの少女のように足をぶらつかせた。

その姿にはこの前までのどうしても帰らなくてはという悲壮感はなかった。既にここに来てふた月が過ぎようとしていた。彼女もこの島から出ていく事の難しさに気づいたのだろう。私が告知したこととはいえ泣き言を言わない彼女を見るとかえって罪悪感を覚えた。

「乙女チックかな、でも本当に気持ちよさそう、空を飛ぶって」  
「君は私が怖くないのかい」  
「なにを？」  
「人を殺したって言っただろ」  
「ああ、またその事、言ったでしょ怖くはないって。だって私でもナイフを握りしめていたかもしれないもの」  
「同情？」  
「いいえ、あなたは自分の犯した罪の重さを知っているわ。可能なら罰を受けるべきでしょうけど、法で裁かれてもあなたの罪は消えないでしょうね。だからずっと苦しめばいい」  
「厳しいね」  
「ええ、臆病なモグラには誰かが言ってあげないと、土からなかなか顔を出さないから」  
「モグラねえ、でもモグラはきっと土から顔を出さないよ」  
「なぜ？」  
「君の言う愛なんて言葉、考える気にもならないからさ」  
「愛なんてこの世にはない？」  
彼女は振り向きもせず話し続けた。穏やかな横顔に木の葉から差し込む木漏れ日が白い肌に揺れていた。後れ毛がそよ風に微かになびき彼女は前髪をかきあげた。  
「君にはあるのかもしれないけれど、私にはもうない」  
「そう」  
彼女はそういうと私の隣に横になった。そして私の胸に顔を埋めて目を閉じた。突然のことに私は彼女を抱きしめるわけにもいかず、ピストルを突きつけられた犯人のように、寝たまま両手をあげた。女性の甘い香りがした。柔らかな胸のふくらみを感じた。  
「おい、きみ」  
「いいじゃない、どうせ愛なんてないんだから、本能のまま抱けばいい」  
「好きな男ならいざ知らず、私みたいな」  
「可笑しいわね、愛なんて信じないあなたがそんな心配するなんて」  
彼女はいつそう強く私に抱きついた。  
「さあ私を抱きなさいよ、何してもいいわよ、好きなように」  
「投げやりにならなくても」  
「卑怯よあなたは。優しくしたり突き放したり。あなたこそ言葉をもてあそんでいるんじゃない？」  
彼女はそういうと私のズボンに手をかけた。私はその手を掴み言った。  
「なにそんなに荒れているんだ」  
彼女の方は震えだした。  
「月のものがこないの」  
「え？」  
「ないのよ」  
私のシャツの背中を強く握りしめる手。  
「死にたい」  
声を振り絞るように言った後彼女は激しく泣きじゃくった。ただごとでない彼女の様子には私は仕方なく肩を抱いた。あやすというのだろうか、腫れ物に触れるように私の身体は緊張したままだった。どれほどたったのだろうか彼女の涙の雨は私の胸に大きな跡を残しやんだ。  
「ごめんなさい」  
涙をもう一度私の胸でぬぐう彼女。  
「何があったか聞いた方がいい？」  
「最後まできいてくれるなら」  
「最後まで聞くよ」  
「よかった、もう小屋の壁に向かって話すのが切なくて」  
「私の手はこのまま肩においていたほうがいい？」  
「聞くまでもないわ、こういう時のために男の手はあるのよ」  
私は自分の手を眺めて新しい発見をしたような気持ちになった。そして彼女は話し始めた。強い一陣の風が吹き無数の青葉が頭上から舞い降りた。

老人は傍らの草を引き抜き指に巻き付けた。そしてきつくその端を引っ張り、指の先が見る見るうちに赤くなっていった。私のカップはもう空になり、ブルーベリーのかすが残るだけだった。老人は話すのを躊躇っているように見えた。私は待った。無理にせかさなくとも、彼は私が何を聞きにここに来ているか十分知っている。そしてその用意もしていると彼は言った。生理の来ないわけ、まさに私の命。老人が母を抱いたのだろうか。

しかしその予測は簡単に打ち壊され最悪なものとなった。その時の私の気持ちとしたら、この老人が母の相手ならまだ良かったのと思った。酸っぱい胃酸が胃の粘膜を溶かすそんな苦々しい話となった。

「嵐で船が難破したっていったでしょ」

「ああ」

「でも本当は違うの」

彼女はつばを飲み込んだ。その音が彼女を抱いている私にはよくわかった。

「本当は船旅の途中、海賊に船が乗っ取られてそこから逃げ出してきたの」

海賊といえば中世のバルカン半島を拠点にして、大西洋を暴れ回ったバイキングを思い浮かべる。しかしここ、インドシナ半島に面する海域はヨーロッパ、中近東からの船を獲物とする海賊が多数存在した。普通なら大型の貨物船や豪華客船を狙うのだろうが、その日はよほど獲物が少なかったのか彼女の乗った小さな旅客船までが海賊達の標的になったらしい。

「海賊船には様々な人種の男達が乗っていたは。一艘でなく何艘もで私達の船を取り囲んだの。手にはナイフ、肩には自動小銃をぶらさげて、一気に船に乗り込んできた。真っ先に船長と機関士は頭を打ち抜かれ海に捨てられたの。一人の男性客が自分の持っていたピストルで海賊を威嚇しようとしたの。でも相手の人数が多すぎて誰に銃口を向けていいのかわかった瞬間、彼の背中に太いナイフが回転しながら突き刺さったわ。ナイフは背中から胸に貫通し血の滴った刃先が白いシャツのブローチのように光に輝いた。そして男性は甲板に倒れ刺さっていたナイフが背中から少し飛び出したは。誰の目にも即死だって分かったの。でも海賊は後ろ頭に向けて銃を乱射したわ。そう頭が無くなるほど。何人もの女性が気絶して倒れ、海賊は笑いながら死体を海に蹴り落として言った。『女だけは助けてやる。しかし、情け深い海賊だと思ふなよ。気に入らない奴は容赦しねえ。生かすも殺すも俺達次第だ、あはは』そこにいた海賊達の全員が一斉に合唱するように笑ったわ」

話せば話すほど彼女の記憶は鮮明になっていくのだろう。口調はどんどん早くなっていった。

「そしてその言葉はすぐ現実となって、男性客は次々と殺されたの。金目の物は瞬く間に海賊船に積み込まれたわ。そして女もね」

「女だけ？」

「そうよ、それも海賊達の気に入った若い女だけ。あとの女達はみんな船と共に沈められたの、多分みんな死んだでしょうね」

「君は海賊達の船に？」

「それが良かったのかどうか、私は同い年のメイドと一緒に船倉に詰め込まれたの。それから毎日地獄のような日々が始まったわ」

「そう」

何が彼女に起きたかは想像できた。私はただ頷く事以外出来ず、息を殺していた。

「私達は汗くさい男達の性器を加えさせられ、綺麗にしると命じられた。そして彼らの身体が反応したら素っ裸にされて甲板の上に並べられたわ。まるで水揚げされたばかりの魚のようだったわ。男達は一人の女を犯してはまた次の女と、前の男達の体液が残っている私達の中に、お構いなしに流し込んでいった」

「いいから、そんなこと言わなくていいから」

「いいえ聞いてよ、男だってどれほど女に酷いことを出来るか聞いて」

彼女から吹き出した怒りが、涼しかった巨木の木陰で燃えさかろうとしていた。男の私にとってレイプされるという屈辱が、どれほどのことか理解出来たか自信はないが、腕の中で震えているこの身体が残忍な男の本能に悲鳴を上げていたかと思うと、自分自身も汚らわしい生き物に思えた。

「メイドも私も、そして他の女達もぼろぼろになるまでもてあそばれたわ。食事は残飯、シャワーなど浴びることもなく、足もつかない海に突き落とされては男達に汚された身体を洗うだけ、そのまま流されていった人もいたわ。二週間くらいたったときには、もうみんな意志を持たない人形のようにになっていた。だれも何も話さないし、泣くこともなくなったの。足を開けといわれれば足を開き、彼らに言われる前に股間に顔を埋めていた。まるで私達はこの為に生まれてきたのかと思った程よ。それくらい身体を差し出すことが不自然なことと思わなくなっていた」

記憶を辿る彼女の目、私は昔インドの売春宿に隠れていたとき見た娼婦の目を思い出した。

「でもなぜ君は漂流していたんだ、身体洗っているときに流されたの？それとも逃げ出したの？」

「ううん、島一つ見えない海の真ん中で逃げ出すなんて怖くてできなかったは。別に死ぬのが怖いというんじゃないくて、独りぼっちで漂って鮫の餌食になって死ぬのがいやだったの。死ぬなら一気に命を絶ってほしかった」

「じゃあどうして」

「二週間獲物のなかった海賊達の前にタンカーが現れたの。コンテナをいっぱい積んでいたの。海賊達は久しぶりの獲物だと奇声上げたわ。そしてそれまで抱いていた私達を船倉に押し込めて鍵をかけたの。けたたましく鳴るエンジン音の向こうから銃声が微かに聞こえていた。暗い船倉には私を含め7人の女性がいたわ。その内の三人は連日の暴行と暑さと不衛生のせいで体調を壊していた。30分くらいたったとき、船に戻ってきた男達の声がしたの、ああ終わったんだなと思ったわ。でも様子がおかしいの、私達の乗った船に銃弾が撃ち込まれる音がしたの。それも何発も何発も、男達の悲鳴が聞こえ船が蛇行しはじめた。私達は船倉の両方の壁に右左とぶつかった。そのうちエンジンが爆発して、轟音と共に船が真っ二つに裂けた。私達は暗闇から太陽の照りつける海へ放り出された。そしてやっと分かったわ。海賊達の狙った船はただのタンカーじゃなかったことをね」

「軍艦？」

「いくら何でもそれはないわよ」

しかし海賊を威嚇し沈められる装備を持ち合わせている船と言え、それくらいしか考えつかなかった。

「中国マフィアの密航船」

「なんでそうだと？」

「だって高い甲板からこちらにマシンガンを向けている男達の顔は中国人だったし、海賊が金目の物と思って開けたんでしょね。コンテナの一つの扉があいてて、何人もの中国人の男女が顔を覗かせていたのよ、それも疲れ切ったよれよれの服でね」

職を求め、政治的迫害を逃れるため世界中で様々な民族が流れ漂っていた。特に蛇頭と呼ばれる中国マフィアが、華僑のネットワークの要請により、欧州はもとより北アメリカ・南アメリカへ中国の農村の貧しい人々を密航させている事は良く知られていた。

「海賊達は狙ってはいけない物に手を出したのよ。私達は波間に漂いながらタンカーに助けを求めたわ。暫くすると梯子が降りてきて、船の近くにいたメイドが引き上げられたの。私も近づこうと泳ぎ始めた時よ、側にいた女の人が私に抱きついたの。彼女病気だったしもう泳ぐ力もなかったのね。私は海の中に引きずり込まれ、二人とももがきながら沈んでいった。泡の粒が上へ上へと登っていった。そして私の記憶は途絶えた」

ソフィアはいつの間にか目を開けていた。私の顎髭を引っ張りながら、顔の表情は凍っていった。それでも話は続いた。

「気が付いたとき仰向けに海に浮かんでいた。照りつける太陽が私の目を容赦なく刺していた。そう一番恐れていた事になったの。360度なんにもなかった。海の下には鮫が狙っているような気がして潜ってみることなんてできなかった。そういえば頭の上をカモメが何羽も回っていた。カモメが禿げ鷹に見えたわ。鮫に食べられた残りをもっていくのかなって、ぼんやり思ったりしてね。後はあなたが知るとおり流木に捕まって流されるままよ」

「君はそのときに出来た子供だって思っているんだね」

「あれだけ好き放題にされたならね、女って悲しいわね、どんな男の子供でも妊娠出来るんだから」

「でも分からないじゃないか、ご主人との子かも」

彼女は咳をするように、鼻から息を吐きながら身体をかがめて笑った。まるで私が余りにも幼い物言いをしたような、そんな笑いだった。

「あり得ないわ。だって主人は一年も私に指をふれていないもの、もう愛されてないの」

「だって家族で移住するって」  
「好きなでなくても生活は共に出来るものよ」  
「君も愛していないの？」  
「私達はまだ結婚して3年しか経っていない。熟年夫婦の倦怠期とはちがう。あなたの質問にYESかNOで答えられるほどハッキリはしていないの。でも今の私は愛されていないのは確か」  
「離婚は考えなの？」  
「確かに切ないし悲しいわ。でもね算数のように離婚という結果出す前に、何でこんなになっちゃったんだろって思ったの。主人は本当は優しい人、それは分かってるの。今外に愛人がいるのよ、でも」  
「なら君を裏切ってるんじゃないか」  
「そうね、許せないし悔しい、殺してやりたいとも思った」  
「なら」  
「でもそうさせたのは私かもしれないって」  
「彼にすがりついているだけじゃないのかい」  
「すがりついちゃいけない？哀れ？」  
「何でそんなに彼がいいんだ」  
「私は親の薦めで18で彼の家に嫁いできたの。でもお嫁にくる前に恋愛はしたわよ。ままとのよ  
うな恋愛ばかりだったけど。楽しいだけが恋愛の全てだと思っていた。そんな私は主人に甘えたわ。いつもキスをせがみ、いつもわがままばかり、彼をいたわることもなく、それこそ私の言葉に彼が困る顔をするのが見たくてね。私は子供が出来たらもっと求めた。分かるでしょあなたなら主人の気持ち」  
「君ははしゃぎすぎたんだね」  
「女は男に無理を言う生き物、彼もそれを知っていたから私をあやしてくれた。いつかは私も気づくだらうって耐えていたんでしょね」  
「そんなわがままな自分に気づいたのはいつ？」  
「始めからよ、でもそんなことテーブルの上にも乗っているキャンディーみたいなものだとおもってた」  
「わがままが？」  
「甘えながら男の人にねだるとき彼も嬉しいのかなって」  
男と女の遺伝子に植え付けられた誘惑のささやき。どこが限界なのかどこからが不快なのか。本来なら互いに手探りをしてその境界線を詰めていくはずなのに。彼女はそれを無視し一気に飛び越し、そして男はそれを許したために自分の居場所をなくしたのだろう。そんな冷静な分析をしている自分がわらえたよ。一番不的確なセラピストなのだからね。  
「妊娠した私はもっともっと我が儘になっていった。そして出産を終わったとき彼はもう私を受け入れてはくれなかった。」  
「それで？」  
「主人にいわれたの」  
彼女は息を殺した。私には旦那に突きつけられたナイフのような言葉を噛みしめているように見えた。  
「『欲しいものは全てあげる、そのかわり私にかまわないでくれ。君といると毎日憂鬱で息が詰まりそうなんだ。』って、酷すぎると私は言い返した。『何とでも言えばいい、君のような自分勝手な女をも愛せない、私がおかしくなってしまうそうさ』ですって」  
私は聞いたわ。  
「この家では貴方しか私の見方はいないのよ、頼っちゃいけないの？」  
「主人は吐き捨てるように言った。『私には見方さえいない。それとも君が私の見方だとでもいうのかい？』、そう言われてハッとした。彼も寂しかったんだって。それなのに私は何も与えず心吸い取り続けるだけだった。そう気付いたとき自分の幼さに呆然としたの。恥ずかしくて情けなくて主人に申し訳なかった。彼に嫌われて当然だと思った。それから私は変わろうとしたの。もう一度彼に振り向いてほしかったの。愛された日々が懐かしくて、抱いて寝てくれたあの腕が恋しくて。彼が遠くへ行けば行くほど私は追いかけた。お願いだからキスしてと。それだけで幸せだから。でも一度離れた彼の心はかえってこなかった。お客様が来て私を紹介するときの背中に回す手、モップの柄よりも堅かったの。それでも私はあきらめられなかった。今度はちゃんと彼と愛し合いたい。もう二度とあんな事

はしないから振り向いてくれさえすれば、ちゃんと与えてあげられるのに」

「やっぱりYESなんだ」

「ん？」

彼女は私の目を見た。

「愛しているってことさ」

「ああ、そう言うことになるわね。でも意地も半分あるかな、少しは女の子から女になったというのかしら」

「私には答えようがないな」

「でももうおしまい、なにもかも」

お腹をぼんぼんとはたきながら悲しげに笑った。

「妊娠さえしてなければ、あれは悪夢だったと秘密にしておくことも出来たけど。ねえあなた堕せない？あんなならず者達の赤ん坊身体のなかにおいておくこと自体汚らわしいの」

「無理だよ、機材も何も無い」

「そうよね、このまま誰の子供かも分からない赤ん坊に苦しめられるのね。毒が身体に広がるように。そして生まれたときには主人との糸も切れてしまう」

手にもっていたグラスはいつの間にか下に落ち、小石に当たって砕けていた。破片が足に飛び散り、ズボンからでていた肌に食い込んでいました。血の筋が靴下につたい、真っ白な布に広がっていきました。しかし痛みなど感じません。それよりも流れ出す自分の血が汚く見えました。私は母を苦しめた毒そのものだったのです。結局、私は父への復讐の為に作られた証でもなく、ましてや愛の結晶でもなかったのです。私はやっと落ち着いて老人の話を聞けるようになっていた頃でした。それもこれも彼が父親なら良いとなんとなく思えてきたからでした。それなのに真実は余りにも惨すぎました。

「おじさん私って汚い？」

「いや、お母さん似の美人さんだ」

「止めてよ、汚れている。これで何故母が私をこの島に来させたかよく分かったわ。これは母を苦しめた私に対する罰なのね。母はずっと私を憎んでいたのよ。そしてこの日がくるのを楽しみに待っていたの。あのお墓の下から今の私をみていい気味だと笑っているんでしょうね。私は父の子供でもなく、兄のように望まれて生を受けたわけでもなく、母にさえ愛されてもいなかった。つまりは独りぼっちだったって事ね、生まれてからずっと」

私の血に気づいた老人はあわてて駆け寄ってくると足に刺さったガラスの破片を抜こうとした。

「さわらないで、このまま体の中の血が全部流れ出してしまえばいい、どうなったっていいのよ。母の望むとおり今ここで死んであげる。そうすれば母の復讐は終わるでしょ、せめてもの親孝行よ」私は砕け散った破片の中の一つを手にとり首にあてました。

「最後まで聞きなさい」

半狂乱の私の頬を老人はその大きな手のひらで叩きました。そして破片を取り上げると、私を身動きできぬほど強くきつく抱きしめたのです。父以外の男性にこれ程強く抱かれた事はありませんでした。

「こんな惨めな気持ちで生きていけというの？」

「確かにおまえの命は不幸な出来事によって始まった。しかし、望まれてこの世に生を受けてもおまえのように幸せな少女時代を過ごせる女性は少ないだろう。何故、今日までおまえが何も疑わず平凡に暮らしてこられたと思う？」

「だからこの日の復讐のためにでしょ、いうじゃない豚は太らせてから食べなさいと。幸せな日々が長ければ長いほど不幸の海は深く暗くなるものよ」

「お母さんの事そんな人だと思うかい」

「もう、わからない。あの幸せがこの日の為のものだとしたら、どれほど母は苦しんでいたか。例え偽りであっても感謝しているの。恨んじやない、ただねあんなに優しい母がこれ程私を苦しめたいと悩んでいたかと思うと可哀想でならないの。だから自分が憎くてしかたない」

「おまえは自分を何一つ恥じることはないんだ。お母さんを救ったのはエリザベスなんだから」

老人はそういうと私を抱きしめたまま必死に話し続けた。森から湖に流れ込んでいた朝霧は姿を消し、輪郭を明確にさせた太陽が東の空に昇っていました。抜け殻のようになった私は目をふせたまま、老人の訴えるようなその言葉に辛うじて意識を委ねていました。

見た目には体力を取り戻していたように見えた彼女、しかしその身体は、旅行前の病気や海賊の執拗な暴行、そして過酷な漂流が原因で自律神経のバランスが上手く取れていなかった。そんな不安定な体調を悪阻は容赦なく痛つけた。出歩いて食料を探すなど無理になり、私は仕方なく小屋に戻り、食事の支度から身の回りの世話までするようになった。もう女が好きだ嫌いだという次元の話ではなかった。医療器材も何もない島で無事出産させてやれるのか自信はなかった。ただそれをしなければ赤ん坊はもとより母体の命も危ない。不安定な身体と傷ついた心、美しかった彼女の顔は苛立ちに、いつしか険しい表情へとかわっていた。そんなことだから食事も細くなり、口にする物といえば僅かなスープとジャムのお湯割りだけ。母胎には一番栄養が必要なときだというのに彼女は痩せていった。まるでこのまま胎児が育たず流れてしまえばいいと願っているようだった。私はそのことに対して問いただすようなことはしなかったが、その予想が現実となるように、生理のそれとは明らかに違う異常な出血を彼女の身体は始めた。顔は貧血のために青白くなり、手足は氷のように冷たかった。常に呼吸は小刻みに速く、だるそうな、そして虚ろな目をしていた。

「私このまま死んでもいいな」

時折激しくもどすとハアハアと苦しそうに呼吸しながら呟いた。このままでは流産するまえに彼女自身の体が持ちそうにないと思った。私は毎日洗濯や世話の合間をみては海に出かけ、鉄分を多量に含む貝を採ってきた。しかし塞ぎ込んでいる彼女に食事をとらせるのはとても難しかった。何とか一口でもとあやしたりすかしたりした。必然的に私の全ての時間は彼女だけに向けられていった。

「もう一人で寝るのはいや、お願いだから私が眠るまで側にいて」

「でも・・・」

「遠慮しているのはあなただけ、私はいてほしいの。それに男と女の関係になることを恐れているのかもしれないけれど、こんな身体の私を抱く気にはなれないでしょ」

その夜から彼女と同じ小屋で一緒に寝るようになった。毎夜、彼女の嘆きを聞きながら寝入るまで側にいた。ある雨の夜、彼女は目を大きくあけたまま黙り込んでいた。なかなか寝付けないのかため息ばかりもらしていた。

「眠れないようだね、雨は嫌いかい」

「静かすぎて、あれやこれやと考えてしまう」

私は彼女の視線の先を追った。そこには小屋の角に巣を張った蜘蛛が小さな蛾をとらえて、白い糸でぐるぐる巻きにしていた。そしてまるで繭のように包み込むと蜘蛛は動きをとめた。

「私はこの島に捕まったのかしら、そしてこのお腹の子に何もかも吸い取られて干からびるのね」

「今でもその子を受け入れられない？」

「いいえ、もう憎くはないの。でも愛せる自信なんてない」

「女は怖いね」

「なぜ」

「君たちは体内で人間を作る。その子が将来どんな人生を歩むかも分からないのに、もしかしたら私のような人殺しになるかもしれないのに、頭を作り、手を作り、足を作る」

「そうね、でも自分の子供ならそんなことはしないと思えるの。そんな根拠のない信頼を盲目というのかもしれないはね。本当はこうやって苦しんでいる一瞬一瞬にお腹の子供に話しかけて愛を塗り込まなくちゃいけないんでしょうけれど。今は自分を壊れないように保つことで精一杯。この子はきっと寂しがっている。でも愛してやれない」

彼女の言葉に抑揚は感じられなかった。傷口の激しい痛みにあえて意識を向けず感情を凍らせてしまったようだった。それから何日かした蒸し暑い夜だった。日に日に言葉少なく成っていく彼女に私の方も息が詰まりそうになっていた。以前も言ったが女の沈黙はブラックホールよりも悪質だった。私は何か解決策はないかと考えた。その時昔待合室で泣きわめく子供に母親が童話の本を読み聞かせていたことを思い出した。これならいけるかなと私は彼女の枕元に座った。

「なあに？」

いつもと違う私の行動に彼女はいぶかった。

「うん　、こほん、こほん」

わざとらしく咳きをし、昔、母に聞いた物語を無声映画のナレーターのように語りだした。彼女はまだ私の真意をわからないと目を丸くしたが、背筋をのぼし真剣にはなしている私の姿に滑稽なものを

感じたのか、身体を横にしベッドに肘をつき、頬に手枕をして物語りを聞き始めた。子供の時の記憶が映画のように壁に浮き出していった。

二人とも母親がイギリス人だったせいで物語は共通のようで、違うことと言えば登場するウサギの色が茶色か白かぐらいのものだった。しかしその僅かな違いを、ああでもないこうでもない議論する時間、彼女の顔に笑みが戻った。私は嬉しくなってそれから暇さえあれば知っている限りの物語の話をした。時にはあえて彼女が異論を唱えるように内容を誇張した。すると彼女は初めのうちは違う違うと首をふっていたけれど、私のいたずら心だと察すると、彼女も話しをふくらませ始めた。街でマッチを売っていた少女がニューヨークの舞台にたつ女優に成長したり。世界を一周した猫が今は水産会社を経営して、最近はやつフードの缶詰にも力を入れている。そんな空想は果てしなく広がっていった。一見するとたわいもない言葉遊びでしかなかったが、希望の物語には果たせなかった自分の夢が、愛の物語には愛への憧れが散りばめられていた。そして私達は互いをようやく理解し始めた。そして一月もすると彼女の体調も少しずつよくなり、顔に赤みが戻ってきた。ある日私が小川で血で汚れた下着を洗っていると、道の向こうから杖をつきながら歩いてくる彼女がみえた。10歩歩いては立ち止まり深呼吸をしてやっと私の側にやってきた。

「無理しちゃいけないよ」

「うん、でも今日はとても調子がいいの。薄暗い部屋で寝ているよりも森の空気をすいたかったから」

下着を洗う私の手元を見て彼女は言った。

「ごめんなさい、男のあなたに私の下着まで洗わせて、恥ずかしいけど今はあなたに頼るしかなくて」

優しい木漏れ日がいくつもの筋となって私達を取り囲んだ。一陣のそよ風が森を渡り、木々の揺らぐ音が賛美歌と聞き間違えそうなほど心地よかった。

「私は今医者になって良かったと思うよ。私のような人間でも人を救えるんだから」

なかなか落ちない汚れを爪の先で丹念に擦りながら私は言った。

「あなたに酷いことを言ったわ。何も知らないのに又主人の時のように自分勝手に気持ちを押しつけただけかもしれない。それが証拠に、結局何から何まであなたに全てを頼って生きてる。」

私は自分の上着を彼女の肩に掛けた。そして洗濯物を入れてきた蔓で編んだ籠を逆さまにし、土をはらって彼女を座らせた。

「私は島に隠れ住み、自分からも逃げて卑怯者だ。君のような女性が来なければあのまま人間であることも意識せず死んでいったかもしれない。いいショック療法だったのかもしれないね」彼女と話していると今まで自分を覆っていた固い皮が剥かれていく気がした。

「そういえばあなたの顔はずいぶん優しくなった」

鏡のないこの島で自分を見るには水に写すしかない。しかし自分自身を嫌いな私がナルシストのようにじっくり見るなど無かった。彼女にそう言われて、自分にも表情というものがあつたのだと気づかされた。一体いままでどんな顔をしていたのだろうか。このとき私は自分の顔を島に来て初めてまじまじと眺めてみた。無精ひげを生やしたシミだらけの顔、深い皺が刻まれてる目元、そのすぐ上には先日芋を掘っていて跳ね返ってきた小枝の先で切った傷がカサブタになっていた。どこからどうみても中年の浮浪者、彼女が言う優しい顔だなんておせいじにしか聞こえなかった。私はあまりの変わり様に水鏡から目をそらした。

「酷い顔だ。これで優しくなったというなら、最初はさうとう怖かっただろう？」

「いいえ、怖くなつてなかつたわ、でも」

「でもなんだい」

「あなたには表情がなかつた。笑うでもなく悲しむでもなく蠟人形のようにだつたわ。たぶん自分の心を読まれたくなかつたのでしょね」

「やっぱり厳しいな君の言葉は、怖いと言われるよりある面痛いよ」

「でも安心して。今のあなたは私の為に笑ったり泣いたりしてくれる。まるでサーカスピエロみたいよ」

「それは喜んでいいのかな？」

「なんで？」

「だってあの情けない顔をした笑い者だろ？」

「ううん」

彼女はゆっくりと顔を振った。昨日洗ってあげた髪がさらさらと肩から落ちた。

「愛すべき憂いに満ちた顔よ、だって他の劇団員は満面の笑顔で観客に笑いかけるけど、ピエロだけは涙を滲ませ、そして少しだけ微笑む。決して大げさでなくありのままの悲しみと喜びを観客さらけ出す、だからみんなは共感するの」

「君は詩人だね。私の厳しい顔をそんな風に形容してもらおうと少しは救われるよ」

「いかつくなんてないわよ。ちゃんと髭を剃り、髪の毛もサッパリすれば私も惚れてしまうかも」

「今のままじゃダメかい」

「そうね、お猿さんのピエロとじゃデートは出来ないもの」

私達は笑った。なんと心地よい一時だろう。野鳥のさえずりや風の音がいっそう軽やかな調べとなって耳をくすぐる。昔の恋人とはいつもベッドで、愛している媚薬を素肌に練り込んでいた気がする。いつもそれは性と隣り合わせの愛だった。そして独りよがりの愛だった。

「私が良くなったらあなたの散髪屋さんになってあげる。孤児院で子供達の髪を整えていたから得意なのよ」

彼女はぼさぼさの私の頭に手をあてて毛の質を確かめた。私は彼女に子供のように頭を傾けた。私はこんな喜びを長い間忘れていた。母性の豊かな安らぎ、ふくよかな胸から香る女性の甘い匂い、許されることならそのまま彼女の胸にそのまま顔を埋めてしまいたかった。

「私この島に流れついて良かった」

あきらめにしてはその声は落ちついて聞こえた。

「ここから抜け出せなくても？」

「もういいのよ」

「家族にはもう会えなくていいの？」

彼女は暫く考えた。

「運命なのよ、アルフレッドに会えないのは寂しい。でも悲しいのは私だけであの子はまだ幼くて、母親の私の顔をそれほど覚えていないわ。多分すぐ忘れるでしょう。それにこの前も話したように私が主人にすぎりつくのは女の意地も半分、たとえ万が一島から脱出して家族の元に戻れたとしても、やっぱり彼は、もしかしたらまた独りぼっちになって、ここにいるよりつらい毎日になるかもしれないもの」

「旦那は探しているかもしれないじゃないか」

「ええそうね、一応は探すかもしれない。でもそれは息子のため、主人が私を必要とってする事じゃないわ」

「どうしてあげる事も出来ないが、そんな強がりを言わないでくれ、聞いている私が悲しくなるよ」

「もう強がりじゃないかもしれない」

さっきまで私の反応を楽しそうに伺っていた彼女が急に下を向いた。

「いつも側にいて話しかけてくれるでしょ。私はそれがうれしいの。まるで毛布に包まれているみたい。だから前のように命をかけてまで島を出ていこうという気になれないの。あなたの善意にあぐらをかいているのよね。それは分かっているの、分かっているから、だから主人の時のように甘えるだけなんてしないから。早く良くなってあなたに嫌われないようにするから、だからあなたの側に置いてほしいの。怒らないでね」

胸が熱くなった。死にかけていた感情が息を吹き返そうとしていた。しかしそれが本当に愛と呼べるのか自信もなかった。ただもう一度だけ女を愛するならソフィアしかいないと思った。

それからというもの二人の間には笑顔が絶えなかった。そして彼女の出血もとまり体調も回復し、自分のことは出来るようになった。洗濯と料理は彼女に任せ、私はもっぱら食料探し。時には海岸で遊んだりもした。まるで少女と少年のようにじゃれ合い、時に軽い口げんかもした。しかし私達は決して愛していると言わなかった。その言葉を使ってしまえば何もかも壊れてしまいそうで怖かった。そんな関係だから肌を重ねることなどおろか、口づけさえもさけた。しかしそれで十分だった。昔、そんな感情にぼろぼろにされた二人にとって、言葉を口にすることが愛でなく、キスが愛の刻印でもなかった。ただ一緒にいれることが幸せでならなかった。私達はようやく目覚めた気がした。逃げていた自分と与え方を知らなかった彼女。

「無くした指輪を机の引き出しの後ろから見つけだして、暫くぶりに薬指に指にはめた気持よ」

彼女の言葉を聞き、この時ほど神に感謝したことはなかった。人の命を絶ってしまった私のような愚かな人間に神の慈悲は残っていた。私は毎朝太陽に祈った。そして瞬く間に五ヶ月が過ぎ、彼女のお腹はだいぶ大きくなっていった。

ある日の午後、私達は海の見渡せる高台にいた。降り注ぐ太陽の下、草花で敷き詰められた地面は緑の絨毯のようだった。彼女は強い日差しを避けようと、椰子の木陰に腰を下ろしていた。どこまでも広がっていく海。微かな潮の香りと波の音。彼女は摘んだ花を傍らに置き首飾りをつくっていた。白を基調とした中に赤のアクセントを織り交ぜ、男の私が見ても可愛らしいものが出来上がった。彼女は私にそれを差し出した。

「いいよ、恥ずかしいから」

私は笑った。

「つけてくださる？、私に」

てっきり自分にと早合点した私は顔を赤くした。彼女はそんな私を悪戯そうな目で見ながら、身体を横にした。そして背中まで伸びた髪を両手で束ねると持ち上げた。何の無駄もないほっそりとしたうなじが現れた。

「おねがい」

私は首飾りの両端をもち、首に花の首飾りをかけ、両脇の端を後ろで結んだ。女性の背中の中のホックを留めるときも同じだが、何故男はこんな簡単なことで手が震えるのだろう。この時ばかりは、男は思考回路を絶たれた人形のように体の自由が利かなくなる。私は首飾りをかけ終わると、まるで大仕事をしたように大きな深呼吸をした。彼女は私の方へ向き直ると顎を少し上げて見せた。

「どう？」

「似合うよ」

私は一応のほめ言葉を言った後、地面に寝そべった。

「それだけ？」

彼女は首飾りを右手で摘みポーズを取って見せた。なにを私に言わせたいのかは薄々わかったがとてもしえなかった。私は照れを隠すため彼女の大きなお腹に手を伸ばして助けを求めた。

「なによ、ごまかして」

私は耳を充て目を閉じた。それが一番の安全策だと思ったから。

「まあいいわ、でもそうやっているのをみると、まるでこの子のお父さんみたいね」

彼女は笑った。しかし彼女の言うとおり、この頃の私はもうどんな子が産まれてくるのが楽しみでならなかった。ただ一つだけ気になっていることがあった。いつもは飲み込んでしまうそれをその時は容易く口にだしていた。

「まだこの子が憎いかい？」

彼女お腹をさすり、首を横に静かにふった。

「あなたには言わなかったけど、私妊娠したと気づいたとき死のうとしたの」

穏やかな彼女の表情とはまったく正反対の内容、あまりに突然の事に私は驚きそして疑った。

「いつ？」

「数ヶ月前、あなたにこの子の事を話す前の日よ」

何故こんなに大変な事を何気なく話せるのだろう。私の心臓は収縮したまま止まったようだ。

「君とその前にはいろんなことがあったけれど、その時にはもう互いにうち解けていたはずじゃないか。だから私も自分の過去を君にさらけ出したはずだ。そんな気持ちになっていたのは私だけかい」私の言葉は刺を伸ばした。そして彼女の腹をさすっていた手が止まった。乾いた喉に唾を一つ流し込み言い放った。私に黙って死のうとした彼女に怒りが込み上げてきた。そして同時に目の前の彼女がいなくなっていたかもしれないという恐怖が私を早口にさせた。島に独りでいるなんて考えられなかった。もしいま彼女の姿が幻のように消え去ったなら、やっと思い出したこの感情をどこに注げばいいのか。しかし彼女は私の言葉の刺に感情を乱さなかった。

「そうね、確かにあなたは何もかも話してくれたわ。でも」

「でも？」

「私はその時まで自分でも感情を整理出来ていなかったのよ」

淡々と話す彼女。私はなんと言葉を返していいのか分からなかった。

「ずっとと眠れなかった。不安が耳鳴りとなって鳴り続け、目を閉じれば、私を陵辱した男達の顔が次々と浮かんだ。あの無精ひげの男の子だろうか、それとも片足のないインド人の男の子だろうか、私

はお腹を叩きながら泣いていたわ。そして朝になり、私はふらっと小屋を出た。森には深い霧が立ちこめていた。どこを歩いているのかも分からない。まるで夢遊病者のように霧の流れに身を任せ漂い歩いた。気づくと私は火山地帯にいた。あなたに決して近寄るなど言われた場所よ。木々の緑などなくまるで地獄のような光景だった。小さな火口から立ち上る黄色い煙が、昇り始めた朝日を覆い隠していたわ。硫黄の匂いで次第に頭が痛くなっていった。それでも歩き続けた。そして熱湯の吹き出す間欠泉が私の行く手に現れたの。勢いよくふきあがる熱湯の柱、けれど怖いとは思わなかった。ここに身を投げたなら死ぬるんだろうなって。ただそれだけだった」

「なんてこと」

「何も考えてなかったの、感情の赴くまま、それも綺麗な言い方ね。心の痛みを麻痺させてくれる場所を探していたのよ。だから熱湯の飛沫も熱いとは思わなかった」

聞いている私の背中に冷たい汗が流れた。

「どれくらいの間欠泉の前に立っていたか分からない。熱湯の柱が生き物のように私を誘ったわ。これでレイプされ、その上身ごもったことなど誰にもしられないで済む。もう苦しむこともない。そして右足を前へ踏み出した。その時の私は笑っていた、早く楽になりたかった」

極限の状態に置かれていた彼女の気持ちを押し量る事は出来ない。恐ろしいほど研ぎ澄まされた時間が私の知らない場所で流れていた。

「つま先が立ち上る熱湯の柱にふれた時、叫び声が突然聞こえたの」

「叫び声？私以外にこの島にはだれもいないだろ」

「いるじゃないここに」

そう言うと彼女は膨らみかけたお腹を指先で軽く叩いた。まるで寝ている子供を愛でるように。

「まだ形も何もない赤ん坊が『やめて』って泣いた気がしたの。お腹が泣いたの。可笑しいでしょ？笑っていいわよ、でも確かに聞こえたの」

医学的にそんなことはあり得なくても、体内でつながっている母と子。そんな二つの命が共鳴したのだろうか。否定するなど出来なかった。むしろそうあってほしかった。私は彼女を背中から抱きしめ、お腹に置かれた彼女の手を手を重ねた。

「この子も生きたかったんだ」

「お医者さんのあなたまで、そんなこと」

彼女が笑った。しかしすぐさまその笑みも消え、目は遠いところを見た。

「あなたに話したかしら？私が孤児院のお手伝いしてたって事」

初耳だった。いやもしかしたら話のどこかで彼女は言ったのかもしれない。しかし以前の私は彼女の話聞く耳をもっていなかった。だから No と言い切る自信がなかった。彼女は私の答えを待たずして話し始めた。

「この子の声を聞いたとき、私はその孤児院であった事をおもいだしたの」

記憶の扉が開き、彼女は現在から過去をゆっくり見渡し始めた。

「ある冬の日だった。私はいつもの通り9時に孤児院の手前50メートルで車を降りたの。普段ならこの時間には門が開けられ、シスターと子供達が遊んでいるはずだった。けれどその日門は閉じられ、子供達の声も聞こえなかったの。不思議に思いながら私は孤児院へ続くポプラ並木を歩いていった。すると門の前に包みが見えたの。誰かがほどこしを置いていってくれたんだろうと思ったの。私は嬉しくなって足早に近寄っていったわ。包みと思ったのはオレンジを運ぶときに使う木箱だった。私は宝石箱を開けるように蓋をあけた」

記憶の中で宝石箱を開けているはずの彼女の顔が表情をなくしていた。それどころか氷のように青白く透き通っていった。

「私が目にしたのは産まれて間もない赤ん坊だった。頬に赤みはなく、青白い顔の小さな目はうっすらと私を見たの。そしてか細い声で泣いたのよ。急いで抱き上げると手足はとても冷たくてセルロイドの人形のようにだった」

「何故シスター達は気が付かなかったんだい、君だって言ったじゃないかその時間にはみんな起きているはずだって」

「捨てられていた日がいけなかったの。孤児院は一週間前から風邪が流行っていたの。子供達は直って元気良くなっていただけで、前の晩から二人いるシスターのどちらもが看病疲れも重なって、自分たちが風邪引いたらしいの。だからその日の朝は子供達の食事も作れず、私が来るのをシスター達は待っていたらしいの」

「それで赤ん坊は？」

「すぐベッドに寝せて手足をさすったの、でも、なかなか体温が上がらないの」  
彼女の口調は一段と感情を抑えて事実だけを伝えようとした。

「半日位してようやく顔に赤みがもどったわ、でも反対に激しく咳をし始めたの。呼吸も荒くなり、そしてぐったりして大きな腫は熱で腫れた臉に覆われた。私は慌ててお医者さんをよびにやった。一時間ほどしてお医者さんがやってきた。赤ん坊の赤い顔をみるなり聴診器を取り出し小さな胸にあて言ったわ」

「肺炎をおこしていたんだね」

「そう、冬の外気に長時間さらされた赤ん坊の肺炎を起こしていたの。お医者さんが言うには、もうまともに呼吸出来ていないだろうって。それに治療の施しようもないって首を振った。私は苦しむ赤ん坊の汗を拭きながら、どうか生まれて間もないこの小さな命を守ってあげてくださいって神に祈ったの。その時赤ちゃんが私を見てほんの少しだけど笑ったの、切ないはずなのに笑ったの、母親と勘違いしたのかしらね。抱きしめずにはいられなかった。お願い生きてよって頼りすぎた。そうやってどれくらいすぎたのかわからない、荒々しい呼吸は教会の鐘の余韻のように細く長く消えていった。小太鼓のような心臓の拍動も演奏を止めたわ。シスターは十字を切った。部屋の外で見守っていた子供達も次々にシスターの真似をして胸の前で手を組んだは」

今まで数多くの病人の死に立ち会ったが、いつも決まって臨終の瞬間は静かすぎるほど静かで、時間も空間も魂は引き連れて天に昇っていく気がした。

「あれほど熱かった体は見る見るうちに冷たくなっていった。血の気の引いた真白い顔を見ながら、私は泣けなかった。それよりも怒りに支配されたの。何故この赤ちゃんは生きられなかったのだろうって。生きてはいけなかったのなら命は生まれるべきでなかった。この子は母親の愛に包まれて生きる権利があったのに、なぜ新芽をもぎ取るように命を絶たられたのだろうって。この子を不用意に身ごもった母親に亡骸を突きつけてやりたかった。それだけじゃない私達大人がこんな小さな存在を見殺しにしたという事実が情けなく空しかったの。私はあの一瞬の笑みを今でも忘れられない」

「その想いが君に？」

「そうなるのかな、でも想いって言うより衝動的なものよ。頭の中にあの時の悲しみと怒りが花火のように広がって私に聞いたの、お前も同じ事をするのかって」

人はなんと愚かで悲しい生き物なのだろう。最後の最後にならなければ何も気づかない。しかし彼女は踏みとどまった。私はもう彼女を失いたくはなかった。今ならまだ間に合う、何をどう形容しても愛に心を奪われた男の言葉は滑稽でしかない。まだ間に合う、ソフィアは私に必要なのだ。私は彼女を先にもまして強く抱きしめた。まるで鋼鉄の鎖のように彼女を包み込んだ。

「痛いわ」

私はその腕をゆるめなかった。それどころか彼女の頬に頬を合わせ、

「ソフィア」

私はその時初めて彼女の名前を想いを込めて呼んだ。

「どうしたのあなたが赤ん坊になったようよ」

「もう我慢できない、この気持ちうち明けさせてほしい」

私は彼女に向き合った。今言わなければいつまた彼女は自分の元を離れていくかわからない。私達に確かな絆などなく、あるとすれば心の傷を癒し合っただけ。今まではそれで十分だと思っていた。しかし今の話を聞き、曖昧な関係は不安の種をまき散らすだけの無責任なごまかしだと思った。

いや、はっきり言おう。私はなんとしてもソフィアが欲しかった。例え無人島で誰一人私の恋敵と成る者がいなくても、彼女の心の中に私は住みたかった。なんと愚かな男と言われても私はこの言葉を言わずにはいられなくなっていた。

「愛してる」

彼女の瞳に映る空、雲が幾重にも重なり流れていた。小刻みに揺れる目。

「お願い、やめて」

彼女は私を押し戻し、言い含めるように言葉を選んだ。

「私はまだ自信がないの」

「そんなものいらない、今の君でいいんだ」

「何にも変わっていないのかもしれないよ」

「私が嫌いかい」

「何故そんな事をきくの。私が答えられないのはそんな理由からじゃないわ」  
「なに？」  
「あなたを又傷つけてしまうんじゃないかって怖いよ、もう貴方を失いたくないの」  
彼女のまつげにうっすらと涙の幕が覆っていった。私の腕を掴む指先は力無くスルスルと下へ落ちていった。大きく呼吸をする彼女の胸の動きに合わせて、さっきかけた首飾りが鎖骨の上でゆっくりと動いた。  
「傷つけるほど愛してくれよ。そんなふうにあされたことがない。」  
「きっと私のことを嫌いになるわ」  
「私は何もかも理解したうえで、もとめている。跪いて誓えというならそうしよう。君が欲しい」  
「いいの？」  
彼女は今にも泣き出しそうだった。必死にこらえようと唇を噛みしめる顔に私はうなずいた。  
「そのかわり私だけを愛して欲しいんだ」  
自分はこの男だったのだろうか。私こそ思いを押さえきれない幼稚な男のままなのではないか。愛していると口にした一瞬から私は不安と戦う事となった。  
「何故あなたはそこまで私を..こんなどうしようもない女を、聞かせて」  
彼女をきつく抱きしめる耳元で言った。  
「何を言っても嘘に聞こえてしまうからいわないよ」  
彼女は頬を私の肩に乗せた。  
「ねえ、名前を呼んでいい？」  
「私の名前を呼んでくれる人は君だけだ」  
「アルマンゾ」  
私は髭だらけの顎を彼女にすり寄せた。  
「あなたに愛して欲しい、そしてこの子も」  
海の向こうの空には白い積乱雲がソフトクリームのように沸いていた

老人は私を抱きながら大粒の涙をポロポロと落としていました。  
「私達を救ってくれたのは君なんだ。ありがとう」  
誰一人近寄らぬ島で母達はやっと求めていたもの手に入れたのでしょうか。そしてその真ん中に私もいたのです。誰とも知らぬ男の娘というわだかまりは完全にぬぐい去れなくも、この世に生を受けた意味はあったのだということがうれしくて仕方ありませんでした。私は両手の親指で老人の濡れた目を拭いながら老いた父を見ているようでした。  
「今でも私を愛してくれますか？」  
「ソフィアがこの世を去った今、私にはお前しかそう思える人は残っていないよ」  
「ほんとうですか・・・」  
老人のくしゃくしゃの顔は大きく頷いて答えてくれました。父と兄に先立たれ母も失った私、世の中の全ては私を陥れようとしていると、被害妄想にも似た孤独感に苛まれていた日々。けれどそんな私を想ってくれる人がまだ残っていたのです。  
「私はおまえの幸せだけを願って生きてきた。今幸せかい？」  
優しくななめは私に問いかけました。しかしなんと答えればいいのでしょうか。とても自分から望んで政略結婚をしようとしているなどと言えませんでした。  
「ええ、もうすぐ結婚します」  
私は言葉を濁すしました。  
「お前が幸せならそれでいいんだ、よかった、それを聞いて肩の荷が下りた」  
老人の微笑む笑顔に『ごめんなさい』と詫言いました。それと同時に嘘をついている自分に対し、最後の言い訳を考えていました。私だって母のように愛されたい。けれどいくら自分を恥じたとしても、ずさんだ現代で永遠の愛を求めることは、死に絶えた恐竜を探すようなもの。例え見つかったとしても欠けた骨ばかり。私が悪いんじゃない。  
「そうでしょママ？今まで私にそんな人は現れなかったじゃない」  
老人に抱きしめられながら、母の面影に訴えました。母は首を振りしました。  
「そんな人が現れるまで私に探し続けると言うの？絶対現れるなんて限らないのに永遠に探し続ける

と？そんなの辛すぎる」

私は自分の内なる言葉を聞いて目眩がしました。会社の為、家の為とエリザベス二世と皮肉られながら肩肘張って今日まで生きてきた。けれど本当は孤独を嫌い、男の温もりの側で眠りたいと願うただの女だったと気づかされました。するとそれまで必死に保ち続けていたプライドに無数のヒビが入りました。そして次の瞬間ピンという音と共に砕け散ったのです。まるで丸裸にされたようでした。30を過ぎた私の身体に、気が付くと足のつま先から背中まで無数の傷が刻まれていました。そして左の乳房に自分で掻きむしった爪の跡があり、そこから血が滲んでいたのです。なんと粗末な肉体なんでしょう。若い女としての輝きなどとうの昔に失われ、汚らしい染みが素肌を覆っていました。何でこんな身体になるまで私は気づかなかったのでしょうか。老人に抱かれていなければ草むらに身を隠していました。それくらい今の自分が恥ずかしくて情けなかったのです。

「お母さん」

母は何も言わず頭をなでてくれました。そういえば子供の時、私が寝付くまでこうやってくれていた事を思い出します。父に叱られ嗚咽をシートでかみ殺していた夜、母の手が私の髪に触れた途端、まるで魔法にかかったように夢の中へ落ちていった事を。私は母に身を任せたまま身体の傷跡を一つ一つ指でなぞりました。どれもこれも中途半端な恋愛ばかり。いつも相手のせいにして逃げていた気がします。こんな女じゃ誰にも愛されやしない。こんな女だから本当の男は寄ってこなかったのでしょうか。薄っぺらな恋愛の記憶が自分の身勝手さを責め立てました。耳を塞いでも肌に深く刻まれた傷が神経を伝わり耳鳴りとなります。泣くこともできぬほど惨めでした。

どれくらい時間が経ったのでしょうか。気づくといつのまにか青空は雲に覆われていました。目の前の湖に雨粒が一つ二つ、湖面に小さな波紋がいくつも現れては消えていきます。そして雨は次第に強くなり波紋と波紋の間隔は狭まっていきます。老人は雨に濡れぬようと、さっき私がいやがった七色のビニールシートを取ってきました。

「さあこれを」

老人はビニールシートを私の頭の上に載せ、自分もその中に入りました。肩と肩を寄せ合い前を向いたままの二人でした。老人は言いました。

「こんな事がしたかった。娘と二人、ただこんな風に」

老人はしわがれた左手を私の右手に乗せました。

「待たせてごめんなさい」

私は彼の太い指に自分の指を差し込み、手の平を合わせしっかりと握り返しました。

「これ以上の幸せはないね」

七色の光の下、私の右隣に老人、左隣に母、親子三人が雨宿りをしていました。紛れもない親子でした。

「ねえ聞いていい？ どうして、どうして母はこの島を出ていったの？」

老人はシートに当たる雨粒の音に耳を澄ませながら、湖に落ちる滝に目を凝らしました。

それからは前にもまして私は彼女に尽くした。殺風景だった小屋を直し、両側に窓を作り、天井にも明かり取りを設けた。お腹の大きくなる彼女のため、棚の高さを変え、腰を曲げなくても必要な物を取り出せるようにもした。朝、彼女と食事を済ませると、森中を駆け回り栄養になる物はないかと捜した。断崖にも登り、カモメの卵をとり海にでかけ貝や魚を毎日のように捕った。今までこの島にこれほどの食べ物が有ったのかと思うほど、食卓のテーブルには品物が並んだ。料理上手の彼女は塩と木の実の香辛料を使い、いろいろな物を作ってくれた。そして食後には蜂蜜で煮詰めた野いちごジャムのお湯割りを飲んだ。

もう私の中にあつた女性への不信感は姿を消し、朝夕の口づけを待ち望むただの男に変わっていた。しかしこの幸せな時間は長く続かなかつた。

ある朝、この南国の島には珍しく寒い北風が吹いた。前の晩、星空を見たいと天井の明かり取りを開けたまま寝てしまったせいで、彼女は風邪を引いてしまった。風邪自体は軽く、一日寝ていたなら良くなるだろうと思われた。しかし風邪はなかなか治らず、そればかりか他の病気を誘った。彼女は訴えた、体がだるいと。額に手を当ててみるがさほど熱はなかった。脈を計ろうと彼女の腕を掴んだとき私は異変に気づいた。押さえた親指の跡が手を放しても丸い窪みそのまま戻らない、もしやと思い彼女の足のすねを押してみたら、同じく指の窪みが残ったまま戻らない。ただならぬ私の顔を見て彼

女も何か気づいた。

「妊娠中毒？」

「はっきりは分からない、私は内科医だから詳しくないけれどこの症状はそれに当てはまる」

「どうすればいいの？」

彼女にそう聞かれて、父の病院に呼び寄せられた産婦人科の医師がいていたことを必死に思い出そうとした。『この病気はまだ原因がはっきりしていないんだ。塩分の取り過ぎとか食生活に問題があるとも言われているし、患者自身の腎臓に問題があるとも考えられる。とにかく尿に蛋白が流れ出していくんだ』私は考えた。彼女の料理が塩辛いと思ったことはない。むしろ薄味で肉体労働をしている私には物足りないくらいだった。とすると腎臓に異常をきたしているのだろうか？そういえば彼女はここに来る前病気にかかり入院していた事を思い出した。

「君は入院していたと言ったね、いったいどんな病気だったんだい」

「ウイルス病って診断されたわ。高熱が出て、オシッコが濁って、腎臓がおかしくなったの」

この病気はレプトスピラ菌という病原菌が家畜や犬の尿尿を介して人に感染し高熱を出し腎炎を引き起こすもので私のいたインドでもよく耳にした病気だった。インド人の多くは家の一階で家畜を飼育し、その上の階に暮らしていた。その為気づかないうちに感染しているという例が少なくなかった。治療は抗生剤しかなく低所得者のインド人には使えなかった。結局何人も見殺しにせざるを得なかったことをよくおぼえている。

「何で君がそんな病気になったんだい、不衛生な環境にいたわけじゃないんだろ？」

「ええ、屋敷はとても綺麗だったし、いつもメイドが隅から隅まで掃除を欠かさなかったわ」

「なら何故？その病気は家畜や犬から感染するんだよ」

「私ね、屋敷の庭で孤児院の子供達のために野菜を作っていたの。その野菜をねらって野ネズミが毎日のように畑を荒らしに来ていて、その野ネズミがオシッコした土を毎日触っていたからだと思うの。後で聞いた話だけど、町中の猫を市が一斉に駆除したせいでネズミが大発生したんですって。私の他にも農家の人が何人も同じ病気になったのよ。でも私は比較的軽い方だったの、高価なストレプトマイシンっていう注射を何本もつかえたから。そうじゃない人たちは」

「だろうね、で直った後、お医者さんに何か言われた？」

「腎臓にだいぶダメージを受けたと思いますので、塩分の取り過ぎには注意してくださいって、ねえやっぱりその病気が原因なの？」

彼女は不安そうな目で私を見た。何かしらの回答をしなくてはならないと思いながら答えあぐねた。根菜類も海藻類も、適度な動物性タンパク質も与えている。彼女自身塩分の摂取にも気をつけている。とすれば原因は痛めた腎臓が妊娠という負荷に、上手く機能しなくなってきているとしか考えられない。しかしこの島で腎臓の治療など不可能だった。眉間に皺を寄せ爪を噛む私の姿を見ていった。

「ねえって、どうしたの」

「断定はできない」

「うん」

「前に痛めた腎臓が妊娠に耐えられなくて悲鳴をあげているのかもしれない」

「どうしたらいいの？私」

私はうなった。

「安静にしておくことと、塩分を控えること、タンパク質をちゃんととること」

「だって、それじゃ今までしてたことと変わらないじゃない。最近は散歩するくらいでつかれるようなこともしてなかったし。お塩も控えた食事にしてたわ」

「ああ」

いくら平然と返事をかえそうとしても、自信のなさは声の調子をどこかしら曖昧にさせた。医者とは患者には平気で嘘をつくが、身内となるともろいものだった。昔私が子供の頃車にひかれて足を複雑骨折したことがあった。一時は右足を切断しなくてはならないかもしれないと外科医に言われた。内科医だった父は勤めていた大学の勤務もできなくなるほど動揺した。あれほど自信に満ちていた父が他の親と変わらない一人の人間となって外科医に噛みついた。息子の足は切らせない。おまえにはもっと手を尽くす義務があるだろうと外科医の白衣を引っ張り怒鳴った。あのときの父の目には涙が滲んでいた。結局私は足を切断しないで済んだ。のちに私が医者になってその当時のレントゲンとカルテをみた時、こうして二本足で歩いていることが奇跡だと感じた。多分父もそのレントゲンを見たはずだった。幾ら内科医でもあれほど酷い状態なら切断もやむを得ない判断するだろう。担当医に食っ

てかかった父を思い出すと私は医者的身内へのもろさを知った。

「どうなの？」

嘘はつかないで、はっきり説明してと彼女の目は訴えていた。

「はっきりは分からない、でも流産の可能性も出てくる」

産婦人科の医師から聞かされていた。妊娠中毒症が悪化すると痙攣が起き、胎盤の早期剥離など早産、死産の原因になる。又それだけで済めばいいが最悪、母体の命も危うくなると。

「そう」

「まだそうとは決まっていなだろ、風邪の後遺症で一時的に腎臓の機能が低下しているだけで、風邪が治れば直ぐ良くなるかもしれないじゃないか。とにかく妊婦は栄養のバランスに注意して規則正しい生活を送ること。まかしておきなよ専属の名医がここにいるんだから」

彼女は死なせない、そしてこの子も死なせない。私の戦いは始まった。思いつく限りのことを試した。今まで彼女に任せていた料理も私が作り塩分を厳重に管理した。材料も偏らぬよう山の物、海の物、特に高蛋白と言われる牡蠣を潜っては欠かさずスープにした。そして少しでも清潔にと、いつもは沸かしたお湯で身体を流していただけた彼女の為に、丸太のバスタブを作った。私は毎日汗だくになりながら湯を沸かし、彼女の身体を洗った。

「ごめんなさい。結局あなたに全て背負わせることになってしまった」

お湯につかっている彼女の瘦せた背中が泣いていた。

「君の為にじゃない、もうこれは私の問題なんだ。早く良くなっておくれ、そうならわれないと困るんだ」

彼女は小さく頷いて、お湯を顔に掛けて涙を洗い流した。私に悩んでいる余裕はなかった。少しでも腎臓にいい物をと利尿作用のある植物を捜し、先ず自分が飲んでみて確かめては彼女に与えた。しかし一向に症状は良くならなかった。すこしづつ顔がむくんでいくのがわかった。休みなく働いている私に悪いと思ったのだろう、彼女は苦しいとは決して口にしなかった。しかし、大きなため息を日に何度も付くようになった。あれほど楽しかった二人の生活から笑い声が消え絶望が顔を覗かせ始めた。夜寝ていても窓から差し込む月明かりに彼女の濡れた瞳が光っていた。多分眠れないのだろう、私は彼女の背中を一晚中さすった。そんな夜が一週間、二週間と続き出産まであと3月となった。しかしもう限界だと思った。むくみは酷くなり時折痙攣を起こすようになっていた。

「赤ちゃんだめかな」

私が答えられるはずもない、連日の労働でつかれもピークに達し血尿が出ていた。

「この子だけでも無事に産まれてくれないかな」

「おまえは死なせない、赤ん坊より君が大切なんだ、お願いだからそんなこと言わないでくれ」

「やっぱり自分の子供じゃないから？」

「ばか」

俺はその時初めて彼女の頬を叩いた。悲しくて悔しくて仕方なかった。何のためにこんなに苦勞して毎日世話をしていると思っているのだろう。一人でも生きていくのが大変なこの島で、私は彼女が島に来てから何倍も働いている。それもこれも彼女とお腹の子供のため、どちらも愛しくないはずがない。病気のイライラが彼女に今の言葉を言わせているのだと分かっているのに、そうせずにはいられなかった。

「ごめんなさい」

彼女も自分が言ったことの意味が分かっているのだろう。はたかれた右頬を押さえて謝った。しかし謝られたらなおさらやるせなくなった。はたいた右手は疼いた。彼女は私のその手を引き寄せた。

「こんなにガサガサになるまでがんばってくれているのに、酷いこと言ってごめんなさい」

彼女を抱きしめ何度も頭をこすりつけ祈った。どうか私の命をこの人とこの子に分け与えてください。寿命が縮まってもかまいません。この愛しい二つの命を私から取り上げないでください。力無い彼女の身体を腕の中で暖めながら、二人して泣いた。このまま死が二人を引き裂くのだろうか？涙は互いの頬を伝った。外ではいつものように鳥の声が森の中に響いていた。私はこの鳥の声だけは好きになれなかった。

そして暫くすると泣き疲れたのか彼女は私の腕の中で寝てしまった。言いたくてもいえなかったわだかまりを言って、少しは心のバランスを取り戻したのだろう。寝顔は安らかだった。私は彼女を起こさぬようゆっくりと身体をベッドに横たえた。そして小屋をあとにした。少し一人になって何が私残された手段なのかを考えたかった。

夜の湖は真昼とは別の装いに包まれていた。満月を写した湖面は闇夜に浮かび上がる舞台に見えた。湖を取り囲む大木達は開演のベルを待ちきれないと木の葉を揺らす。私は一人、湖畔の岩に腰掛け、滝の音に耳をすませていた。ザザー、岩にたたきつけられる水、ふと学生の時受けた産婦人科の授業を思いだした。講師が私達学生に聞かせてくれた音があった。胎児が子守歌代わりに聞く母親の胎内の音だった。私はこの滝の音とどこかそれに似ていると思った。今彼女のお腹の子もこの子守歌を聴いて寝ているのだろうか？それとも悪化する母親の身体の異変に気づき苦しんでいるのだろうか？黒光りする原油のようになめらかな湖面を見つめながら私の心は嵐のように波立っていた。もうしてやれることはないのだろうか。ただじっとこのまま彼女が弱っていくのをみていなければならないのだろうか。これから季節は秋に向かう、南国といえども気候は不安定になり食料の確保も困難になるだろう。それにどんなにいい環境をつくったとしてもそんな事では彼女の症状はもうよくなる。やはり産婦人科医による適切な治療が必要なことは明らかだった。

しかし島を抜け出すことなど不可能だ。以前私がここを脱出しようとしたときのあの島の怒り。あれは偶然ではない。この島は生きています。私は自分が死ぬのが恐ろしいのではない。私一人ならもう一度その挑戦をしたらどう。しかし身重のしかも病気の彼女と一緒に荒海に乗り出すなど二人で墓穴に入ると同じ事。ならば私一人この島を抜け出し助けをつれてこられたらとも考えた。しかしもうヨットはなく作れるとすれば、残骸でつくる筏くらいのもの。もし運良く脱出できたとしても、そんな筏では人のいる島にたどり着ける保証もない。第一もう私の世話なしに彼女は生活できないほど弱っていた。そんな彼女を一人にして島を離れられはしない。

このときほど私は医者であることを恨めしく思ったことはなかった。何をすればいいのか全て分かっているのに何もしてやれない。これが人を殺した私に与えられた罰なのだろうか。それなら私の命を奪えばいい。こんな卑怯な罰に何の意味があるというのか。怒りと虚無感が振り子のように私をもてあそんだ。苛立ちが私を壊そうとしていた。私は拳を岩に何度も打ち付けた。次第に皮が剥げ骨があらわれた。痛みなど感じない。むしろこうしていることで彼女の苦しみと和らぐような気がした。たとえそれが何の意味もないことは分かっている、そうせずにはいられなかった。

「哀れなだね、あんたって男は」

闇のどこかから私をあざ笑う女の声が聞こえた。誰もいないはずなのに。身体は一変に凍りついた。

「女は殺せても、救うことはできないのかい」

湖面が大きく波立ち、ピント張りつめた空気が肌を刺した。私は相手がどこにいるのか分からず、辺りを見回して叫んだ。あの嫌な声で鳴く鳥がいつにもまして高い声で鼓膜をひっかいた。

「誰だ」

「あんたが恐れていたこの島の<sup>あるじ</sup>主さね」

その声が終わるか終わらないうちに湖の真ん中に変化が起きた。湖底から青白い閃光が湖面を突き抜け天を指した。そして光の筋は次第に太くなり湖面に逆さのスポットライトを当てた。私は自分の目を疑った。湖の底から麻のマントを身にまとった女が浮かび上がってきたのだ。長く伸びた髪で顔は見えなかったが、青く光る目がじっと私をにらみつけていた。

「おまえが死神？」

女はマントから手を出し、鋭く尖った爪の先を横に振った。

「人間達はそう呼ぶようだけれど、勘違いもいいとこだね、私はあんな低俗なやからとは違うよ」

「なら一体お前は何なんだ」

「おや、私の島に住まわせてやっているのに、何という口の聞きようだい？よっぽど野蛮な生き物だ、あんた達人間は礼儀さえ知らない」

女は呆れたものだと両手を開いた。

「まあいいさね、教えてやるよ、あたしゃ蛇さ。それもアダムとイブにリンゴを食べさせたあの悪名高き蛇さね」

そういったとたん女は麻のマントを脱ぎ捨てた。そしてその下から鱗に覆われた細長い胴体が現れた。さっきまで髪の毛に隠れていた顔は醜い蛇に変化した。尖った口の先端から先割れした赤い舌が伸び、小刻みに震え息を一つ私に吹きかけた。生臭い匂いがした。舞台役者の口上が終わったと、今まで静まりかえっていた森が主役の登場にここぞとばかり一斉に沸き返った。

「雌蛇か、ここは中東じゃないだろ、何でそんなやつがこの島に住み着いているんだ、おかしいじゃ

ないか」

「雌蛇とは気分が悪いね、どうせあんたもひ弱な雄だろ」

女（雌蛇）は長い髪を物の見事に鱗の裏側にしまい込むと鋭い眼差しで再びこちらを睨みつけた。

「ま、信じるも信じないもあんたの勝手さね」

蛇は身体をくねらせ、私の座っている岩の直ぐ横に泳ぎついた。そしてズルズルと音をさせながら湖畔にとぐろを巻いた。湖の真ん中にいたときはさほど大きくは感じなかったが、近寄られるとさすがにその胴回りの太さに圧倒された。ふてふてしく笑うその裂けた口元には鋭い牙が覗き、細かな鱗は月明かりに万華鏡のようにキラキラと輝いた。恐ろしいと言うより先に、何故この島の主が今になって現れたのか知りたかった。

「おや、肝が座ってるじゃないか、今までの男達とは違うね」

宙を漂っていたしっぽの先が私の胸を軽くつついた。

「今までの男達？」

「ああそうさ、この島のいわくは知っているね」

私は頷いた。

「あの噂もあながち嘘ばかりとは言えないのさ」

「なら女性をさらってきてはコレクションにしているというのは本当なのか？」

その問いに蛇はあきれた顔で首をふった。

「馬鹿らしい、そんな洒落た趣味はないよ」

「じゃあ何故そんな酷いことをする」

蛇の腰がどこからとは言えないが、胴体のちょうど真ん中あたりを後ろにある岩に押しつけた。

まるで公害をまき散らす会社の社長が、うるさい自然保護団体の訴えを仕方なしに聞いているようなそんな姿に見えた。蛇は言った。

「人間だけがいつも被害者かい？」

「どういう意味だ」

「あたしだって人間の被害者だって事さ」

「それはおまえがアダムとイブをそそのかしたから」

「馬鹿お言いじゃないよ。あの二人は私がああ枝で寝ていたときに、赤いリンゴを見ながらつばを飲み込んでいたのさ。あたしはどれほど美味しいのか教えてだけで、食べなどは一言も言っていないよ。奴らは自分たちの意志でリンゴを口にし、そして罰を受けたのさ。そしてこっちまでとばっちりを食い、おかげで永遠に地を這わされ、ネズミのようなまずい食べ物だけを食われる羽目になっちゃった。何で私だけがいつまでも罰を受け続けなくちゃならないんだ。よっぽど理に合わないじゃないか。あたしはもう我慢できなくなったのさ、だから神に提案をしたんだよ」

蛇はここぞとばかりに話し続けた。

「神様、何故あなたがあのリンゴを人間が食べるのをいやがったのか、私は知っていますとね。あれは知恵の実のだったんでしょ。人間が神のように万物の成り立ちを知り、好き勝手に増えていくのを押さえる為に、羞恥心をもたせ、そして出産の苦しみを強いたのでしょ？とね。凶星だったんだらうよ、神は唇をかんでいた。あたしは続けた。しかし人間はあなたの意志にまたも反し、好き勝手に交尾を繰り返して、ネズミのように赤ん坊を産み落とししています。そればかりか羞恥心も金の力には勝てず、年端もいかぬ少女がぎらついた男達の前で足を広げ、笑顔を振りまいているじゃないですか。あなたが人間に植え付けた愛という鍵も当の昔に壊れています。それなら私の罰もそろそろ解いていただけませんか？とね」

神ならずとも蛇の言い分に真っ向かって異論を唱えられる者はいなかったらう。私は偶像でしかなかった神がどのような顔で苦虫をかみつぶしていたのか興味をもった。

「神は最後の抵抗をしたよ。『確かに愛は薄れた、だが死に絶えてはいないはずだ。もしお前の言うとおり愛という鍵が跡形もなく壊れていたなら、お前の望み通り罪を免罪してやろう。そしてそれだけではなくこの世の全て人間を土に返す』とね。あたしに足はないけど飛び上がって喜んだね」

こんな小さな島の水辺のほとりで、そんなおとぎ話のような事があったなんて、やはり一概には信じられなかった。私は蛇の話の心の中で遠ざけようとした。しかしアダムとイブの物語でさえ神話でしかない。なのに私達人間はその物語を否定しようとしなない。いや否定することすらタブーとしている。だったらこんな小さな島だからこそあり得る話なのかと心は揺れ動いた。

「そこであたしと神は賭けをしたんだよ」

「それがこの島のいわくのもと？」

「ああ、愛という鍵がまだ残っているのか確かめるのさ」

「どうやって？」

「愛しているとささやき合う馬鹿な恋人同士を引き裂き、女をこの島にさらってくる。そしてその女を助けようと荒波を越えてくる男をまつんだ」

私は息を呑んだ。

「命からがらこの島にたどり着いた男、私はその男の目の前に女をぶら下げながら追い打ちをかける。

『女を助けたいならあんたがここに残り、一生この島で独り愛する女の像を岩に刻み続けな』ってね」

「で？」

「男があたしの提案を断って逃げ出したなら終わり、もちろん二人で逃げようとしてもだめ、要は女の為に自分を投げ出す強い意志を持っていなければあたしの勝ちと言うことさね。そして10人中、一人でもそんな奴がいたならあたしのまげさ」

蛇は舌なめずりして笑った。いかにももう勝ったかのように余裕を持ったふてぶてしい笑いだった。

「ということは今まで一人も、この島に女のために残った男はいなかったのか？」

「いたことはいたさ、そうさね二人いたかね。一人は若い軍人ともう一人は鍛冶屋の跡取りだったかね」

蛇はしっぽで頬杖をつきながらその二人の男達を思い浮かべているようだった。

「ならお前は負けたんじゃないか」

「あたしがなんて言った？一生女の像を刻み続けながら生きなと云っただろ」

「ああ」

「人間の愛なんてもろいものさ。女を救うつもりでこの島に残り、岩に女の面影を刻み初めても3年ともちやしない。そのうち男は女の顔を思い出せなくなり、何で自分だけがこんな苦しみを背負わなくちゃいけないんだろうと疑問が湧いてくる。終には好きだった女を憎み、折角作った像をたたき壊して自殺したよ」

「二人とも？」

「ああ一人は岬から身を投げ、もう一人は熱風の噴き出すあの火口にその身を焦がし、あっという間に死んだよ」

まるで実験結果の成果を学会で発表する学者のように、一つ一つの事象を事細かに蛇は説明し、そのしっぽは黒板の要点を刺す棒の如くピンと闇のある箇所を示した。

「であんたはどうするね？ちょうど10人目だが」

「私もその賭けの一人に加えられたのか？」

「そりゃそうさ、その為に島に入れたんだ、何せお膳立ては全部奴さん（神）がやってくれるんだから楽なもんさね」

蛇は夜空を見上げ、『そうだよな』と共犯の確認を、そこに居る神とやらにうながした。

「なら彼女を苦しめているのもおまえ達なのか」

「当然だろ、無駄なことはしないよ」

蛇は澄まし顔で言った。人間を作った神がこんなばかげた賭けの為に、彼女を苦しめていることをして私は呆然とした。

「どうしたらいい？どうしたら彼女は助かるんだ」

「だから云ったろ、男は身代わりに島に残り、岩に女を刻み込むんだよ、死ぬまで。もう一生お前は女とは会えないし、産まれてくる子供を抱くこともない、ただそれだけのことさ簡単だろ、さあどうする？」

彼女にもう二度と会えなくなるといわれると即答できなかった。それほど彼女は私の身体の一部になっていた。しかしこのままでは。いつもでも答えを出せないでいる私を見て蛇は苛立った。

「本当に情けない男だね、考えている時間はないよ。もうすぐ女の旦那が船でこの島に探しに来るんだ」

「何で、いまになって」

「さあ知らないね。とにかくあんたが女を渡したくないというなら、それはそれでいい。旦那の船をあの時のお前と同じようにバラバラにしてみんな殺す。そうしたらあんた死にゆく女をの腕の中で独り占めに出来るさね」

「お前の言うとおりで私がしたなら、本当に彼女をこの島から自由にしてくれるんだな」

「そうさ、ただ」

「ただなんだ」

「この島から抜け出しただけじゃ、女も赤ん坊も長くは生きられない」

「約束が違うじゃないか」

私は声を荒げ蛇にくってかかった。

「おまえは医者だというのに頭が悪いね、さっきから言ってるだろ、おまえが一生をかけて女の姿を岩に彫り続けなれば女達は弱って死ぬんだ」

「女達？」

私はその言葉に疑問を覚えた。

「そうか、あんたはまだ知らないんだね」

「なんのことだ？もしかしたら」

「そうだよ、腹の子は女さ。それも成長したら母親似のとびきりの美人になるよ。あんたなら可愛くて仕方なくなるね」

私は足がふるえた。それが父親の感情なのかと聞かれたら、そうだと言い切る自信はない。ただこの数ヶ月、私の想いを吸い込んで大きくなったお腹は愛しくて仕方ない。ましてそれが女の子だと聞かされたなら、男の私が可愛くないわけはなかった。

「あんたが約束を守って島で生き続ける限り、女も子供も生き続けられるって事だ」

それを聞いて私は不安をおぼえた。

「彼女はいいとして、私の寿命は生まれくる子供より遙かに少ないはずじゃないか。私がどう長生きしても30年が精一杯だ。その時、子供は結婚、いや既に結婚し母親になっているかもしれない。そうなったらその子はどうなるんだ」

「さあね」

蛇はそろそろ話つかれたとでも言いたげに首をまわした。

「頼む」

私は蛇にすがりついた。

「いったなんだい、あたしは男が嫌いなんだ触らないでくれよ」

「頼む、からその子まで道連れにすることは止めてくれ。私は老いて死ぬその瞬間まで岩を彫り続けるから、どうか御願います」

「まるであんたの勝ちが決まっているような口振りだね。実際はそんなに甘くはないよ、それでもそういうかい？」

チェスの全ての駒を私から奪い、チェック手前で余裕綽々の笑みを浮かべた顔は、このあと何が起ころうとも自分の勝ち揺るぎないと言いたげに見えた。私はまっすぐに顔を立てにおろし頷いた。

「いいだろう、万が一あんたが勝ったなら、子供の命は勘弁してやるよ」

蛇は不可能だと思ったのだろう。申し入れを難なく受け入れた。私の心は決まった。例え一生会えなくても良い、命の続く限り岩を刻み続けよう。

「話は終わったよ、さあ準備にとりかかろうかね。言うておくがあと一週間も放っておいたら腹の中で赤ん坊は死ぬ。そして死んだ赤ん坊の毒が女の体にまわり、その三日後には」

「いわなくていい、彼女を死なせはしない」

「そうかい。ならお前が女と過ごせるのは明日一日だけだ、これをご覧」

蛇は湖にクルーザーに乗った男達の姿を映し出した。よくみるともう一人ソフィアと同じくらいの年齢の女性がいた。チーフと思わしき男がその女性の指示に従いながら舵を握っていた。

「こいつが女の亭主。あさっての朝にはこの島を見つけるはずだ。それまでにお前は女に別れ話をしておくんだね。じゃあ、あたしは行くよ。女がこの島を出ていった後ここにおいでな、楽しみに待っているから」

蛇は巻いていたとぐろを緩めた。そして顔を上げ腹を湖面につけ、あっという間に湖の奥へ消えた。

蛇があまりにあっけなく私の前から姿を消したので、やはり幻を見ていたんじゃないかと思った。

しかしやはりそれが現実なのだという証拠を私はみつけた。蛇の鱗が二枚落ちていた。蛇が後ろの岩にもたれかかったとき引っかかって抜けたのだろう。岩の下にそれが落ちて月明かりをうけた宝石のように輝いていた。私はそれを手に取った。いびつな円形をした大きな鱗だった。その縁に指の腹を添え肉に食い込ませた。鱗は折れ曲がることなくコインのように堅かった。それをみながら私は思

った。自分はこうなるために生まれてきたのだと。人を救うために医者になり、挫折し、拳げ句の果てに恋人の命まで奪った私。そして一度世捨て人になった私に幸せが訪れた。しかしもう不幸な男ではない。とげとげしかった自分に二度と戻ることはないだろう。全ては彼女がくれたもの。さあ私は自分のしなくてはならぬ事をしよう。私は深呼吸をした。するとあれほど苦しかった胸の奥が軽くなっていった。

話に吸い込まれ時間の感覚をなくしてしまいました。それどころか雨も止んでいたことも気がつきませんでした。何とも不思議な話でしたが疑う気持ちになれませんでした。母が死に際に言った『私を死から遠ざけてくれた人』という言葉の意味はこの事だと思ったからです。

「おとぎ話みたいだろ、まるで残酷なグリム童話だ」

老人は頭にかけていた七色のビニールシートを取り、丁寧にたたみ始めました。雨が降ったせいでしょうか、湖の周りの森から流れ込む空気の匂が濃くなった気がしました。私は老人の問いに首を振って見せましたが、そんな私をみて彼は可笑しそうに笑うばかりでした。

「普通では考えられないことさ、もし私が精神科の医師なら隔離しているかもしれない。長い島暮らしで幻覚をみるようになったんじゃないかってね。まあ、既にこの島にいること自体隔離されているようなものだからそれも必要ないかな」

「だから、疑ってなんかないわ。でなきゃこんな島まで命がけで来るわけがないでしょ」

「でもね、私は思うんだ」

「なにを？」

「これは私だけの夢でいいのかもしれないと」

「なぜよ？悲しすぎるは」

「悲しくなんかないさ、悲しいのはこの夢をお前が聞いて傷つくこと、そしてそれが今だと言うこと」

「どういうことなの」

老人はそれに答えず立ち上がりました。そして持ってきたバスケットにコップやらなにやら全て押し込みお尻の砂を払いました。

「さあもうお昼だよ、小屋に帰って食事にしよう」

確かに太陽は真上に昇り、真っ青な空が島を覆っています。

「教えてください、もっと話を聞きたいの」

「私も少しつかれた、暫く休んでからにしよう。それに今日のお昼はお母さんの大好物の大トカゲだ」

老人は悪戯っぽくそう言うと、バスケットを抱え私の右手を掴んで岩から立たせました。岩から私の身体をはがしたという方が正しい言い方かもしれません。

「ええ・・・」

「わがまま言わない、ほら」

仕方なく立ち上がると長く座っていたせいでお尻のあたりが汗で濡れているような気がしました。シミができていないかと振り返りお尻を触っていると、そんなこともお構いなしに老人は私の手を引き、来た道を帰ろうとします。少し強引と思いながらも、何故か少し嬉しかったのです。そんな事を私が思っていると気づく様子もなく、彼はどんどんと歩いていきました。親に連れられる子供のようにきょろきょろと辺りを見回しながら歩く私、その時私には森が朝とは微妙に変っているように見えました。確かに早朝とお昼では森に差し込む日光の強さも違いますが、それだけではない何かが弱まったような気がしました。敢えて言うなら森の威圧感というのでしょうか。原生林の重い空気が感じられないのです。何故かなと思いながらも私達は森を抜けました。一気に真昼の太陽が又私達を取り囲み、小屋が見えると老人は私の手を放しました。

「直ぐにお昼にするから」

そう言うと彼は納屋の戸を開けました。

「汗をかけたなら、そこに石油タンクがあるだろ。昨夜行った小川の水が入っているからそれをその桶に移し替えて使うといい」

「私、あの湖で泳ぎたかった」

「着替え持ってきてなかつたろ、湖は逃げないよ」

老人はそういうと納屋に入っていった。やはりトカゲの肉なのだろうか？調理しているところをみる勇気がなく私は小屋に戻りました。そして言うとおり身体は汗ばんでいたの着替えようと、部屋の中につるしてあった下着に手を伸ばしました。その時窓辺の向こうに老人の姿が見えました。納屋の横、太陽がくっきりと地面を光と陰で区切った暗の土の上を老人はとぼとぼと歩いていきます。彼の目があたりをちらちらと伺います。私は頭を潜めました。暫くして窓の角からもう一度覗くと老人の姿が見えません。おかしいなと思い、もう少し頭を上げてみました。するとそこに見たのはお腹を押さえて苦しむ老人の姿でした。声を殺そうとしているのか自分の腕を噛み、脂汗を流しています。

「おじさん」

その声に老人は顔をあげ、窓越しに見ている私に気づきました。その顔は痛みに耐えているせいか真っ青でした。

「あ！」

老人は私から目を反らし、立ち上がりふらつく足で去っていきこうとします。私は小屋を飛び出しました。老人は身をかがめながら必死で森への道を走っていきます。私は髪を振り乱し追いかけてました。何故だか分かりませんでした。今、老人を見失ったら二度と会えない気がしたのです。

「待って、お願い、待って」

子供の頃から足が遅く運動神経もない私、焦りが両足のリズムを狂わせました。枯れ木につまずいたのです。そして叫び声をあげて地面に倒れ込みました。

「きゃー痛い！痛いよ」

私が大声で泣くと老人の足は止まりました。それを見て更に私は泣き叫びました。本当はそれほど痛くはなかったのです。というのも倒れ込んだ場所にちょうど柔らかな草が生えていたからです。でも泣くしか彼を引き留める手段をもっていなかった。あらん限りの声をあげました。突っ伏した腕の隙間から上目遣いで老人の足の動きを伺いました。どうしようかと迷うぼろぼろの靴、微かな土煙が地面付近に舞っています。私はとどめとばかりに悲鳴をあげました。老人の足は一步私の方に踏み出されました。そして最後には諦めたのでしょうか、こちらに向かって走ってきました。

『早く来て、早く』のどから血の出るほど叫びました。ついに老人の腕が私を抱き起こしました。

「エリザベス、どこ痛い」

私は老人にしがみつきました。決して離さないと背中に手を回しました。

「大丈夫かい」

老人は自分の痛みも忘れて、私の身体のおちらこちらを蹴だらけの手の平で調べました。

「あんなに泣くから、骨でも折ったのかと」

「ううん」

「そうか、たいしたことがなくてよかった。」

「おじさんがいけないんでしょ、急にどこかへ行ってしまうから」

老人は自分に話がふられたせいか、急に黙り込んでしまった。そして思い出したように痛みが顔をゆがめました。

「どうしたの、どこが悪いの」

脂汗が老人の首筋をスーと流れていきました。私を抱く手も微妙に震えて言いました。羽虫が草むらの上を何匹も円をかいてうるさく飛びます。私はそれを手で払い老人にいいました。

「とにかく小屋に戻りましょう」

老人は答えませんでした。照りつける太陽がジリジリと肌を焦がし老人の喉仏に汗が滴となって今にも落ちそうでした。

「じゃないと私もここにいる」

「わかったから」

大きなため息をついた老人は私を抱えゆっくりと身体を起こしました。汗ばんだ私の顔に張り付いていたちぎれた草がハラリと落ちました。気付きませんでした。私の頬に擦り傷が出来ていたようで老人は滲んだ血に自分の持っていた布きれをあててくれました。

「小屋に戻ろう」

それでもまだ信じられずに彼にくっついたまま小屋まで帰りました。そして逃亡者を牢屋に入れるように、老人を小屋に押し込むと私は後ろ手で扉をしめ背中で塞ぎました。

「何故逃げるんですか、病気なんですよ」

お腹を抱えた老人はベッドに横たわりました。部屋の僅かな明かりに目が慣れると、はっきりと老人の顔が見えてきました。乱れた呼吸を整えようと肩で息をしています。老人の乾いた唇、窪んだ目のうつろな瞳。それは今朝、話していた顔とは明らかに違い、なにかの発作が起きているようでした。私はドアから身体を離し老人の横に座りました。そして苦しみに丸まっている彼の背中をさすりました。少し落ち着いたのか老人はベッドに仰向けになると唾を飲み込みました。

「寿命が来たんだよ」

老人は胸に手を置きました。

「病気ならお医者様に診て貰はないと。船は壊れてしまったけれど後4日して私が戻らなければ、会社のものが探しにくることになっているの。そしたら一緒にここをでましよう」

「もういいんだ」

痰がからんでいるのか、声が濁っていました。先ほど老人の出した布きれで反対に彼の額の汗を拭くと、白髪交じりの灰色の髪は汗に濡れて頭皮が透けて見えました。

「何故です、良いお医者様知っているから安心して」

「そうじゃなくて、さっき話しただろ、私は島を出てはいくわけにわいかない」

「だって母はもうこの世にはいないんですよ、約束は果たしたじゃないですか」

「まだ終わってはいない。それに私は医者嫌いでね、他人に見てもらっても信用できないのさ」

苦痛のせいでしょう力無く笑う老人、けれどその瞳は穏やかでした。

「そんな、まだ何かがあるいうんですか、おじさんはもう自分の為に生きていいのよ、お願いだから私に任せて、きっと治してみせるから」

老人は首を振った。

「それに私は誰かの為に生きてつもりはないんだ」

窪んだ目元にうっすらと汗が浮き出ていました。

「だって」

「お母さんやおまへの為に自分を犠牲にしたと言いたいのだろ」

「ええ」

「それは間違いだ。もしそう思っていたなら、他の男達のように私も命を絶っていたよ」

「じゃあなんなの」

「最後のプライドさ、これが私が望んだ人生なんだとソフィアへの気持ちを貫き通したかった。実際、戦争で訳もわからぬまま銃弾に倒れる兵士より遙かに生き甲斐のある日々だったよ」

何故にこうも頑なに島から出ていくことを拒むのか私にはよく分かりませんでした。何か他に訳があるのかと蛇との約束を思い起こしてハッとしました。

「もしかして、私がいるから？」

老人は私の顔をじっと見つめました。

「本当に美しい娘だ」

私は呆然としました。老人の死と引き替えに私の命が約束される。この年まで私達母子の為に苦しみ続けた末にあるものが死。中途半端にしか生きていないこんな私の為に老人の想いを受け入れる資格などないと思いました。私はたまらなくなり言ってしまいました。

「今の私は誰にも愛されていないんです。でも寂しくしかたなくて誰でもいいから結婚するんです。こんな荒んだ私の為に死ぬ事なんてないの。どうかお医者さんに看てもらってください、もういいから」

老人の胸に顔を押しつけシャツを握りしめて言いました。薄い胸でした。肋骨が浮き出てごつごつと私の顔に当たります。老人は私の頭に手を置いて言いました。

「そうやってよく君のお母さんにも泣かれたよ、女はよく泣くね」

明け方、私は小屋に戻った。彼女を起こすまいと音を立てないようにドアを開けた。早朝の光が部屋の中に差し込んだ。寝ていたはずの彼女がベッドに膝を抱え壁よりかかっていた。私は何も言わず小屋に入りドアを閉めた。

「起きていたのかい？まだ早いから寝ていなさい」

床に敷いてあった寝床に彼女に背を向けて横になった。

「どこへ行っていたの？」

どう別れを切り出したらいいのか分からず言葉をごまかした。

「秘密の酒場さ」

彼女は聞き返した。空気と暗闇が鉛のように私の躰を床に押さえつけた。

「ねえはっきり言ってよ」

夜は白々と明け時は残酷に森を目覚めさせていった。何も言わぬ私に彼女は一層苛立っていった。

「そう責めるなよ、浮気しに他の女の所へ行ったんじゃないんだから」

彼女はベッドを降りて私の横に座った。刑事より厳しい尋問が始まるのだろうか？

「あなたが出かけたのはすぐ分かったのよ。おしっこかなとおもって、でもいつまで経っても帰ってこないでしょ、急に独りぼっちに成った気がしたの。いよいよ捨てられたのになって」

「少し息抜きにいつてきただけじゃないか、大げさだよ」

「ほんとう？」

「ああ」

「よかった」

自分のベッドを降り、横になっている私に寄り添うソフィア。大きなお腹が私の背中に当たった。昨夜より身体が熱い。又少し熱が上がっているようだ。本当にもう一刻の猶予もないのかもしれない。頭の中でどうやったら彼女は納得してくれるのだろうと考えた。そんな私の気持ちを知ってか知らずか彼女はいつの間にか寝息を立てていた。おそらく私がいなくてずっと起きていたのだろう。私は彼女のほうに身体の向きを変えた。枯れ草を編んだだけの敷物だから寝心地はいいわけではない。しかし私がいるという安心感からなのか寝顔は穏やかそのものだった。私は彼女の頭をそっと持ち上げ自分の腕をその下に入れた。もう明日にはいなくなる人、何か信じられない気がした。彼女がここに来てから7ヶ月、喧嘩をしたりいがみ合ったり。女性嫌いの私が彼女に変えられてしまったり。やはりだらしない男なのだろうか。彼女の襟元の後れ毛を整えながら共に過ごした日々を思い起こした。何もかもあつという間の出来事だったような気がした。気持ちよさそうに眠る彼女の小鼻は呼吸の為に微かに動いていた。私は額に額を寄せた。いつものように甘い匂いがした。私は思わず気持を吐露してしまった。

「私のことを忘れないでくれ」

その時、寝ているとばかり思っていた彼女の口が動いた。

「どういうこと？」

私は言葉に詰まった。小屋の外では太陽が梯子を駆け上っているのだろうか。僅かに空いた窓の隙間から差し込む一筋の光は、その入射角を刻一刻と変化させ彼女の顔をなでていった。長いまつげが蝶の羽のように開き透明な光が瞳の水晶体を通り抜け、網膜の模様をくっきりと浮かび上がらせた。その目に釘付けにされた私は息も出来ずにいた。

「なんでもないよ」

「やっぱり嘘ついている」

「何故そう決めつけるんだ」

「あなたは嘘をつくときは、いつも目をそらすの」

彼女の言うように、いつも自分がそうしていたかは分からない、今でも思うあれは彼女に引っかけられたんじゃないかと思うときがある。しかしあの時の私にとって彼女の指摘は十分すぎた。嘘の匂いをかぎつけた彼女は追い打ちをかけるようにたたみかけてきた。これ以上私が逃げられないように。

「もう私に嘘はつかないと約束したはずじゃない。昔のように喧嘩したくないの、あなたに隠されると不安でたまらない」

「もう少しだけ待ってくれないか」

「もう少しだけ？」

私の言葉の一つ一つの中に彼女はヒントを捜そうとしている、私はそう思った。

「ああ、もう少しだけ」

「話してよ。そんな苦しそうな顔して、どうせ私のことなんでしょ」

私の腕枕から頭を起こすとさっきまで横になっていたベッドに腰を掛けた。

「いいのよ、もうそろそろ危ないんでしょ、この子も私も」

ただそう見せていただけなのだろうが、彼女はこともなげに言った。

「私はもう充分だから」

「何が充分なんだ、そんなこと言うんじゃない」

「あなたに出会えて、この島で暮らせて、そして本当に大切にされたもの。この子もきっとそう思っているわ、だからもういいよって」

私は耐えきれずに言ってしまった。

「そうじゃないんだ、きみは助かるんだよ。迎えが明日の朝この島に来る」

「お願いだからもう期待させないで、それにそんな夢みたいな事誰が信じると思うの」

「嘘じゃない」

「おかしいじゃない、何故あなたにそんなことが分かるの」

「会ったからさ」

「誰に」

「私達をこの島に閉じこめていた奴にさ」

もうすっかり夜は明け、小屋のあちこちの隙間から光が漏れていた。私は彼女と向き合った。

彼女の目元の動きをじっと観察しながら昨夜湖であった出来事を話した。彼女は何も言わずにじっと聞いていた。全てを話終えると蛇の鱗を私は彼女に渡した。日の光を受け怪しげに輝く大きすぎる鱗。

彼女は息をのんだ。

「私が話したことに何一つ嘘はない、奇跡が起きたんだ、よかったね」

「なにがよかったの？」

「だから君もお腹の子供も助かるし、オーストラリアで君を待っている坊やにも会えるんじゃないか」

私は精一杯の笑顔を作って見せた。彼女は魂が抜けたようにベッドにもたれかかりうつむいた。

「でもあなたの顔はとても悲しそうよ、何故？・・・でしょ？」

彼女の視線は手に持っている鱗にあるはずなのにもうひとつの目がどこかにあり、こちらをじっと凝視しているようだった。

「何で私が哀しむ理由があるんだ」

「そう悲しくないの、そうなんだ」

彼女は耳に髪の毛をかけ直し黙り込んだ。そのうち耐えきれなくなった私は彼女に言った

「君を助けたいんだ、君が俺なら同じ事をしないかい」

「だったら私も言うわ、寂しがり屋のあなたを一人残して帰れると思う？」

「変えられるさ」

「本当にそうおもってるの？」

「頼む、帰って欲しい、頼む」

「もう私には貴方しかないの、貴方の思いやりは嬉しいけれど私には捨てられるのと同じ事なのよ」

「旦那さんがいる」

「こんな大きなお腹してどうやって主人に会えばいい？帰るところがないのよ、もうあなたの側でしか生きられないの」

「仕方ないだろ、このままじゃ君も子供も危険なんだ」

「だからそれでいいの、いいんだって」

私は目を閉じた。このまま死なせてしまったら私は二人の女性を殺したことになる。それだけは絶対に出来ない。私は顔を横に振った。

「私は帰らないわ、絶対に帰らない」

彼女はベッドから立ち上がると裸足のまま小屋を飛び出していった。私も彼女の後を追って外に出た。

「ついてこないで」

「危ないよ、その身体で」

「いいからついてこないで」

私の足は止まった。彼女は一瞬私を睨み付け、その後森へと続く道を一直線に走り出した。

落ち葉を踏みしめる白い足は湖に向かっていった。一体何をするつもりなのか。二つの足音が森の中を横切っていく、彼女は地中に潜れなかった巨木の根を飛び越えふわりと宙に浮いた。

「やめてくれ」

私は叫んだ。彼女はかまわず突き進んだ。私は生きた心地がしなかった。そしてとうとう彼女は森のトンネルを抜けた。私も少し遅れて森を抜けると彼女は湖畔に立っていた。昨夜の出来事が嘘のように湖は静まりかえっていた。目の前に広がる湖面には空の青が写っていた。流れていく雲、まるでもう一つの空が湖の中にあるようだった。もしかしたらもう一つの世界がここに存在し、今自分たちの

いる世界が偽物のような気さえた。それほど湖の水は清く美しくかった。

「出てきなさいよ、卑怯者」

彼女は声は森に響き渡った。この人のどこにまだこんな力が残っていたのだろう、正直驚いた。

「いるんでしょ」

そういと彼女は湖に入っていった。私は急いで駆け寄った。彼女は私の手をふりほどきどんとその身を水に沈めていった。私は引き戻そうと背中から身体に抱きついた。彼女は狂ったようにその場に座り込みわめき散らした。

「賭けかなんかは知らないけど、私達はおもちゃじゃないわ。気に入らなければ最初から私やこの子を作らなきゃいいじゃない。彼一人を苦しめて生き延びるくらいなら死んだ方がましよ。そうでしょ。やっと出会えた人なの。お願いだから引き離さないで。一緒にいさせて」

ばたつく足が湖に白い波を立てた。彼女の嘆きは深く重い。もし私が彼女なら同じことをしただろう。

「私だけ、何故いつも幸せが逃げていくの」

ずぶ濡れの顔は泣いているのかさえ分からない、ただ瞼は腫れ目は赤く充血していた。

「ソフィア、もういいわかったから」

「あなたの話なんて聞きたくない、私は貴方といたいのに、あなたは分かってくれない。弱虫、嘘つき」

「だからいていいから、俺が看取るから最後まで」

「うそ？」

彼女は又私の瞳の動きを確かめた。結果はどうだったかは分からないが、やはり信じられないと彼女は疑った。私は彼女を抱きしめた。二本の腕で縛り上げるほど強く抱きしめた。

「本当だ、だけど」

「だけどなんなの？」

「君が死んだなら私も死ぬ、別にかっこつけてる訳じゃない。多分独りじゃ切なすぎて生きていけないと思うんだ。なんたって弱虫だから」

「ほんとなの？」

「ああ、もう嘘ついても見破られるだろ」

「ここにいていいのね」

「ああ、ずっといっしょさ」

嗚咽の止まらない彼女を私は両腕に抱え上げた。妊娠しているというのにその身体はあまりにも軽かった。彼女は私の首に腕を回し頬をすり寄せた。

「好きで仕方ない、恋しくて仕方ない、そして嬉しくてなんと云えばいいのか分からない」

私の耳元で囁きながら顔を赤らめる彼女。この先には苦しみと死が待っているというのに、そんなことは何の意味もないといたげだった。私は思った。神がつくりし一番愚かな物は愛だと。それさえなければ誰も苦しみにいられただろうに。このときの私はどこか第三者的な目で彼女を見ていたように思う。そして私は私でなくなろうと必死に自分の心に麻酔を打とうとしていた。

先ほどの発作を耐えようと唇を噛んだのでしょう、くっきりと歯形のついた表皮は雲母のようにひび割れ血が滲んでいました。老人はその血を舌先で何度か舐め上下の唇を擦り合わせました。

何か言いたげでした。

「なに？おじさん」

「うん？うん、いやね、こんな綺麗な女の子があのお腹にはいたんだと思うとあの時お母さんを死なせなくて本当に良かった」

私を見つめるその目に吸い込まれてしまいそうでした。この目は母の為にどれほど涙を流したのでしょ。その眼差しは私の姿を通して母を見ているようでした。

「嘘だったんですね」

「嘘か... そうだね私はお母さんを裏切った事になるね、弁解はしないよ。」

「母に嫌われてもかまわなかったの？」

老人は目を真っ赤にして唇を振るわせました。それを見たとき私はなんと心ない言葉を使ってしまったのだろうと後悔しました。

「仕方ないね私もぎりぎりだったんだ、でもいつかは分かってくれと信じたのさ」

又痛むのだろうかお腹を押さえ、首元に汗をかき始めた。辛そうな表情をみて私は言った。

「少し休みましょう、話は楽になってからにして」

「いいや、もう一度発作が来たならどうなるか分からない。もう肺もいかれてる」

咳でむせぶ姿は痛々しくみえました。

「本当は最後まで隠し通そうと思っていたんだけど、やっぱり無理だったね」

「当たり前です。そんな身体で私の世話まで、無茶しすぎだわ」

「男は強いふりしたがる生き物なんだよ、待ち望んだ人の前で無様な所は見せられないだろ」

女にしてみればつまらないことで意地を張る男が子供のように見えるときがあります。しかしその愚かともおもえる行為を貫いたからこそ母も私もこうしていられたのです。私も愛する者の為に頑な迄に意地を張りつけようとするこんな男に寄り添って生きてみたいと思いました。

「そう、あの時も私は精一杯の意地をはった」

老人は言葉を振り絞りました。

残された僅かな時間を心に刻もうと、私達はその日の午後、砂浜にハイキングに出かけた。とはいっても食べ物と敷物を持っていただけなのだが、ここしばらく小屋で寝たきりだった彼女にとってはそれで十分だった。私達はいつもそうしていたように椰子の木陰に寝ころび、波の音に耳を澄ました。打ち寄せる波の先端の細かい泡が風に溶けていた。彼女は海と空の境界線をじっと見つめながら呟いた。

「この海のどこかで夫が私を捜しているなんて、嘘みたい」

「会いたい？」

「そうじゃなくて、私を彼が本当に探してくれているなんて信じられないのよ」

「何故？」

「だってあの人には私なんて必要なかったもの、話したでしょ」

「本当にそうなんだろうか？」

「ええ、だってもう彼には愛人がいるのに何故今更って」

「君たち夫婦のことは私には分からない。けれど君を必要としなければ探しはしないんじゃないのかな」

「離婚のサインが欲しいのかも、とにかくもう帰らないわ。ね、一緒にいるって約束したわよね」

「ああ」

私は足を投げ出して椰子の木にもたれ座っていた。

彼女は横になりまるでソファの腕掛け部分にそうするように私の太股に頭を乗せた。

「ねえ、必ず明日この島に来るなら、夜になる前にどこかに隠れましょ。誰もいなければあきらめて帰るわ」

「いや、もう隠れないし逃たくもない」

「でも、主人に見つかれば無理矢理連れ戻されてしまうかもしれない」

「渡さないよ、安心しな私も同じ男だ」

私は力こぶを作って見せた。

「でも、会いたくない」

彼女は口ごもった。今の自分の姿を出来ることなら見られたくないというのだろう。

「私から旦那に言うよ」

「なんて？」

「もう私の妻だから諦めてくれって」

「もしそれでも諦めなかったら？」

彼女は私のズボンを握った。

「その時は二人して死のう」

「いいの？」

「早かれ遅かれそうなるんだ、かまやしない」

「ありがとう」

それから二人は何も話さず、潮風の音を聞いた。どちらにしても終わりが近いことは確かだった。けれど、その終わりを待ちこがれるときもある。苦しみぬいてようやく掴んだ幸せが、又不幸で塗りつ

ぶされないうちに永遠に瞼を閉じてしまいたい。そんなときが人間にはあるような気がした。

いつしか青空は黄金色に変化し、最後には星座達の踊る夜空が二人を取り囲んだ。

「さあ帰ろう、家へ」

ハイキングは終わった。

そしてその日が来た。彼女は昨日無理をしたいせいか、ベッドから起きることが出来なかった。

私は一人で浜へ行くことにした。

「ソフィア、これから行って来る」

「主人をここに連れてくるの？」

「彼が会いたいというなら、そうするよ」

彼女はやはり浮かない顔をした。

「もしご主人がここにきて、話し合いをしても君を連れて帰ろうとしたなら、これを飲みなさい」

私はな靴から紙袋をとりだし、その中から錠剤を6錠手のひらに載せた。そして3つを彼女に持たせ、残りの3つを自分のポケットに入れた。

「これはなに？」

「毒薬だよ、1粒なら薬、2粒なら毒、そして3粒なら確実に死ぬ。それも苦しまずに眠るように」

薬を握りしめた彼女の手がすかにふるえていた。

「怖がらなくていい、一緒だから」

私は彼女の顎を持ち唇を親指でなぞりキスをした。

「いくね」

彼女は引き留めようとしたが、かまわず小屋を後にした。もう後戻りは出来ない。通い慣れた海までの道、私は鉛のように重い足を引きずり歩いた。それはまるで死刑台への長い廊下、もう立ち止まる事など出来ない。私は自分の身体を前に押し出し続けた。そのうち波音が聞こえだし、まもなく海がみえてきた。しかしその様子がいつもと違った。海は荒れ狂い野犬のように大きな口を開けた波が辺り構わず噛みついていて。空を見上げると黒雲が島に覆い被さり山がほえていた。太陽の姿はみえず今が何時頃なのかもわからない。あのとときと異様な光景だった。

「覚悟はいいかい」

あの時間いた蛇の声が聞こえた。姿は見せないがどこかでこちらを伺っているだろう。私は見えない敵に向かって啖呵を切った。

「ふざけた事を今更聞くな、お前の望むとおりにしてやる、早くしろ」

「ほほう、威勢がいいじゃないか。そうこなくちやねえ」

不気味な笑い声とともに、黒雲はちりぢりに四方の空へと消えていった。風はやみ海は次第に穏やかになり波が消えた。テーブルのような海面、雲一つない真っ青な空、目もくらむような太陽の輝き。まるで爆弾が落とされた後に来る一瞬の静寂のような風景だった。時間が止まった、そんな風にも感じた。

「わら、ごらんな、お客様のお出ましたよ」

奴の言葉を聞き、水平線に目を凝らした。遙か遠くに小さな白い点がみえた。そしてその点はどんどんと大きくなりながらこちらに向かい進んできた。クルーザーだった。甲板に数人の男の姿が見えた。彼らも異常な天候の変化に空を見上げて戸惑っていた。一人の男が私を見つけ手を振った。私もそれに返した。そして船を停泊させるならここがいいと、岩のない場所を大声で指示した。船は私の誘導に従い浜の手前10メートル程の所に碇を降ろした。

暫くすると船から3人の男が海に降りた。男達は胸まで海につかりながら遠浅の海を歩いてきた。船に残されそうになった女が叫んだ。屈強な男が船まで戻り、その女を肩に乗せた。先頭の男は白人、残りの二人は背の高い黒人だった。白人の男は両手で水をかき身体を前に押し出した。私は動かなかった。彼がソフィアの夫に違いない。靴の中の親指に力が入った。さあこい、早く来い。私は嫉妬混じりにつぶやいた。海からあがってきたその男は握手の為だろう、片手を前に出しながら近寄ってきた。カーキ色の綿パンに白いカッターシャツ、髪はカールしたブロンドだった。

「こんにちは」

彼は足を砂に取られながらも私の元にたどり着いた。私は差しのべられた手に握手しなかった。彼は手のやり場に困り、もう片方の手と一緒に手を開いて戯けて見せた。

「いやこの島に人が住んでいたなんて驚きですよ。私はダニエル カレンといいます、実は」

「旦那様」

肩に乗せられ海を渡ってきた女が黒人に手を引かれ、私達の元へやってきた。彼女は焦げ茶色のワンピースの胸元に手を当て呼吸を整えた。

「ああ、この女性は我が家のメイドで」

「テレザといいます」

彼女は軽く会釈をした。どこかで聞いた名前だと思った。

「あなた方がこの島に来られた理由は分かっています」

私の言葉に大げさに反応したのは女の方だった。目を大きくして口に手を当てた。

「もしかして、奥様がいらっしゃるんですか？」

「ええ、います」

ダニエルは唇を振るわせた。女は息を止めたまま、まだ信じられないと口に当てた手を下ろせないでいる。

「それで妻は今どこに、早く合わせてください、早く元気な顔が見たいんです」

彼は私の手を強く握り訴えた。しかし私は断った。彼はそれを勘違いした。

「まさか死んだんじゃ？ そうなんですか？」

私の答えを二人とも恐れているのが分かる。

「いいえ、ちゃんと生きています。ただ病気で寝ていますがね」

彼女が無事だったという安心感と、病気と知らされた戸惑いでどう感情を表してよいのか分からずにいた。

「何の病ですか、早く合わせてください。すぐ国につれて帰り医者に見せますから」

私はもう一度首を横に振った。

「あなたに合わせるわけには行きません」

彼は一気に険しい表情になり、私の襟を掴み上に押し上げた。

「何を言っているんですか、彼女は私の妻だぞ」

彼女の看病のせいで痩せ細っていた私は今にも宙に浮きそうだった。しかし私はその手をふりほどこうと彼の胸に手を押し当てた。

それを見た黒人二人が私をとりかみ羽交い締めにした。私はひるまず言った。

「あなたにそういう資格があるのか？」

ダニエルの腕にいつそう力が入り筋肉の筋がくっきりと皮膚に浮き出た。

「どういう意味だ」

「あなたが一番良く知っているはずでしょう、私は何もかも彼女から聞いている」

傍らにいたメイドはダニエルを見ると、そのあと決まり悪そうに目を伏せた。

「他人のあなたに関係ない」

「元はあなたも彼女とは他人でしょ。彼女自身が会いたくないと言っているんだ」

彼は絶句した。メイドも何も言えなかった。

「嘘だ、全てあなたの出任せだ」

「何故あなたはこの島に来たんですか」

「助けにきたに決まっているじゃないか」

「そんなことを聞いていない、彼女と離婚したがっていたあなたが何故ここに来たのかと言うことですよ」

「何故そんなことを言わなくちゃいけないだ」

「私がいなければ彼女はとっくに死んでいた。あなたには私の質問に答える義務がある」

ダニエルが絞り上げた襟が喉に食い込んだ。しかし私は平然とした顔で彼を睨み返した。

彼の目は見る見るうちにつり上がり唾を私に浴びせた。

「もしかしてもう二人は出来ているのか？ だからだろ、妻を返したくないんだろ」

「それじゃあいけませんか？」

「なんだと」

「確かに私は彼女を愛しています。それもあなたより深く」

ソフィアにせがまれてもなかなか言えなかった言葉を今は堂々と言えた。

「だまれ」

私が言い終わらないうちにダニエルの拳が私の右頬にめり込んだ。私は地面によるめき倒れた。黒人達は私の両肩を動けないように押さえた。それを見たメイドがすかさず駆け寄り私の盾になった。「止めてください、この方は奥様の命の恩人ですよ」

私は切れた唇から流れ出した血を拭い、話し続けた。「私は彼女を返すつもりはない。あなたがソフィアにしてきたこと、そしてあなた言った言葉で彼女がどんなに苦しんでいたか知らないでしょう」

振り上げられていた拳がピタリと止まった。そしてその手をゆっくりと下ろし砂の上に座り込んだ。「私だって努力した。他国から一人で嫁いできた妻を大切にしたつもりだ。だが彼女は幼すぎた、私に安らぎはなかったんだ。いつもいつも妻に振り回され飽き飽きしていたのさ、子供が子供を産んだようなものだった」

ダニエルは一握の砂を掴んだ。強く握ろうとすればするほど乾いた砂はさらさらと手から落ちていった。「でも彼女は自分の過ちに気づき詫びたはずでしょ、違いますか？」

「ああ」

「なら何故」

私の口の中で血の味が舌全体に広がっていた。どうやら唇だけでなく頬の内側もかみ切ったようだ。唾を貯めて吐き出した。泡混じりの真っ赤な唾液がコールタールのようにべったりと砂の上に広がった。メイドは慌ててスカートのポケットから刺繍の施された絹のハンケチをとりだした。「これを」

彼女はそのハンカチを私の切れた唇に押し当てた。私はその手を払った。「結構です」

しかし既にハンカチには血が染みをつくり、絹の白さが血の赤さを際立たせていた。ダニエルもその赤く染まったハンカチを見ていた。「そのときはどう接すればいいか分からなくなっていたんだ」

彼は僅かに手に残った砂の粒を見た。照りつける太陽の光を受けラメのようにその砂粒が光った。「あなたは自分は何も悪いことはしていないと、彼女ばかり責めている。そうやって何もしないで遠くから眺めていただけじゃないんですか」

私は血で汚れた手で萎えている彼の両肩を揺すった。「あの時、同じ立場なら君だって逃げたはずだ」

「ええ、そうかもしれません」

「なら」

「しかし、少なくとも彼女のせいだけにだけはしなかった。同じくらい自分も責めたはずですよ」

偽らざる気持ちだった。「じゃあはどうしたらよかったというんだ」

「何故、本音を口に出してぶつかるうとしなかったのです。そんなことだから理解し合えなかったんだ。自分がどうして欲しいか訴えれば良かったんだ」

「綺麗事だ、そんなことぐらいで上手くいくなら離婚する夫婦なんていないはずだ。夫婦は恋人とは違うんだよ、生活はそんなに甘くない、全て言ってしまう方がいいという物じゃないだ」

ダニエルは吐き捨てた。「偉そうな、貴方は何一つ言えずに逃げたくせに」

私は彼に当てつけるように笑った。「なんだと」

「島の暮らしがいかに過酷かあなたは知らないでしょ。ここではあなたの言うように、そのうちに分かってくれるなんて期待していたら死ぬんです。私達は生きる為には本音をぶつけないでいられたかった。けれどそうしたからこそ分かり合えたんだ。でなければ私は彼女をとっくに見放していた。自分が生き延びるのさえ大変なのに、女を看病して生きるのは並大抵の事じゃないんだ。あなたに出来ますか？嘘だと思うならここに暮らしてみたらいい」

偉そうなことを言っているのは自分の方だという事くらい百も承知だった。初めは私自身がダニエルと同じように彼女を遠ざけていた。昔の自分なら馬鹿らしくて耳を塞いでいたことだろう。「空論だ、私達が暮らしているのは、こんな無人島じゃない、文明社会の中なんだ」

「言い訳ばかりですか。文明社会が聞いてあきれれる。いくら時代が変わっても男と女は何も変わっちゃ

いないんじゃないですか」

「なにがいたいんだ」

「女と男は全く別の生物だと言うことですよ、分かり合えるはずなんてないんだ。魚と鳥ほどかけ離れているのかもしれないってことですよ。だからこそ言葉にして言わなくちゃいけなかったんだ。それでもまだ自分を守る言い訳を見つけようとするなら、今すぐ帰ってください。彼女もそしてお腹の子供も私が最後まで面倒見ます」

私はまくし立てるように何も考えず思っていることを吐きだした。

「お腹の子供？妻は妊娠しているのか？」

私は頷いた。ダニエルは私を見た。言いたいことはわかった。そして首を振った。

「私の子供だったらどんなにうれしいことが、しかし勘違いしないでください。私はまだ彼女と性的関係をもったこともない」

「じゃあ誰の子なんだ」

「知りたいですか」

「どういう意味だ」

「それなりの覚悟が必要だという事ですよ」

ダニエルは暫く考えた後、腕を組み上目遣いで私を見た。

「いいだろう」

ダニエルの目をにらみ返し念を押した。

「これから話す事をどう思うかはあなた次第です。ただ彼女自身にはなんら落ち度もないことは確かです」

私はソフィアが海賊達に陵辱されたことを何一つ隠さず話した。メイドはスカートを握りながら震えていた。話が途中までいくともう聞いていられないと言うように、私の膝に手を置き訴えた。唇は真っ青だった。

「もうおやめ下さい、奥様がお可愛そうです」

ダニエルは私の話を聞いて驚きを隠せない様子だった。

「テレーザ、お前達はただ海賊達の船室に閉じこめられていただけと言ったじゃないか」

彼女は大粒の涙を落としながら首を激しく振った。

「もしかして、お前も男達に」

メイドの女性は頷きはしなかった。しかし、その横顔は全てが真実だと言うことを物語っていた。

彼女は目にかかったほつれ毛を耳の後ろに整え言った。疲れた顔だった。

「生きるにはそうするしかなかったんです」

ダニエルの顔に一気に汗が噴き出した。額の汗は頬を伝い襟元を濡らしていった。

私はようやく気づいた。テレーザというこのメイドはソフィアと一緒に船旅をしていて彼女と同じように海賊にとらえられた女性だったのだ。

「あなたのことも彼女から聞きました。感謝していましたよ」

私の膝の上にあった彼女の手を私は握りしめた。

「いいえ。私は奥様に謝らないといけないのです」

彼女は私に訴えた。

「私は奥様を残して一人だけ助かったのです」

よほど後悔していたのだろう。今にも断罪して欲しいと言わんばかりだった。

「そんな事はないよ、君一人だけでも助かってよかったと彼女は喜んでいたんだ。何も恥じることはない」

彼女は砂浜に突っ伏して泣いた。この島に来るまで心に大きな鉛の玉を抱えてきたのだろう。

ダニエルは開いた口を締められないでいた。そんな彼に向かって私はなおも責め立てた。

「彼女は心にも体にも大きな傷をおった。それにもう子供も墮胎できない。彼女はもうあなたと言い争いたくないし、今の姿も見られたくないと言っている。彼女を思うなら帰ってやってくれないか」

私は自分の感情の匂いをさせず事実をそのまま述べた。ダニエルのうつろな瞳は宙を泳いだまま言葉を口から涎のようにこぼした。

「さっき妻は病気で寝ていると言ったじゃないか、大丈夫なのか？」

「酷い妊娠中毒症です。もうあと何日も持たないでしょう」

ダニエルは唾を飲み込んだ。

「それでも彼女は帰らないと言っています。なぜだか分かりますか？」

「それほど私は憎まれているということなのか」

私は静かに首を振った。

「いえ、その反対です。今でもあなたが好きだからこれ以上嫌われたくないんですよ」

認めたくない言葉だった。ソフィアが私を求める気持ちに嘘はないだろう。しかしどうやっても私の目の前にいるこの男（ダニエル）への想いは消せなかった。彼女の心の片隅に彼がいることは確かだった。しかしこれを認めなければ私の彼女への思いは断ち切れなかったと思った。私の言葉を聞いて彼は言った。

「本当ですか？」

「彼女に聞きなさいよ、ばかばかしい」

「そ、そ、そうですね。だったらソフィアに合わせて下さい。もし彼女がまだ許してくれるなら連れて帰ります」

「あなたはその言葉の意味分かって言っているんですか？彼女は帰りたくないと言っている。そしてもう私のものなんですよ。あなたがいなくても私達は充分幸せなんです」

「それじゃソフィアが死ぬだろう」

「ご心配なく。私もあとを追いますから」

「まってくれ、彼女がいないと私が困るんだ」

ダニエルは何度も何度も頭をさげた。メイドもこんな主人の姿を見たことがないのだろう、信じられないと目を丸くした。

「私がこの島に来たのは、別に偽善心からじゃない。初め彼女を捜しても発見できなかったときは気持ちのどこかでやっとこれで自由になれると思っていた。しかし半年が過ぎ、その間に愛人の子供が死にその愛人もアメリカに帰り、私は息子と二人だけになった。ふと気づくといつも彼女の無邪気な笑顔を思い描くようになっていた。あれほど苦しめられたはずの笑顔のなのにいつも思い出した。忘れようとしても息子の笑い顔は彼女そっくりなんだ。切なくてたまらなかった。ようやく気づいた本当に私が愛していたのは彼女だということ。しかしもう彼女はいない。そんなときだ蛇頭という組織から連絡が入り、金と引き替えに数ヶ月ぶりにテレザを連れ戻した。私は何があったかを聞いた。それでこの島の付近に流れ着いているかもしれないと思い始めた。そんな私の淡い願いが確証に変わったのはこれがオーストラリアの港に流れ着いたからだ」

ダニエルはポケットからビニールに入った紙切れを取り出した。私はそれを受け取ると広げてみた。

そこには消し炭で書かれた文字があった。

『私はソフィア・カレン 死に神の宝石箱 島で助け求む 連絡 オーストラリア カレンカンパニー』

そして最後には『Sofia』と血で書いた署名

「オーストラリアの漁船の網にこれが入ったワインの瓶が引き上げられたんです。」

そういえばソフィアに聞いた事がある。私達がいがみ合っていた頃、彼女は何とか助けを求めようと、数本の瓶を流したと。しかしそれが誰かの目に触れることは奇跡にも近いことだと彼女もあきらめていた。こんな事があるなんてと思った。やはりこれも神と蛇に仕組まれし筋書きなのだろうか。

「これを見たらもうじっとしていられなかった。妻は生きています、私に助けを求めていると。これは誰の為でもない、私にも妻を必要なんだ」

「彼女のお腹の子供はどうします？誰の子か分からない子です。でも私や彼女にとって今日まで必死につなぎ止めてきた大切な命。その命をあなたの息子と隔てなく愛する事が出来ますか？貴方には出来ないでしょ」

ダニエルにどうやって欲しいのが自分でもよく分からなかった。しかし彼が次に言う言葉を私は封じようとしていた。何も答えないで欲しい。諦めてくれたらと心の奥で願った。しかし彼は答えてしまった。

「それが出来たらいいんですか？」

「そうじゃない、これは交換条件じゃない。それに自分の為に彼女を連れて返ろうなんて虫が良すぎるだろ」

「どういわれても仕方ありません。しかしこれだけは神に誓って言えます。もう彼女を哀しませるようなことはしなません。もちろんお腹の子も」

その言葉を聞き、私はダニエルが恨めしかった。横にいたメイドは首をうなだれた。

「神になんて誓って貰っても仕方ない。誓うなら私にその証を立てて下さい」  
そう言うと私はいつも魚を裁くときに使っているナイフを彼の前に置いた。  
「これであなたの身体に一生消えない傷を刻めますか？今の誓いを忘れる事が出来なくなるくらい深い傷を」  
ダニエルは私の顔を見て瞬きもせず恐る恐る聞いた。  
「じゃあ妻を返してくれるのですか？」  
私は下を向いき頷いた。今にも泣きそうな顔を見られたくなかった。  
「ありがとうございます」  
ダニエルはそう言うと受け取ったナイフを自分の太股に振り下ろした。小さなうめき声を上げた。そして刃先を肉の奥へ押し込み縦におろした。肉がパツクリと裂け、カーキ色のズボンが赤く染まった。メイドが悲鳴を上げた。彼の握っているナイフの柄から血がしたたり落ちた。彼は私を見て微笑んだ。激痛に耐えているはずのその顔は要約苦しみから解放されるという安らかな表情をしていた。私は悲しかった。ダニエルの気持ちが本物だと知ったからだ。これでもうソフィアと死ぬことも出来ない。私は彼の足からナイフを抜き取った。そしてポケットに入っていた布きれで足の付け根を縛った。  
「わかりました。ソフィアを助けてやってください。私にはもうどうしてやることも出来ない。彼女はまだあなたを愛しています。私の愛したただ一人の女性です。死なせないでください」  
私はダニエルの傷ついた足にすがりついた。彼は私の肩に手を置いた。  
「あなたは最初から私に妻を返すつもりで、わざと　　そうなんですね」  
今でもソフィアを離したくない。このナイフでこの目の前の男を殺して彼に成り代わられたなら。  
「私はあなたの何倍も彼女とそのお腹の子を愛しています。ただこうするしかないかないんです」  
「ええ」  
「貴方が憎くてたまらない」  
「何故貴方はそこまで妻を」  
「彼女に同じ事を聞かれました、でもその時は私もよく分かりませんでした」  
「今なら？」  
「ええ、多分、ソフィアの無邪気な笑顔が私を罪を洗い流してくれたのだと思います。あの人ケラケラと笑うその空気に包まれていると私は幸せでした。」  
「女って何でしょうね」  
男二人は沈黙した。

父は私が産まれる前から右足を引きずるように歩いていました。そしてどこへ行くにも杖を持ち歩いていました。私はあるとき父に何で怪我をしたの？と聞きました。父は笑いながら答えました。『若いとき鉱山を視察にいったとき、誤って採掘の機械で怪我をしてしまったんだよ』と。しかしそれは嘘だったのです。  
「お父さんは優しくしてくれたかい？」  
老人は私に聞きました。  
「ええ、いつも抱きしめてくれました。そんな私に兄は嫉妬したぐらいです。だから私が父の子でないと母に聞かされたときは信じられませんでした」  
私は子供の頃を思い出しました。父は母も呆れるほどのフリルのついたスカートを買ってきては、それを私に着せて恋人のようにパーティーに出かけました。そして会う人会う人に自分の娘だと自慢げに言うのです。私は恥ずかしくていつも下を向いて、父のズボンを掴んでいたように思います。  
「そうかい、彼は約束を守ったんだね」  
老人は又私の頭をなでました。こうされていると自分が何歳なのか分からなくなっていました。  
「それで母はどうしたんですか？」

私は彼がソフィアに会う前、一つだけ約束させた。彼女には私が納得した事を話さない事。つまりは拒否する私の言うことも聞かずに、強引に連れ戻しに来たと彼女に思わせておいて欲しいといった。彼は私の意図がどこにあるのかはっきりとは分からない様子だったが、私を信じて何も言わなかった。そして私はダニエルを小屋へ案内した。今も昔も変わらないが椰子の葉で出来たこの住まいを見て、

彼はあまりのみすぼらしさに唖然とした。住めば都なのだが、彼らには原始人の住居にみえたのだろう。私は普段することのないノックを玄関ドアの枠木にした。そして小屋の作りとしては一番手をかけたドアをゆっくりと開けた。私は薄暗い小屋の中に入って驚いた。普段は私の与えたシャツとズボンで生活していた彼女が、この島に流れ着いたときに来ていたワンピースに着替えていた。そして乱れていた髪も紐で束ね、ベッド端にきちんと腰を掛けていた。今日はとても具合が悪くて寝ているのも切ないはずなのに、そこに座っていた。彼女に気迫を感じた。

「連れてきたよ」

「ええ」

私の後ろからつづいて低い玄関の横木をくぐりダニエルとテレザが入ってきた。

「ソフィア」

ダニエルは彼女を抱きしめた。私だけの物でなくなる一瞬だった。メイドもソフィアに抱きついた。

「あなた」

見たこともない彼女の表情だった。妻の顔なのだろうか。

「奥様、よくご無事で」

テレザはスカートの裾を握りしめながら崩れ落ち詫びた。

「テレザあなたも良く生きてくれたわね、心配してたのよ」

「申し訳ありませんでした、私だけ」

ソフィアはダニエルの足の血に気づき私に振り向いた。それに気づいたダニエルは彼女に言った。

「これは船から海に下りるときに海中の岩にぶつかったんだ。彼が縛ってくれたんだよ、礼を言ってくれ」

私は否定も肯定もせず壁により掛かり事の成り行きを静観した。

「彼がしたんじゃないのね」

「当然だろ、私にはボディガードが二人もついてきているんだから」

ダニエルは小屋の外に立っている黒人二人を指さした。彼女は胸をなで下ろした。

「アルフレッドは元気になっていますか？」

「ああ、どんどん君に似てくるんだ、君が帰るのをずっと待ってる」

「あの方が面倒見ているんでしょ」

そこにいる誰もが愛人のことだと直ぐ分かった。ダニエルは彼女の横に座った。

「とっくにアメリカに帰ったよ」

「嘘よ」

メイドはソフィアの前にひざまずき手を添えた。

「いいえ奥さま、本当です。あの方のお子さまが病気で亡くなられて、私が旦那様に助け出されてオーストラリアのご自宅にいったときにはもうおられませんでした。今はメイドの私達でアルフレッド様をお育てしています」

「本当なの？」

「私は信用できなくても、テレザの言うことなら信じられるだろう、だから帰ってきておくれ」

ダニエルはソフィアの背中に手を回して言った。私は足を組み替えて爪を噛んだ。ソフィアは私に目で何か訴えた。私は答えず、ただじっとしていた。」

耐えきれずソフィアは口を開いた。

「聞かなかった？彼とこの島で暮らすの。それに見ての通り彼の子を身ごもっているのよ。だからあなたの所へ帰るつもりはないわ、今は本当に幸せなの」

ソフィアは自分の言葉を必死に濁らせたようとした。

「一緒に育てよう」

ダニエルはソフィアを引き寄せた。彼女は彼にそう言われて一瞬笑顔を見せた、しかしそれも直ぐに陰しい表情に戻った。

「あなたおかしいんじゃないの、自分の奥さんを妊娠までさせた男がここにいるというのに、その男の目の前でそんなこと言うなんて」

彼女はベッドから立ち上がろうとした。それを押さえてダニエルは話を続けた。

「私には君が必要なんだ、そしてアルフレッドにも」

「愛人がいなくなったから、子守のために連れ戻すんでしょ。私は跡継ぎを作るための機械でもないし、ベビーシッターでもないの。あなたに他人の子供を育てられるはずがない。どうせ産まれたら私のよ

うにどこかの孤児院に捨てるんでしょ。そんなこと許さない、この子は彼が必死に救ってくれた子供なの。もうあなたの好きにさせない」

ソフィアはお腹を両手で覆った。

「私が悪かった。君が私に詫びたときに信じれなかったんだ。でも今の気持は嘘じゃない、その子を大切に作るから私の元に返ってきてくれ。やり直したいんだ。私は君の笑い声が響く家に毎日帰りたいたいんだ。だからもう一度夫婦になろう。ソフィア、私は今でも君を愛している」

あれほど固い決心をしたはずなのに、苦悩にゆがむ彼女の顔があった。

「無理よ・・・」

「何故？」

「彼にも私が、そうでしょ？」

ソフィアは私に向かって目で助けてと叫んだ。私は誰をそして何を助けたいのか、彼女の心の針はダニエルに大きく傾いているというのに。

「あなたもしつこい男ですね。彼女は帰らないと何度も言っているじゃないですか」

私の答えがさっきの話と違うと思ったのだろう。ダニエルは私の本心がどちらにあるのか計りかねていた。私はそれを見てもお構いなしに話を続けた。

「ソフィアは私のものなんです。もう諦めてくれませんか？みっともないですよ、ダニエルさん」

私はさっきと反対にダニエルの襟を掴んで彼女から引き離そうとした。

「おい？」

「だまれ、ソフィアは俺のものだと言っただろ」

ボディーガードが飛んできて私に殴りかかろうとした。ソフィアは私を守ろうとした。

「お願いだから止めて。ダニエル、私はこの人を置いていけない、かわいそうだわ」

かわいそう　、かわいそう　、私は口の中で言葉を回した。

「ダニエル、私はもういいの。この人の側にいる、だからもう　　」

「しかし君はその身体でどうやって」

ダニエルはソフィアの身体を揺さぶって、最後の想いを伝え続けた。

しかしソフィアは貝のように口を締め、何一つ話さなくなった。私は棚に置いてあったワインの瓶から水をグラスに注ぎ彼女に渡した。

「ソフィア、薬の時間だ」

「え？」

驚きと共に彼女は私を見た。私は顎で合図した。

「はい」

彼女は枕の下から三粒の薬を取り出し手のひらに載せた。ふるえているその手を見てダニエルは不安を感じ薬を取り上げようとした。彼女はとられる前に手のひらを閉じた。ダニエルは言った。

「何の薬だ」

「彼は本当のお医者様なの、だから私は助かったのよ。この薬は　　」

私は答えた。

「栄養剤のようなものさ、この島の食事では捕れないミネラル成分が含まれている。妊婦には抗生剤は与えられないから、もうこれ以上悪くならないようにしているんだよ。さあソフィア早く飲みなさい」

私は強い口調で言った。彼女は小さな声で聞いた

「私だけ？」

「私もあとでちゃんと飲むよ」

やはり不自然な会話だった。ダニエルはなおも聞いた。

「何故あなたも飲むのです」

「私だって病気になりたくないからですよ。ほらこれじゃあ君に無理強いしていると思われるじゃないか、飲みたくないなら飲まなくていいよ」

「ごめんなさい、今飲みます」

彼女は手の中の薬をみつめ一息ついた後、一気に3粒を口に含み水で一気に胃に流し込んだ。周りにいた者は心配そうに彼女を見つめた。ソフィアは顔を上げ、ゆっくりと目の前にいる人たちの顔を見渡した。まるで目に焼き付けているようだった。薬が少しずつ効き出したのだろう瞼が重くなっていった。

「どうしたソフィア」

ソフィアの変化に気づいたダニエルは彼女の頬を叩いた。

彼女は口を開いた。

「ダニエル、こんな所まで私を捜しに来てくれてありがとう。とても嬉しかったわ。でももう遅かったの。アルフレッドにはママは見つからなかったって言って。死んだなんて言ってはあの子が哀しむからだめよ。今日やっとあなたに許してもらえた気がする。でもこれは罰なのよ、私は彼と一緒にこの島で死ぬわ。でもあなたに最後に愛しているって言われて嬉しかった」

もつれていく言葉、左右に大きく振れる身体。ダニエルは私に食ってかかった。

「妻に何を飲ませた、早くどうにかしろ」

「ダニエル、二人で約束したの。私がつれていかれそうになったら一緒に死のうって。だから彼を責めないで」

ダニエルは彼女の身体を抱きしめて泣いた。

「逝くな、ソフィア、逝かないでくれ」

ダニエルを見る彼女の顔は、教会のマリア像に見えた。

「愛しています」

それが私が聞いた彼女の最後の言葉だった。今でも思うあの言葉は私にも言われていたのだろうか？それとも全てダニエルへのための言葉だったのだろうか。

いつのまにか窓の外にはあかね雲が浮いていました。夕陽が私と老人の顔は赤く染めていきます。私達は互いの赤い顔を見ながらクスリと笑いました。

「この島の夕日は本当に赤い。それも切なくなるほど美しいんだ。その日、彼女が乗って帰る船も黄金の船のように光り輝いていた」

老人は陽に手をかざし、透けて見える手の甲の血管を反対の指でなぞりました。私には老人のその仕草が古びた愛車の部品をさするオーナーのように見えました。よく今日まで持ちこたえたとさび付いたボンネットミラーの根本を磨いているようでした。老人がかざした手の小指から一差し指の距離を流れていく雲を私は目で追いました。そして一塊りの雲が人差し指の端から離れたとき訪ねました。

「毒薬ではなかったんですね」

「睡眠薬だよ。それも相当強いやつさ。普通なら一錠ですぐ眠くなる、それを三錠も飲んだんだから一日経っても目覚めたかどうか。まあ、ああでもしなかったら彼女をここから連れ出せなかっただろう。相当恨まれたらうがね」

そう言いながらも老人の顔は後悔しているようには見えませんでした。私は彼を強い人だと思ふ反面、とても弱い人かもしれないとも思いました。弱いからこそやっと手に入れた母との思い出を守り通したのかもしれない。

「しかし、あの日の夕日は忘れない。波間に消えていく船を見続けていたら、その向こうに沈んでいく太陽が私の目に焼き付いてしまった。」

老人の顔は満足げに見えました。

「さあこれで全て話し終えたよ」

「終わりじゃないでしょ、おじさんの苦しみはそこから今日まで」

「そんなものどうでもいいことさ」

老人はかざしていた手を下ろすとベッドから身体を起こし、今度はその手を後ろ手にして窓の外に目をやりました。

「ねえ、その後蛇に会ったの？」

部屋の隅に置いてあった蔓で編んだ籠を老人は指さしました。籠は背中に背負えるように二本の肩掛けの紐がついていました。深い籠は暗くて中にあるものが見えませんでした。私は両手で持ち上げるとその重さに驚きました。老人は私から籠を取り上げると、自分の横に置いて中から何かを取り出しました。

「夕日の向こうに彼女の乗った船が消えると夜は瞬く間に戸張をおろした。私は一人とぼとぼと湖への道を歩いた。そして森を抜ける湖へ出た」

湖面に映る月は腐った血のように赤く揺らめいていた。岩の上には蛇が首を長くして私を待っていた

「涙のお別れはすんだかい、さぞかしつらかったろうねえ」

可哀想で見てもらえないとでも言いたげに目を細め、同情たっぷりの哀れみの言葉を並べる蛇。

「いや、おまえに感謝するよ」

「ほう、言うじゃないか」

蛇は二つに裂けた舌を私の首に巻き付け引き寄せ睨み付けた。生臭い息が降りかかり、思わず吐きそうになった。

「そんな口がたたけるのも今のうちさ、泣き言一つ言えないようにしてやるよ」

そういうと巻いていた舌をほどき、私の身体を後ろに突き飛ばした。そしてさっきとは全く違った陰湿な目で私に命令した。

「昨日私が落とした鱗を持ってるだろ、おだしよ」

言われるがままにポケットか二枚の鱗を取り出し手のひらにのせた。

蛇はなにやら唱えると鱗に息を吹きかけた。するとそれはノミとハンマーに変わった。あまりの重さに私は落としそうになり、慌てて抱きかかえた。

「そのノミとハンマーで愛しい女の姿を岩に刻むんだ」

持っていることさえ容易でなさそうな二つの道具、私は正直たじろいだ。

「一日たりとも休むことは許さないよ。おまえが死ぬまで続けるんだ。あきらめて投げ出せば女も娘も死ぬ」

「約束は覚えているだろうな」

「娘のことかい」

「ああ、そうだ」

「わかったと言ったはずだよ、しつこい男は嫌いだよ」

「頼む」

「なら、たった今から彫り始めな。景気よくノミの音を響かせるんだ。あたしには打ち鳴らす一振り一振りがあんたの苦しみが聞こえるようで愉快でしょうがない」

私は両手にノミとハンマーを持った。すると蛇はしっぽの先で掘る場所を指し示した。

「精一杯がんばりなよ、そして早いとこ限界を知るんだね。諦めてノミ投げ出すときのあんたの顔が早く見たくしかたないさね」

蛇はそう言うと笑いながら湖のどこかへ消えていった。

太いノミと大きなハンマーを膝の上に載せ、老人は愛おしそうにそれを見ていた。

「こいつらもよく働いてくれた」

「それからずっと彫り続けてきたんですか？」

「ああ、来る日も来る日もずっとな」

ノミの表面はやや錆に覆われてはいましたが、ハガネで出来た先端は夕日を受け小さなルビーのように深紅に光り輝いていた。

「病気になった二年前からは彫るペースも落ち、結局彼女を弱らせて死なせてしまった。すまなかったと思っている、おまえのウェディングドレスお母さんに見せてあげられなくて」

母の「生きさせてもらった」という言葉の意味、そしてなぜ母の具合が悪くなったのか、また医者がいくら調べても明確な病名が特定できなかった事など、これで全てが明らかになった。

「母は言っていました。もう充分生きてって、何も思い残すことはないって」

「ならよかった」

「ええ」

「・・・一つ聞きた事があるんだが」

老人はなかなか言い出そうとはしませんでした。顔をのぞき込むと目を逸らそうとします。ようやく聞こえるか聞こえないかぐらいの小さな声でいいました。

「彼女は私も愛してくれていたのかな？」

その言葉を聞き私は胸が熱くなりました。おもわず老人の手を取り自分の胸に押し当てました。

「母はあなただけのものにはなれなかったけれど、あなただけを思う母は間違いなくいたはずですよ」

だから私をこんな危険な島までよこしたんです。それに母はあなたに愛された誇りを私に見せつけようとしていたのかもしれませんが」

老人は嬉しそうな顔で

「これで30年の苦しみが癒される、もう何も思い残すことはないよ、やっと死ねる」と微笑みました。

「母みたいな事言わないでください」

私は母の時のことを思い出してしまいました。

「そういわないでくれ、私ももうそろそろ休みたい。それにこれでやっとソフィアに会える」

老人は本当にそれを願っていたのだと思います。ある本で読んだことがあります。そこには次のように書かれていました。『死を恐れる者は何一つやり遂げていないからだ。しかし死を恐れぬ者は何もすることがなくなった悲しき者だ』

「私はソフィアに出会えて良かったよ」

老人の記憶の中の母はどんな顔をしているのでしょうか。屋敷にあるアルバムの母とはどんな風に違うのだろう。その時、私は彼の記憶の中の母が現実にこの島にあることに気づきました。

「母の姿を彫った岩はどこですか？私も見てみたいんです」

「見せられないよ」

「何故ですか？」

「たとえ親でも自分の日記は読まれたくないだろ？それに私は人一倍不器用だから自分の彫ったものなんて恥ずかしくて人に見せられないんだ」

という彼は頭をかきました。

結局は教えてもらえぬまま夜になってしまいました。老人は用足しに行ってきた小屋をでました。しばらくたっても帰ってこないでランプを片手に外に出てみると、暗闇の向こうで苦しむか細い声が聞こえました。急いで声のする方へ駆け寄ると、ランプの明かりの先に老人がまたお腹を押さえ倒れていました。急いで彼を小屋まで連れて帰り、少しでも痛みが和らげばと背中をさすり続けました。

「何か飲みますか？」

「イチゴ水がいいな」

私は小川に行って冷たい水をくみ、それでイチゴ水を作り老人に渡しました。彼はそれを2口3口口に含むと、時間をかけてそっと胃に流し込みました。

「おいしかったよ、ありがとう」

けれどももうこれ以上飲めないとグラスを私に返しました。老人は息をするのも切なそうでした。汗で濡れたシャツを着替えさせようと服を脱がすと、お腹がまるで妊婦のようにふくらんでいたのです。老人もそれに気づきニッコリと笑いました。

「あれ、私にも赤ん坊が産めるらしい」

腹水がたまった事くらい素人の私にも解りました。しかし老人があまりにも楽しげにジョークを言うので思わず笑ってしまいました。つられて老人も笑いました。しまいには二人とも涙を流しながら笑っていました。この時、私は島に来て本当に良かったと思いました。何故なら、独りぼっちになったと嘆いていた自分が今はどこにも見あたらないのです。少しだけ生まれ変わったような気がして、痛むお腹を抱えて笑う彼に言いました。

「私もおじさんのような男性と巡り合うまで結婚しません、母には負けられないもの」

「きっと見つかるよ、私達の娘だもの」

「そうだといいけれど」

「大丈夫」

「エリザベス」

「なに？」

「おまえの顔をよく見せておくれ」

老人の瞳には私の顔が映っていました。

翌朝、目を覚ますと老人はベットから消えていました。ノミやハンマーが入った籠もありません。あんな身体で出かけるなんて無茶でした。すぐさま私は小屋を飛び出し老人を探しました。話しにあった崖の上の巨木につくられたベランダ、母が死のうとした間欠泉、二人が語り合った丘の高台。しか

し老人の姿はどこにも見あたりません。宛もなく島中を探し回るうちに三日が過ぎました。食料は老人が納屋に残してくれていましたが食べる気になれませんでした。

四日目の朝もまだ鳥も鳴かぬうちに私は小屋をでました。既に足は棒になり、なれない山歩きに膝は痛みました。それでも声を枯しながら森を歩き回りました。しかし、手がかり一つ見つけられず私は湖に戻ってきました。見上げると太陽はもう高く昇っていました。私はパンパンに腫れた足を水につけ途方に暮れていました。その時滝の方からキラリと光るものが水面の上を流れてきました。手に取ってみるとコインのようでした。しかし、よく見るとそれは硬い鱗。私は老人の話思いだしハッとしました。蛇の鱗？

私はそれが流れてきたほうを振り向きました。そこには山肌を勢いよく流れ落ちる滝がありました。何かある！私は水中をそのまま縁に沿って走りました。近寄ると水が激しく滝壺の岩を叩きつけ、水煙を上げていました。山肌は切り立っち岩が覆い被さるように張り出しています。病気の老人がここを登っていったとも考えられません。私は先ほど拾った蛇の鱗をもう一度見ようと太陽にかざしてみました。すると爆音をあげていた滝の水がピタリと止まったのです。そしてその向こうに今まで影も形もみえなかった洞窟が現れました。私は恐る恐るその中に入っていました。

入り口付近は外の光が届いていたので足下はみえましたが、不思議なことに洞窟の奥に進んでいっても暗くならないのです。それどころか太陽の光とは異なる輝きがあたりから放たれていました。次第にそれは明るさを増していきました。不思議に思い壁に顔を近づけてみるとそれは苔でした。苔は淡い光を放ち洞窟内部を覆っていました。私は不思議な光に吸い込まれるように奥へと引き込まれていきました。

「おじいさん、いますかー」

20メートルほど進んでいくと鍾乳石に掘られた彫像を見つけました。一目見て母だとわかりました。しかしそれは私の知っている母よりとても若々しく、優しい笑顔の母でした。また、彫像はその一体だけではありませんでした。奥に進んで行くほどに色々な表情の母が私を待っていました。怒り顔、泣き顔、大きな口で笑う顔、ふてくされ顔、そしてすやいやと眠る横顔。今にも話しかけてきそうなほど生き生きとした表現された彫像達。懐かしいような、初対面のような何とも不思議な気持で眺めながら歩きました。そして突き当たり行き当たった時、倒れている老人を見つけました。抱き起こし声を掛けましたが既に息を引き取っていました。眠っているように安らかな死顔。

「何でこんな身体で・・・」

私は傍らにノミを見つけました。顔をあげると先ほどとは全く雰囲気違ったの彫像がありました。それは母が女の子を自分の膝に載せ本を読み聞かせている姿。膝の上の女の子の顔をみて何故老人が病をおしてまでここに来たかがわかりました。私の顔を知らなかった為に彫れずにいた女の子の顔を、なんとか仕上げようと洞窟に来たのでしょう。だからあの夜、目に焼き付けるように私の顔に見入っていたのだと思います。

「そっくりよ」

私の目の前には老人が夢見たであろうもう一つの家族がありました。

「お父さん、ありがとう」

この時私は老人のことをお父さんと呼びました。父ダニエルも許してくれるでしょう。私は冷たくなった父の手からノミを外しました。

「もういいのよ、お疲れさまでした」

すると錆び付いていたノミが眩いばかりの閃光を放ったかと思うと蛇の鱗にと変わりました。そういえばハンマーがありません。とするとさっき水辺で拾った物がそうだったのでしょ。これで蛇と神が始めた賭は勝負がついたのだと思いました。父は勝ったのです。孤独と戦いながら生きた父、私は寄り添い泣き続けました。父ダニエルが死んだ時に以上に多くの涙が溢れました。そしてどれくらいそうしていたのでしょうか。なにやら洞窟の入り口の方からエンジン音が壁を反響し聞こえてきました。

何事かと慌てて外に飛び出しました。太陽を背にした黒い物体が島を横切っていくのがみえました。しかし逆光で見分けられません。私はそれがなんなのか確かめようと一旦滝を離れました。すると突然、島がうなり声をあげたのです。地面が激しく揺れ初め、湖の水が海のように波立ち溢れ出しました。振り返ると滝の上に突き出していた岩が次々に落下し砕けた石片が砲弾のように辺り一面に飛び散ったのです。

「お父さん」

しかし、もう中に入るなど不可能でした。落下した石が洞窟を塞ぎ、洞窟自体も跡形もなく崩れかけ

始めました。私はただ呆然と突っ立ち、その様を見ていました。

「早く逃げなさい！」

老人の声が聞こえました。気づくと足下の地面がひび割れ、今にも地中深く引き込まれそうになっていたのです。私は咄嗟にそこから逃げ出しました。しかし蛇のように割れ目は追い掛けてきます。必然的に海へ向かって走り出していました。地面は隆起し倒れた巨木が行く手を阻みます。ここ何日で見慣れた風景になったはずなのに、その時はどこを走っているのかも分かりません。恐怖に一瞬でも足を止めようものなら地割れの先端が奈落の底に引きずり込まうとします。私は狂ったように森を駆け抜けました。

「助けて、お母さん」

そう叫んだとき、目の前に海が開けました。砂浜に駆け下り後ろを振り返りました。山も丘も木も、そして島自体が深い穴に飲み込まれていました。これではこの砂浜も直ぐに埋没してしまう。一刻も早く海へ出よう、私は海岸線の端に打ち上げられたままになっていた自分の船目指し走りました。しかしそれも遅すぎました。水平線の向こうから巨大な津波が島目指して押し寄せてきていたのです。もう船まで走る時間ありません、たとえぎりぎり船にたどり着けたとしても、この波に吞まれて島に叩きつけられ粉々になるでしょう。私はもうどうすることも出来ず砂浜に立ちすくみました。

すると、突如、爆音と共に巨大なヘリコプターが頭上に現れました。先ほど見た黒い陰はヘリコプターだったのです。

「助けて～」

私の言葉を待たずしてアルミの梯子がおとされました。しかし梯子は宙で大きく揺れ、私はそれを掴むことが出来ません。津波はもう目の前まで来ていました。このままではヘリコプターまでやられてしまう。私は手を振り帰ってと叫びました。しかしずさまじいエンジン音に私の声など届くはずもありません。すると一人の男性が他の乗員の止めるのも聞かずに梯子を降りてきました。私はその男性をみて目を疑いました。それは私の婚約者、ファン氏だったのです。彼は懸命に身を乗り出しこちらに向かって手を差し出しています。私はこれが最後と無我夢中で彼に向かって飛び上がりました。彼は私の手首をしっかりと掴みギュッと握りしめてくれました。千切れそうに痛かったけれど死んでも話さないという彼の強い意志を感じました。パイロットはそれを確かめると機体を急上昇させました。加速度が私の体重を何倍にもさせたはずですが、それでも彼は歯を食いしばって耐えました。

「・・・」

足の下を大津波の先頭がかすめ、島の木々を次々に飲み込み、そしてなぎ倒していきました。

上昇を止めた機体は上空に静止し、操縦士は今だと手で合図しました。

「さあ」

ファン氏は私の腕を引き上げ、そしてしっかりと抱きしめてくれました。

「何故あなたがここに？」

「大切な人を迎えにきたのさ」

梯子はインチでまかれゆっくりと機体の中へ取り込まれていきました。私は助かったのです。機内の座席に座っても震えが止まりません。見下ろすと眼下の海を細長い巨大な影が島から逃げ出して行きました。あれがこの島の主なのでしょうか。

「もう安心していいから、エリザベス」

身も心も疲れていた私はそれを聞いて彼の胸に顔を埋め泣きました。大きな胸の暖かみが私を安心させてくれたのです。

「あなたが泣くところ始めてみました」

ハッとしました。今までの私は彼とビジネスライクに接し、努めて感情は表さないようにしていたのです。涙を拭き顔を整えようとしますが、そう簡単なことではありません。すました泣き顔なんてあるわけではないのです。そんな私を見て彼は笑って言いました。

「今の私はヒーローのような気分なんです。ヒロインは思う存分泣いて下さい」

この時だけはそうしかかった。でも私は彼に言わなくてはならないことがあったのです。私はしゃっくりが出そうになるのを堪えながらそれをいいました。

「私あなたに謝らなくてはならないことがあります」

「为什么呢？」

「今回の結婚のことですが」

そう言いかけたとき彼は私の口に手を当て、

「私に先にいわせて下さい。今回の結婚は白紙に戻してもらいたいのです」

私は驚きました。

「あなたが私を好きでないことは初めから分かっていました。自分自身政略結婚だと言いつけてきました。でも私はそんな器用な人間ではないのです」

「私の方こそ同じことを言おうとしていたんです」

「でもその代わり、一つだけお願いしたいことがあるんです」

首を傾げる私に彼は恥ずかしそうにいいました。

「私とおつき合いして頂けませんか？」

私は言葉につまりました。

「私はあなたが好きでした。以前ニューヨークの宝石レセプションであなたをお見かけしたときから気になっていたのです。だから今回の話があった時は天にも昇る気持でした。実際あなたとお会いしてお話するうちにますます惹かれていきました。でもあなたの目的は全て会社のため家の跡継ぎのための結婚でした。私は悲しかった。もしこのまま結婚したらあなたと本当の夫婦になれないと思ったのです。知っての通り私は前妻を病でなくし、もう寂しい暮らしには耐えられないのです。だからあなたと向き合って本当の私を知ってほしい。そしてあなたに愛し欲しいのです。これが私の最後の恋となるでしょう、断られる覚悟もしています。どうか私とおつき合いして下さい、あなたが好きなんです」

私は彼の熱意に打たれハイと返事をしてしまいました。そして父の言葉を思い出しました。『直ぐに見つかるよ、私達の娘だもの』父はこの事を言っていたのでしょうか。嬉しそうな顔を見せる彼の顔を見ながら私は運命を感じていました。

それから間もなく私は屋敷に帰り、翌日テレーザと二人で家族の眠る丘に行きました。草は伸び草原は一面緑の絨毯のようでした。タンポポの綿毛が青空に舞い上がり見知らぬ土地へと種を運んでいきます。故郷の匂い、新緑の大地には生命の活気で満ちあふれていました。

「ただいま、ママ、会ってきたわよ」

「そう、でどうだった？」

母は早速宿題の答案を私にせかしました。

「素敵な人だったわ」

「でしょ？うふふ」

「お母さんがうらやましい」

「うらやむ事なんてないじゃない、あなたを愛してくれる人が今はいるでしょ」

「うん」

「あなたは私とアルマンゾとダニエルの最愛の娘なの、みんながあなたを見守っている」

「わかったわ、うん、よくわかった、あの時お母さんに酷いこと言ってごめんなさい」

「ほんとそうおもってる？」

「ええ」

側で母と私の話を聞いていたテレーザも思わず笑いました。

「テレーザ、一つ聞きたいことがあるの」

私は老人に聞き忘れた事をハンケチで口を押さえて笑う彼女に聞いてみました。

「何でしょうお嬢様」

「父は初対面の私の名前を知っていたの、何故？」

テレーザは向かいの父の墓を見て言いました。

「私達が島を離れるとき、旦那様は眠っておられる奥さまを抱きかかえて、独り島に残られるあの方に言われたのですよ」

「なんて？」

「『この子に名前を付けて下さい。あなたと私達の子供なのです』、あのお方は奥さまのお腹の子が女の子と知っておられたようで、エリザベスとお付けになりました」

「そう、でも何故エリザベスなのかしら？」

「旦那様にはお話になりませんが私にはこっそり聞かせてくださいました」

「おしえて、ねえ」

私はその答えに過大な期待をしました。だってあの気高き『エリザベス』ですもの。しかしなかなかテレザは言おうとしません。私は待ちきれなくて彼女のスカートを引っ張りました。

「実は、なにやらあのお方が飼っておられた大トカゲを、奥さまが食べられたそうで」

「そのトカゲの名前がエリザベス？」

テレザは決まり悪そうに笑いました。私も可笑しくて母の墓に座って笑いました。

「お母さんがいけないのよ」